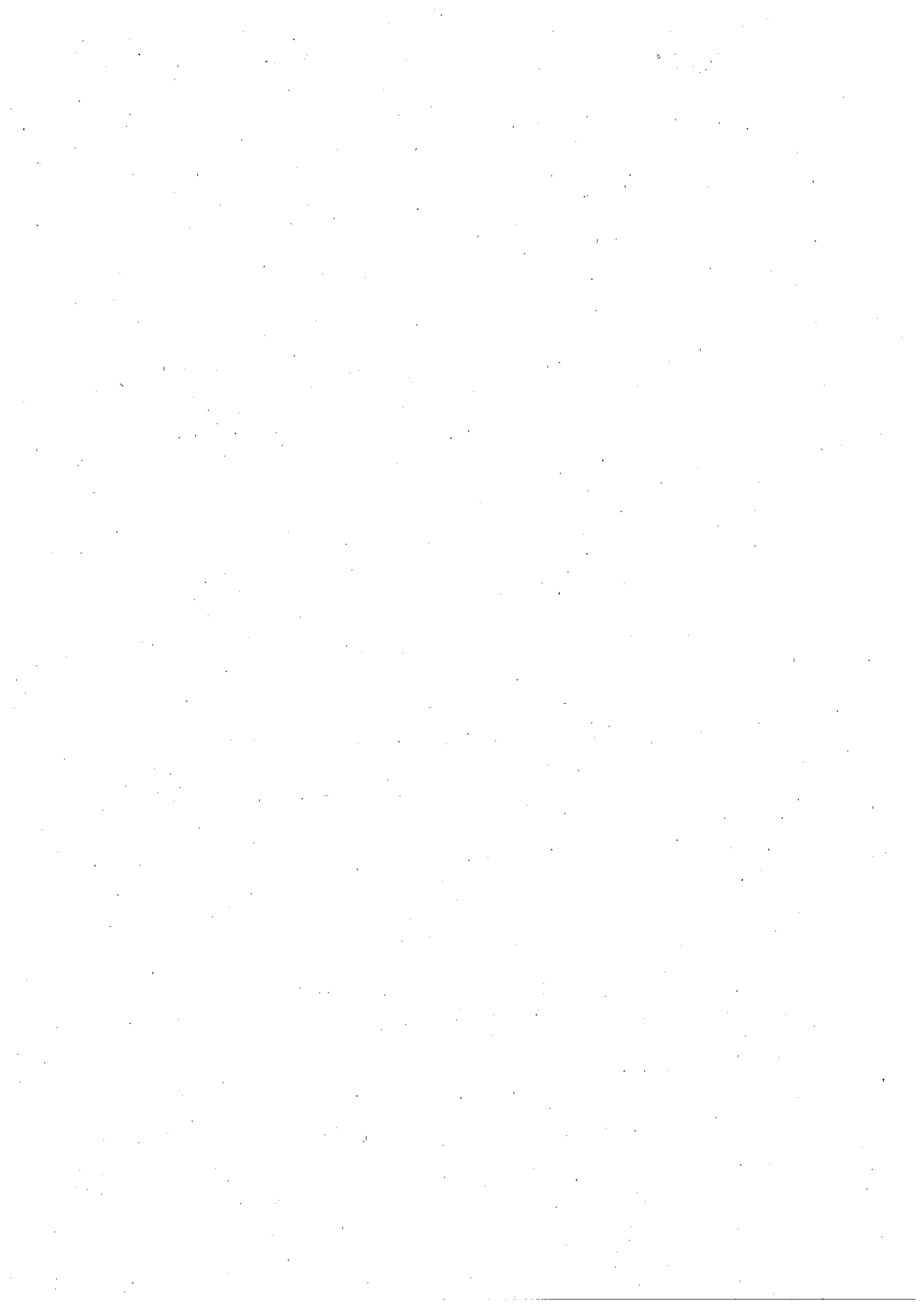


新宇土市史基礎資料 第二集

# 町在(二)

— 文政四～天保十年 —

宇土市教育委員会



(町在二) 目次

文政四年			
八八 坂田文助、芥川政右衛門 他	1		
八九 井上甚次 他	2		
九〇 次助、茂左衛門	4		
文政五年			
九一 井上甚平、井上甚次	5		
九二 西村新作、宮地十右衛門 他	6		
九三 今村彦兵衛、半七 他	8		
九四 吉田卯太郎	10		
九五 松本権平、松本甚藏	11		
文政六年			
九六 高濱孫助	13		
九七 糸石寿軒	16		
文政七年			
九八 松岡謙濟	17		
文政八年			
九九 江口儀兵衛	19		
一〇〇 大田黒万七	19		
一〇一 正垣熊次	20		
文政九年			
一〇二 松本岩右衛門	21		
一〇三 中園英之助、井上育太郎	23		
一〇四 田邊藤吉	24		
一〇五 中能勝平	24		
一〇六 太七、理三次 他	25		
一〇七 清八、伊助 他	26		
一〇八 中能勝平	27		
文政十年			
一〇九 芥川源之助、丈平	27		
一一〇 嶋田源之助	29		
文政十一年			
一一一 松岡謙濟	30		
文政十二年			
一一二 庄兵衛	31		
一一三 小山丈平、小山直助	31		
一一四 甚平	32		
一一五 近藤衛守	33		
一一六 孫七	35		
一一七 濱田三弥、木下喜兵衛 他	35		
文政十三年			
一一八 武平、万吉	37		
一一九 沢田忠右衛門	38		
一二〇 鎌賀儀兵衛、鎌賀尉七	38		
天保元年			
一二一 武七	40		
天保二年			
一二二 藤平	41		

一三三 彦太……………41

一三四 井上甚之助 他……………42

一三五 井上育太郎……………46

一三六 北野甚七……………47

一三七 大田黒圓右衛門 他……………48

一三八 字七……………50

一二九 伊左衛門……………51

一三〇 井上藤次郎 他……………52

一三一 木村政吉……………55

天保三年

一三二 澤田忠三郎、澤田善次郎……………55

一三三 右山貞助、右山弥八……………56

一三四 字七、源八 他……………59

一三五 松浦圓助、徳右衛門……………61

一三六 北野安右衛門……………63

一三七 北野甚右衛門 他……………64

一三八 安谷庄三郎 他……………65

一三九 門田寿吉郎……………69

一四〇 林七……………70

天保四年

一四一 筑紫春吹(次号)……………70

一四二 松山権兵衛……………70

一四三 大田黒圓右衛門……………74

一四四 野田林太郎……………75

一四五 江口儀兵衛……………77

天保五年

一四六 清八(次号)……………77

一四七 松田三成 他……………77

一四八 嘉平太、永助 他……………78

一四九 西山新左衛門、他村々庄屋……………79

一五〇 光暁寺……………84

一五一 本田定次……………85

一五二 中村小左衛門、野田七右衛門……………86

一五三 弥十郎 他……………87

一五四 勇七(次号)……………87

一五五 本田栄……………92

一五六 藤本茂郎太……………93

一五七 忠兵衛……………95

一五八 後藤五郎右衛門(次号)……………96

一五九 郡浦新五左衛門 他……………96

一六〇 辛川良右衛門 他(次号)……………96

天保六年

一六一 木下喜兵衛……………98

一六二 大田黒茂太郎……………99

一六三 河瀬惣太郎……………100

一六四 作兵衛(次号)……………100

天保七年

一六五 釜賀茂助……………101

一六六 江上菊寿……………103

天保八年

一六七 中熊久米吉……………104

天保九年

一六八 沢田良平(次号)

一六九 野村新助……………106

## 例言

一、本書は、宇土市史編纂の基礎資料を集成したもので、その第二集として財団法人永青文庫所蔵の細川家史料『町在』の宇土市関係分を抄録したものである。掲載の許可をいただいた財団法人永青文庫（細川護貞理事長）に感謝する。

一、底本は、熊本県立図書館架蔵の複製本によったが、複製本に齟齬があるものについては、熊本大学附属図書館寄託の原本と対照させ、それによって修正した。閲覧にあたってご便宜いただいた熊本県立図書館・熊本大学附属図書館に感謝する。

一、史料は、今回検索を行なった宇土市関係史料の中から任意に番号を付したものであり、便宜的に人名を表題とし、目次と対照させた。

一、表題となった人名の下に、原本の分類目録番号を付した。この番号は、細川藩政史研究会刊行の『永青文庫、細川家旧記・古文書分類目録 正編』に収められた整理番号である。熊本県立図書館の架蔵番号とは異なるため、巻末に登録番号対照表を付した。

一、釈文は、下記に従って活字化したものである。

一、それぞれの史料には適宜、「句読点」「」および並立点「」をつけた。

一、文書の年月日、差出、当所等の位置や高さは、底本に係わらず統一した。

一、用字については、次のとおり配慮した。

旧漢字・異体字は固有名詞をのぞき原則として、現行の

漢字に改めた。

変体仮名「ゑ」「ゐ」「へ」「え」は、原則として、現行の仮名にあらためたが、助詞の者・茂・江・而・并・ニは、そのまま用い、活字を小さくした。

二字、又は三字繋の仮名（*ゑ*、*ゑ*等）は、二字または三字の仮名になおした。

一、地名・人名等の固有名詞については底本に拠った。ただし補記の必要なものについては傍註を付した。

一、底本の不明部分は□とした。疑わしい文字については、ママを付した。

一、敬称のための欠字・平出・台頭等は行なわなかった。

一、史料収録にあたっては差別や人権について十分配慮したが、できるだけ原本に忠実に釈文を行なったために、現在の価値観では律しきれないような内容の文も含まれている可能性がある。歴史資料としての存在意義をそこなわいたための止むを得ない判断であることをご了解いただきたい。

一、史料の検索・釈文・校訂は井上正（市史編さん委員会委員長）、光永文照（市史編さん委員会委員）、堤克彦（北稜高校教諭）、根本なつめ（市史編さん調査員）が行ない、校正・編集は右記のほか、市史編さん室において実施した。

(文政四年)

八八 坂田文助、芥川政右衛門 他

(九一〇一一)

再応御内意申上覚

御郡代衆御直触、下奥古閑村庄屋

坂田文助

当年八十一歳

右文助儀、天明四年御郡代衆御直触被仰付、当年迄三十八ヶ年御郡並之御奉公、無懈怠相勤申候。寛政六年より下奥古閑村庄屋役被仰付、当年迄二十八ヶ年各別出精相勤申候ニ付、年齢旁被為對、地土被召直被下候様、去正月御内意書付を以、御達申上置候。

苗字御免御窓庄屋直触、東走瀉村庄屋

芥川政右衛門

当年六十三歳

右政右衛門儀、天明四年より庄屋役被仰付、当年迄三十八ヶ年各別出勤相勤申候ニ付、被為賞御郡代衆御直触被仰付被下候様、去正月御内意書付を以、御達申上置候。

八町村・五町村庄屋

長左衛門

当年六十一歳

右長左衛門儀、天明五年より文化六年迄二十五ヶ年、右兩村相府役出精相勤、同七年より引続、庄屋役被仰付、当年迄十二ヶ年、

都合三十七ヶ年兩役、無懈怠精勤仕申候ニ付、被為賞、苗字御免・御窓庄屋直触被仰付被下候様、去々十月御内意書付を以、御達申上置候。

西走瀉町・三ヶ村庄屋

勘右衛門

当年四十八歳

右勘右衛門儀、寛政十一年より文化五年迄十ヶ年、西走瀉村相府役出精相勤、同六年より引続、右西村庄屋役被仰付、当年迄十三ヶ年、都合二十三ヶ年兩役無懈怠精勤仕申候ニ付、無苗・御窓庄屋直触被仰付被下候様、去々十月御内意書付を以、御達申上置候。

右四人之者共、数十年役方無懈怠精勤仕、万端手堅、諸御用筋無間抜取計、勸農力田之倡方ハ不及申上、兼而教諭筋行届、村方抄宜、御年貢・諸上納速ニ取立、皆納仕、諸公役等茂、無滞相勤せ、抜群出精相勤候段者、去々十月、去正月委細書付を以、御内意御達申上置候通御座候。然処今以如何様共被仰付筋無御座候間、乍恐相応被為賞被下候様、奉願候。此段乍憚再応御内意書付を以申上候。以上

文政四年正月

久我新右衛門<sup>㊦</sup>

中村庄右衛門殿

七月廿八日□達

村庄屋之儀、四十年已上之勤ニ而苗字被成御免、五十年以上ニ而御郡代直触被仰付見合候得共、右之年数より内ニ而御郡代直触ニ進ミ居候者者、年数次第地侍被仰付見合有之、文

助儀<sub>茂</sub>下地寸志之<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>よつて、無苗・御惣庄屋直触被仰付、

文化十三年庄屋役二十二年目御郡代直触被仰付、夫より七年

相成、余り間近<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>之候間、御郡代直触以来十ヶ年已上<sub>ニ</sub>

相成候ハ、追々之歩<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>當<sub>ニ</sub>いたし候間、僉議之筋<sub>茂</sub>可

有御座哉。依<sub>而</sub>達<sub>ニ</sub>之趣、而三年見合可被置哉。尤年齢八十二

歳<sub>ニ</sub>相成、至<sub>而</sub>稀成勤付、無味<sub>ニ</sub>見合被置候<sub>茂</sub>、此落着付兼

候付、例吟味仕候処、文化十五年杉邊<sub>（杉）</sub>手永山ノ口甚右衛門と

申者、山ノ口二十六年之勤<sub>ニ</sub>候得共、年齢八十二歳<sub>ニ</sub>相成候

間、鳥目七百文被下置候。文助<sub>茂</sub>年齢八十二歳相成、庄屋役

二十八<sub>ニ</sub>年之勤付、鳥目<sub>者</sub>老實文程<sub>茂</sub>可被下置哉。

但文助儀<sub>者</sub>、御郡代直触<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>仰<sub>ニ</sub>付置、役前<sub>茂</sub>庄屋役之儀

付、老實文可被下置哉と、本行之通<sub>ニ</sub>御座候。如何程<sub>ニ</sub>可

有御座哉。

見合

政右衛門儀、去年見合之僉儀相達置候通<sub>ニ</sub>、村庄屋御郡代

直触之儀<sub>者</sub>、五十年已上、御郡代直触被仰付、見合有<sub>ニ</sub>之候

処、政右衛門儀<sub>者</sub>、下地寸志之<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>而、無苗御惣庄屋直触被

仰付、文化十年役方出精<sub>ニ</sub>付、苗字被成御免、夫より九年<sub>ニ</sub>

相成、今年迄ハ歩<sub>ニ</sub>間近<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>之候間、来年<sub>ニ</sub>至、御郡代直触

被仰付哉。

但庄屋役<sub>者</sub>、三十八年<sub>ニ</sub>相成申候。尤去年三十八年<sub>ニ</sub>相成

候段、認有<sub>ニ</sub>之候得共、天明四年より今年<sub>ニ</sub>至三十八年<sub>ニ</sub>相

成申候。

見合

長左衛門儀、達之通候処、去年見合之僉議相達置候通、合府

之儀<sub>者</sub>、年数<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>申候。庄屋役十三年<sub>ニ</sub>相成来、年数少ク

預之趣、見合可被置哉。

勤右衛門儀、右同断<sub>ニ</sub>付、達之趣<sub>者</sub>見合可被置哉。

八九 井上甚次 他 (九一〇一一)

覚

井樋方・塘方助役

井上甚次

右<sub>者</sub>松山手永笠岩村御開石井樋、去ル六月十七日非常之洪水<sub>ニ</sub>

而、右井樋式艘共<sub>ニ</sub>破損仕候<sub>ニ</sub>付、早速より潮取防方無手拔取

計、右井樋御普請被仰付候<sub>ニ</sub>付<sub>而</sub>者、御入目減方<sub>并</sub>夫飯米取、出

夫六千人余被召仕候<sub>ニ</sub>付<sub>而</sub>茂、仕イ方申談能、御普請積外共<sub>ニ</sub>惣

体丈夫<sub>ニ</sub>出来仕、御入目双方減方いたし、余錢<sub>茂</sub>出来仕、数日御

普請中、昼夜詰切り始末厚ク心を用、各別出精仕候<sub>ニ</sub>付、相当之

御賞美被仰付度奉存候。私共右御普請所<sub>江</sub>相詰見聞仕候趣、右之

通御座候間、此段書付を以、御達仕候間、宜被成御參談可被下

候。以上

辰十月

大嶋伴右衛門

御横目

渋谷尉右衛門

御郡方

根取衆中



覚

六月十九日より九月十九日迄之内 御普請方小頭

一日数八十日余 清七

右同 小頭

一同六十日余 次郎八

六月十九日より九月十九日迄之内 根拟小頭

一日数三十日余 新助

右同 小頭

一同二十日余 格次

右同 同

一同二十日余 宇兵衛

右<sup>者</sup>松山手永笠岩村御開、石井樋去ル六月十七日、非常之洪水ニ

而、右井樋式艘共、破損仕候ニ付、早速より潮取防方、無間拔取

計、右井樋御普請被仰付候ニ付<sup>而者</sup>、何れ<sup>茂</sup>昼夜相詰居、夫飯米

取出夫六千人余被召仕候ニ付<sup>而茂</sup>、出夫無間拔手配いたし、余錢<sup>茂</sup>

出来仕、諸事申談能、出精仕候。且清七・次郎八儀、数十日出精

仕候内、清七儀<sup>者</sup>御普請中始末、昼夜相詰居、各別骨を折、出精

相勤申候。何れ<sup>茂</sup>相当之御賞美被仰付度、奉存候。私共右御普請

所<sup>江</sup>相詰見聞仕候趣、右之通ニ御座候間、此段書付を以、御達仕

候。宜被成御参談可被下候。以上

辰

十月 大嶋伴右衛門

御横目 渋谷尉右衛門

御郡方

根取衆中

甚次以下達之通ニ付、例吟味仕候処、別紙之通ニ御座候。此

節之儀、日数八十日余之御普請大勢之人夫被召仕候処、御入

目<sup>茂</sup>減方ニ相成、余錢<sup>茂</sup>出来いたし惣体丈夫ニ出来いたし候

由ニ付、右之見合を以、左之通ニも可被賞哉。

〔上に付札〕

本文之例書<sup>江</sup>有之ハ、

南関手当永塘方

助役一領一疋 河野用兵衛

右同会所小頭 銀作

右同平野村庄や 曾助

右之面々 村々御普請

之節、出精いたし候而

拝領方之例書也

金子百疋

松山手永井樋方 助役、一領一疋格

井上甚次

鳥目老實文 御普請小頭

清七

右<sup>者</sup>八十日余相詰、昼夜格別骨を折候由ニ付、本行之通。

同七百文 小頭 次郎八

右六十日余相詰候由ニ付、斟酌を以、本行之通。

根拟小頭 新助

小頭 格次

同 宇兵衛

右三人者、三十日・廿日位相詰、格別出精と申儀モ相見不申候間、御間承届之及達可申哉。

以上

右付紙之通十二月十三日達。

九〇 次助、茂左衛門

(九一〇一〇一)

御内意之覚

郡浦手永郡浦村頭百姓并村横目・津横目

次助

当已六十七歳

右次助儀、安永五年より郡浦頭百姓并村横目・津横目申付、文化十三年郡浦村・前越村・中村三ヶ村津横目兼帯申付、当已年迄都合四十七年出精相勤居、右年数之内<sup>二</sup>者、郡浦村庄屋病中故障、且病死跡引替等之間、前後数度庄屋代申付候処、是又手全<sup>二</sup>相勤申候。惣体極々廉直成者<sup>二</sup>而、一体心得方宜、其上右之通稜々数十年精勤仕候者之儀御座候間、乍恐被賞、麻上下・小脇指御免被仰付被下候様。

右同長濱村頭百姓

茂左衛門

当已八十二歳

右茂左衛門儀、明和八年より長濱村頭百姓役相勤、文化四年津横目兼勤申付、当年迄五十二年精勤仕候。惣体手全成者<sup>二</sup>而、村方小前々々<sup>茂</sup>、別書諭合、勸農を誘、万端心得方宜、其上五十年余

精勤仕候者之儀<sup>二</sup>付、乍恐被賞、無苗・御惣庄屋直触被仰付被下候様。

右兩人之者共、数十年出精相勤候<sup>二</sup>付、乍恐被賞被下候様有御座度、於私共奉願候。此段宜被成御參談可被下候。以上

十月

宇土 御郡代

御郡方

御奉行衆中

十二月十三日達

頭百姓之儀、五十年以内之年数<sup>二</sup>而者、礼服<sup>者</sup>容易<sup>二</sup>難被成御免、見合<sup>二</sup>御座候処、荒尾手永津横目傳助・用助と申者、兩人三十五年完相勤候付、礼服・小脇差被成御免候見合御座候。本行次助儀、津横目を<sup>茂</sup>兼帯いたし、四十七年相勤候<sup>二</sup>付、右兩人之見合を以、礼服・小脇差等可被成御免哉。

右同

茂左衛門儀、頭百姓五十二年相勤、見合<sup>茂</sup>御座候間、無苗・御惣庄屋直触可被仰付哉。

覚

郡浦手永頭百姓兩人申立候趣<sup>二</sup>付、為御聞方被指出、承合候趣、左之通<sup>二</sup>御座候。

郡浦村頭百姓并村横目・津横目兼帯

次助

六十七歳

右次助儀、安永五年より郡浦村頭百姓・村横目役申付<sup>二</sup>相成候以來、郡浦・前越・中村津横目兼、当年迄四十六年出精相勤、庄屋

代を<sup>茂</sup>度々相勤候由、惣体心懸能手全<sup>ニ</sup>有之、村中帰服仕居候由<sup>ニ</sup>承申候。

長濱村頭百姓并津横目兼帯

茂左衛門

八十二歳

右茂左衛門儀、明和八年長濱村頭百姓申付<sup>ニ</sup>相成、其後津横目兼帯、当年迄五十一年出精相勤候由。未夕達者<sup>ニ</sup>有之、不絶村中打廻、勸農方相誘、心懸宜敷手全成者之由、小前々々帰服仕居候由<sup>ニ</sup>承申候。

右見聞仕候趣、前文之通<sup>ニ</sup>御座候。何れ<sup>茂</sup>本行之通被賞<sup>ニ</sup>可有御座哉<sup>ニ</sup>奉存候。見聞之趣、書付御達申上候。以上

已

十一月

古閑文平次

(文政五年)

九一 井上甚平、井上甚次

(九一〇一三)

御内意之覚

唐物拔荷改方御横目并御郡代手付横目、宇土人馬所横目・津口・陸口見以改兼帯、步御小姓列

井上甚平

右甚平儀、明和四年頭百姓申付、同七年松山会所小頭<sup>ニ</sup>出、根抄会所詰<sup>ニ</sup>相成、安永四年四月親跡三日村庄屋申付、天明元年五月

宇土郡并樋方助役申付候付、在勤中一領一正格被召出、寛政七年十月并樋方助役持懸<sup>ニ</sup>而、御郡代手附横目役申付、享和二年役方多年出精仕候旨<sup>ニ</sup>而、一領一正本席被仰付、同三年請免被仰付候<sup>ニ</sup>而者、見聞方繁劇<sup>ニ</sup>付、并樋方助役者相断候<sup>ニ</sup>付、差免申候。文化二年七月唐物拔荷改方御横目被仰付、在勤中諸役人段被仰付、御郡代手付横目役者直<sup>ニ</sup>兼帯申付置候。同八年五月多年出精相勤、役前厚心を用、各別御用相立候旨<sup>ニ</sup>而、諸役人段本席被仰付候。同十三年七月御奉公五十年格別出精相勤候旨<sup>ニ</sup>而、步御小姓列被仰付、当年迄五十五年格別出精相勤申候処、及老衰、其上病所<sup>茂</sup>有之、御役継相勤御断願出候<sup>ニ</sup>付、見聞仕せ候処、相違之儀<sup>茂</sup>無御座候付、願之通御奉公御免被仰付、五十余年之被对勤勞乍恐金子被下置候様。

在勤中一領一正格<sup>ニ</sup>而、并樋方助役・塘方助

役并御郡代手附横目当分

井上甚平悴

井上甚次

四十二歳

右甚次儀、寛政九年七月松山手永并樋方助役代勤申付、享和三年十月、在勤中一領一正格被召出、本役申付、文化十一年三月松山手永塘方助役兼勤申付、文政四年二月御郡代手附横目当分申候。代役以来当年迄二十五年出精相勤申候。然処父甚平儀、願之通御役御免被仰付候ハ、父子之勤勞<sup>ニ</sup>而者、年数八十年<sup>ニ</sup>相成候<sup>ニ</sup>付、乍恐相成之段式被召出、唐物拔荷改方御横目被仰付被下候様。左候ハ、御郡代手附横目役<sup>茂</sup>可申付奉存候。

右之通宜被仰付被下候様。尤甚次儀者、炮術中村三左衛門門弟<sup>二</sup>而、目錄相伝仕、三左衛門覺書老通相添申候。劍術和田傳兵衛門弟、柔術宇土御家中小田孫兵衛門弟、鎗術門司源七郎門弟、居合隈部七左衛門門弟、馬術香山倉藏門弟<sup>三</sup>而、稽古仕来候得共、近年<sup>者</sup>役前無隙仕、存分稽古<sup>茂</sup>出来不申哉御座候。前文奉願候儀、宜被成御參談可被下候。以上

巳十二月

宇土 御郡代

御郡方

御奉行衆中

甚平儀、願之通役儀段格共可被成御免哉。尤悴井上甚次、次之付紙之通被仰付候ハ、甚平年功被賞、拜領方<sup>二</sup>者及申間敷と奉存候。

甚平儀、御奉公五十年余出精相勤候間、去年七月作紋單羽織一被下置事。

中村三左衛門へ被相達

候。甚次稽古改

扣受有之。

甚次儀、達之通<sup>二</sup>付、見合<sup>茂</sup>御座候間、父井上甚平五十年余之勤被対、諸役人段被召出、親跡唐物拔荷改方御横目可被仰付哉。

但父甚平儀者、歩御小姓列被仰付置候事。

在役六十年以上之勤<sup>三</sup>而者、其子父同前被召出候見合有之、五十年以上<sup>三</sup>而ハ、諸役人段之悴一領一疋被召出候見合御座候。右之例を以、本行甚次儀、父之席より一段落可被召出哉

と相しらへ申候。八代郡加来卯平・鮑田郡内田庄之助、此両人父諸役人段<sup>二</sup>而、五十年余之勤被対、一領一疋被召出候事。

右同四日申渡、甚平去二日沙汰。

覺

松山手永三日村居住・唐物拔荷改方御横目・御郡代手附横目兼帯井上甚平、当役御断願、悴井上甚次申立之趣<sup>二</sup>付、爲御聞方被差出、承合申候処、甚平儀者、当年七十一歳<sup>二</sup>相成、諸役当年迄都合五十六ヶ年<sup>二</sup>相成、出精相勤候由。最早老衰之様子<sup>二</sup>相見へ申候。願之通御覺可被仰付哉。悴甚次儀者、寛政九年より井樋方助役・代役、其後塘方助役兼帯被仰付置、去十一月御郡代手附横目兼勤を<sup>茂</sup>被申付置候由。当年迄代役以来都合二十六ヶ年<sup>二</sup>相成候由。武芸之儀<sup>茂</sup>相嗜居、惣体手全成人物之様子<sup>二</sup>承り、委細之儀者、別紙之通<sup>二</sup>相聞申候。右見聞仕候趣、御達申上候。以上

午 正月

石原栄右衛門

九二 西村新作、宮地十右衛門 他

(九二〇一三)

奉伺覺

網田皿山手伝<sup>并</sup>鳥乱者見拟兼帯

西村新作

焼物師

宮地十右衛門

右兩人伴小十郎支配<sup>二</sup>被仰付置候処、今度榎方産物受込方受<sup>二</sup>被仰付候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、御役人代ル<sup>レ</sup>詰方仕候<sup>二</sup>付、産物受込方之支配<sup>二</sup>可被仰付哉。

河尻町御奉行触

甲斐茂作

右<sup>者</sup>伴小十郎根拵当分被仰付候後、同人より依達皿山物書<sup>并</sup>同所見拵助勤被仰付置候由之処、最早御横目御役人相詰、勿論日々受拂<sup>茂</sup>、他之手を不交、嚴重<sup>二</sup>仕、焼物師共之取拵<sup>茂</sup>、勿論之儀<sup>二</sup>御座候間、右両役共<sup>二</sup>被成御免、河尻<sup>江</sup>引取候様、同所町御奉行衆<sup>江</sup>被及御達度奉存候。

一皿山零落之次第、見聞仕候処、焼物師共、職業不心懸<sup>二</sup>而、御献上御用且御注文御用焼被仰付候得<sup>者</sup>、高価之代錢被渡下儀<sup>二</sup>付、何れ<sup>茂</sup>御用仕事を当テ<sup>二</sup>仕、平日売用<sup>者</sup>怠り勝<sup>二</sup>有之、難渋之中より、昼夜両度完<sup>者</sup>酒を呑、夜仕事等<sup>者</sup>一向<sup>二</sup>不仕。右之通之不心得<sup>二</sup>而<sup>者</sup>、往々繁昌之見込無御座候間、当分立行迄之内<sup>者</sup>、嚴重之法令を立置、昼夜見繕、職業致せ、衣喰之過美を制、人別仕事出来高を<sup>茂</sup>及見聞可申候間、此段<sup>者</sup>御届仕置候。

一皿山之儀、御役間を<sup>茂</sup>被建置候得共、是迄御渡限り之御銀辻<sup>者</sup>、一向無之、都<sup>而</sup>拜借錢之内より修覆其外諸雜費取行<sup>二</sup>相成来候間、其分<sup>者</sup>返納之手段無之、追々余計之拜借滞<sup>二</sup>相成候哉と奉存候。依之、別紙を以奉願候。御本方御仕入前錢被渡下候ハ、為永統彼地<sup>者</sup>人畜多、田畑少キ所柄<sup>二</sup>而、過半獵・漁師共迄多、糧物乏敷、焼物師共<sup>茂</sup>、宇土・川尻迄求<sup>二</sup>罷出候<sup>而</sup>者、職業之障り且從來小仕錢之費多、難渋之様子<sup>二</sup>御座候。右之次第<sup>二</sup>付、極<sup>而</sup>

米穀之双場高価<sup>二</sup>有之候間、右御仕入錢之内より、米・粟・大豆等積廻置、相応之利分を加<sup>江</sup>、焼物師<sup>者</sup>勿論漁師共<sup>江</sup>茂、現錢引替之売方仕、且小物成方、久住步入会所之仕法を以、御横目御役人三十日代り詰方仕、少々宛俵物步入等<sup>茂</sup>、輕利<sup>二</sup>しめ取置候ハ、第一所柄之為<sup>二</sup>相成、勿論少々完利分相集候儀<sup>二</sup>付、是等之備を以、諸雜費を仕払申度奉存候。

一網田皿山之儀<sup>者</sup>、土台高価之唱有之、殊焼物師共、零落之折柄急<sup>二</sup>直下ケ<sup>者</sup>難相成御座候間、焼物<sup>二</sup>而<sup>少</sup>茂利分等懸不申、永統之ため、少し<sup>二</sup>而<sup>茂</sup>、下直<sup>二</sup>売出可申と奉存候。

一両網田村・戸口浦等<sup>者</sup>、船着<sup>二</sup>而、旅人多入込候所柄<sup>二</sup>御座候得<sup>者</sup>、皿山<sup>江</sup>茂、必多度見物等<sup>二</sup>罷越候様子<sup>二</sup>付、為拵方産物受込方<sup>江</sup>拜借被仰付置候突棒・差俣・槍、皿山御役間<sup>江</sup>建置申度奉伺候。右様々宜敷被及御參談可被下候。以上

二月

榎方

産物受込方

西村新作・宮地十右衛門儀、榎方産物受込方支配<sup>二</sup>被仰付段前之見合を以、御郡方御分職より可被及御達哉。

一甲斐茂作儀、当役可被成御免哉、左候ハ、選挙方<sup>江</sup>さし廻可申哉。

一御仕入錢之内より穀類調置、相応<sup>二</sup>賃殖仕度よし、先<sup>者</sup>思敷からさる仕法<sup>二</sup>而<sup>御座候得</sup>者、書面之通<sup>二</sup>御座候得<sup>者</sup>、只今之通<sup>二</sup>而<sup>ハ</sup>、益及難渋候様子相見、其上於久住、小物成方見合を以取計度との事に付、子細<sup>茂</sup>有御座間敷哉。尤御勘定所<sup>江</sup>さし廻、彼方見込達有之候様可仕哉。

一突棒・差俣・ひねり建方之儀、御勘定所江さし廻、場所替之根直可仕哉。

産物方

三月六日達

茂作儀、文政二年四月宇土綱田皿山受込助勤被仰付、在勤中苗字刀被成御免置候処、本行達之通ニ付、右受込助勤者被成御免段、及達可申哉。

但苗字刀ハ、在勤中之御免ニ付、此節上リ候儀ニ御座候。

九三 今村彦兵衛、半七 他

(九二〇一二)

御内意之覚

杉嶋根拟小頭

今村彦兵衛

彦兵衛儀、天明六年会所見習ニ罷出、其後御普請方小頭申付ニ相成、当年迄三拾六ヶ年手全ニ勤上申候。惣躰杉嶋手永之儀、被為知召上候通、緑川・廻江川両塘筋ニ而、老万間余之川塘を引請居、別而御普請方請込之者骨折、強所柄ニ而御座候。毎年塘手御修覆被仰付、霖雨中洪水之節等者何れ茂為防方罷出候内、重々ニ御普請方受込之者危キヶ所ニ引詰、昼夜之無差別、防方心配仕候儀ニ御座候。彦兵衛儀、右様之節者風雨を不厭、夜白塘筋打廻り危ヶ所ニ取留候儀者每歳之儀ニ而、一々難申上奉存候。寛政八辰年以来年々塘手防方并御普請方等各別出精仕候

ニ付而者、度々御鳥目御酒肴拜領、御間御褒詞等茂被仰付候。文化五年、寸志之詔を以、苗字御免ニ而、御惣庄屋直触被仰付、家内不残、傘・管笠御免被仰付候。其後弥以出精相勤候。水氣拔新井手并板井樋・石井樋ニ御仕替之節茂差出置、心懸申越尽候儀、於手永誠ニ逸稜之儀ニ而御座候。且年々、余計之過勤茂仕、出精相勤申儀ニ御座候間、乍恐年功且各別出精相勤申候ニ付、旁被為賞、相応御賞美被仰付被下候様奉願候。

宇土御免方小頭

半七

当巳四拾一歳

根拟脇小頭

吉右衛門

当巳四拾三歳

右兩人、寛政七年会所見習ニ罷出候以来、当年迄式拾七ヶ年相勤申候。

出銀方請込小頭

勇平

勇平儀、寛政十一年より会所見習ニ罷出、当年迄式拾三ヶ年相勤申候。

御免方請込小頭

直助

当巳三拾四歳

直助儀、享和二年より会所見習ニ罷出、当年迄式拾ヶ年相勤申候。

右半七列四人者共、何れ<sup>茂</sup>役儀厚、心懸、出精相勤、是迄追々御鳥目御酒肴等<sup>茂</sup>被為拜領、御間御褒詞等<sup>茂</sup>被仰付候。殊<sup>二</sup>請<sup>一</sup>弘、肝要之局々請込居、聊無怠慢出精相勤、且年々過勤<sup>茂</sup>仕、請弘、御廉直<sup>二</sup>有<sup>一</sup>之。吉右衛門儀<sup>者</sup>、彦兵衛<sup>二</sup>差統御普請方諸事信切<sup>二</sup>相勤申候。何れ<sup>茂</sup>屹、御用<sup>二</sup>相立候者共<sup>二</sup>御座候間、乍恐年数且精勤被為賞、四人共<sup>二</sup>相応御賞美被仰付被下候様奉願候。以上

文政四年十月

成松□十郎 ㊦

宇野騏八郎殿

奥村仙藏殿

右之通相達申候<sup>二</sup>付、精々相糺申候処、相違之儀<sup>茂</sup>無御座候間、彦兵衛儀<sup>者</sup>、御郡代直触被仰付、半七列四人者<sup>者</sup>、礼服・合羽・管笠等御免被仰付被下候様有御座度、於私共奉願候。此段宜被成御參談可被下候。以上

巳

下益城

十二月

御郡代

御郡方

御奉行衆中

小頭之儀ハ、二十二・三年以上<sup>三</sup>、傘御免三十年以上<sup>二</sup>、而、礼服被成御免、見合<sup>二</sup>御座候。本行半七・吉右衛門・勇平儀、達之通之年数<sup>二</sup>、而、礼服等<sup>者</sup>難被成御免、右三人<sup>江</sup>者、傘可被成御免哉。

付紙  
本行半七・吉右衛門・勇平儀、付紙之通、傘御免之及達候処、右三人<sup>者</sup>、文化八年<sup>二</sup>傘ハ御免<sup>二</sup>相成居申候。其

儀達込之書面<sup>二</sup>認落<sup>二</sup>相成、不行届段、御郡代より内意達有之、於選舉方<sup>茂</sup>見しらへ届兼申候。小頭之儀、付紙之通年数見合<sup>者</sup>有之候得共、右三人、役方<sup>并</sup>寸志旁<sup>二</sup>而一同引上り、傘御免<sup>二</sup>相成居。夫より十二年<sup>二</sup>相成申候右之通、御賞美之稜引上りに付<sup>而</sup>ハ、追々見合<sup>茂</sup>御座候間、此節申立之通、三人<sup>江</sup>ハ、礼服等可被成御免哉。

彦兵衛儀、御郡代直触被仰付候様申立、書面之通御座候。然処小頭之儀ハ、五十年<sup>二</sup>苗字御免、御惣庄屋直触<sup>ハ</sup>寸志之訳被付二十三年目<sup>二</sup>苗字被成御免、御惣庄屋直触被仰付置、書面之通之功業<sup>茂</sup>有之事<sup>二</sup>而、旁年数被縮、可被賞候得共、漸今年迄<sup>二</sup>三十七年<sup>二</sup>相成、未被賞之年数<sup>二</sup>至り不申候付、達之趣<sup>ハ</sup>、先見合可被置哉。

直助儀ハ傘御免之年数<sup>二</sup>茂至り不申候間、達之趣見合可被置哉。

被置哉。

右付札之通四月廿一日達

覚

杉嶋会所小頭今村彦兵衛列五人申立之趣<sup>二</sup>付、爲御間方被差出承合申候趣、左之通御座候。

会所小頭

今村彦兵衛

九四 吉田卯太郎

(九一二〇一三)

右者 天明六年会所見習罷出候已来、役方出精相勤申候ニ付、数度御賞美被仰付、文化五年寸志訳ニよつて、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付、過勤を茂、数百日出勤仕候趣共、本紙之通御座候。当年迄三十七年格別出精相勤申候由御座候。然処彦兵衛儀、依願当月上旬上京仕候。

御内意之覚

宇土町居住・土席浪人格

吉田清右衛門養弟

吉田卯太郎

九歳

宇土御免方小頭

半七

根抄脇小頭

吉右衛門

右兩人寛政七年会所見習已来、当年迄二十八年出精相勤申候由御座候。

出銀方小頭

勇平

右者 寛政十一年見習ニ罷出、当年迄二十四ヶ年出精相勤申候由御座候。

御免方請込小頭

直助

右者 享和二年見習罷出、当年迄二十一年出精相勤申候由御座候。

正月

御郡方

御奉行衆中

宇土

御郡代

右之四人役前出精相勤申候ニ付、追々御賞美を茂被仰付、且過勤を茂仕候趣、付紙ニ相見申候通御座候。役方厚心懸能、請拵等手堅、何レ茂御用相立可申、相聞申候。右見聞仕候趣、書付御達申上候。以上

閏

正月

丸山林次

右付札之通、七月廿九日申渡。

本行三郡新地御用寸志銭、別途ニ差上候得ハ、下地之席祿ニ男又者養子ニ別家被立候ハ、尤上継ナシニ而、一代ハ無相違相続可被仰付段、別紙之通於機密間相究居申候。本行吉田清右衛門、此節右寸志百貫目差上置候間、清右衛門儀ハ、於機密間御取扱ニ相成候由、依之清右衛門御様子相分次第、卯太郎儀、清右衛門跡土席浪人格可被仰付哉。



御郡代より伺之内

一、此節之寸志ハ、下地之祿席ニ不拘、別途ニ被仰付候間、高割引等ハ難相成段、先書御付紙之趣承知仕候。右下地之祿席ハ二男又ハ養子等いたし、相統被仰付、別株可被立下哉。

書面之通、別株可被立下。

右同断

一、此度別途ニ出銀仕候て、下地之席祿ニ男又者養子ニ別家可被立下善之処、無上納ニ而無相違、一代ハ可被召出哉之事。

上繼無ニ而、二代ハ無相違相統可被仰付候。

弟江引讓、別株被立下儀も不苦と相究候事。

右之通被仰付候。以上

文政五年七月

志水藤七

安野形助

境野丈之助

九五 松本権平、松本甚蔵

(九一〇一三)

御内意之覚

村松長右衛門家来松山手永三日村居住

松本孫右衛門倅

松本権平

松本甚蔵

右者三日村居住ニ而、内作茂仕候処、兼々庄屋村役人之手数ニ茂相成候儀無之様村並之公役等心懸宜敷御座候処、去ル五月十五日よ

り十六日両日、八代新井手堀方ニ付、村々役男不残出夫仕候跡、

為取拟御家人中村請杯廻村申付候節、権平兄弟承付、佐野・三日

両村之儀者、兼々農業方等被罷出候時分茂、村並申談来候所柄ニ

付、此砌少ニ而茂村方安心ニ相成候得かと、兄弟共ニ股引半切ニ而

昼夜打廻候内、両夜者片時茂休息不仕、厚心を付申候処、村方老

幼女口ながら茂心強、留守番仕候由、且又、当春川掘出夫之砌茂

同断、廻村仕候由筋之申出候間其砌者、長右衛門迄私どもより挨拶

仕置候。惣体他支配之面々多者、内輪色々煩敷、村方難涉勝御座

候内、権平兄弟之儀、平日心得方者勿論、前条之通分外之儀迄茂

厚心を用、村方一稜之為合相成申候間、最早再応之儀、私共切其

分ニ茂難聞御内達仕候条、乍恐相応被賞被下候様、於私共奉願

候。左候外ニ、他支配居住之面々、心得方ニ茂可相成と奉存候

間、旁宜敷被成御參談可被下候。以上

七月

宇土

御郡代

御郡方

御奉行衆中

権平・甚蔵儀、達之通兼々心得方宜、村並之儀、諸事申

談能、所柄為合ニ相成候。当春已来八代新井手堀方并松

山手永新井手堀方等出夫之節々打廻リ、昼夜心を付、兄

弟共々奇特成ル者共之様子ニ付、右之御間承届之及達可

申哉。相応之例も相見不申候間先以拝領方ニハ及申間敷

哉。如何程可有御届候哉

再議付紙

本行兩人儀<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、御口達被下候通に付、猶又申談候処、出夫之節々佐野・三日兩村打廻心を付度候。纔<sup>ニ</sup>六・七日之間<sup>ニ</sup>相見候<sup>ニ</sup>付、各一件迄<sup>ニ</sup>而候ハ、押領方<sup>ニ</sup>ハ及申間敷儀<sup>ニ</sup>御座候得共、庄屋共よりも相達候通、村役人等<sup>ニ</sup>対し不遜之儀等無之、村中之交町寧<sup>ニ</sup>有之、平生之心得方宜、奇特成<sup>ル</sup>者共之様子<sup>ニ</sup>相聞申候間、旁被賞、鳥目七百文完程<sup>茂</sup>被下置方<sup>ニ</sup>可有御座哉。左候ハ、弥以他支配之者共標準にも相成可申と奉存候。

右付紙之通九月十八日達

覚

村松長右衛門家来<sup>ニ</sup>而、松山手永三日村居住松本孫右衛門伴、松本権平・松本甚藏右兩人申立之趣<sup>ニ</sup>付、承合申候処、何れ<sup>茂</sup>手全成ル生質<sup>ニ</sup>而、兼々心得方宜、村並之儀諸事申談能、当春以来、八代新井手堀方之節々、且松山手永佐野・三日兩村麓川筋新井手堀方之節<sup>ニ</sup>付役男出夫出拂跡ハ為取扱、御家人中村之請持、昼夜打廻り、其節右兄弟共<sup>ニ</sup>自勤<sup>ニ</sup>而、昼夜軒別声心掛<sup>ケ</sup>打廻り、老幼女口迄<sup>ニ</sup>而心強<sup>ク</sup>留守番仕、兩人共<sup>ニ</sup>奇特成者之様子<sup>ニ</sup>承申候。右四合見聞仕候趣、書付式通相添御達申上候。以上

午

八月

石原栄右衛門

御尋<sup>ニ</sup>付申上覚

三日村御居住村松長右衛門殿御家来、松本孫右衛門殿御子息、松本権平殿・同甚藏殿御兄弟、平日如何様之御人柄<sup>ニ</sup>御座候哉、可

申上旨御尋之趣奉得其意候。右長右衛門殿、御赦免開地三日村<sup>江</sup>有之候を、内作有之村方入交り候地面、農業方之儀<sup>ニ</sup>、御百姓打交り出精有之、内作方<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、万事村並御百姓之通被相心得、村役人<sup>ニ</sup>被対候<sup>而</sup>茂、矢張小前同前御振合<sup>ニ</sup>而村祭様<sup>ニ</sup>節々迎<sup>茂</sup>終<sup>ニ</sup>村役人之上席等<sup>ニ</sup>居<sup>リ</sup>被申候儀も無御座、年頭<sup>ニ</sup>被打廻候節計り、上下大小等<sup>ニ</sup>而急度挨拶有之至<sup>而</sup>御正直<sup>ニ</sup>御座候事。  
一 葬礼等有之候砌<sup>者</sup>、難渋之もの共、物入不仕様<sup>ニ</sup>心を付被申、宇土町杯より買調不申候<sup>而</sup>、難成品々も有之候得共、町使等不仕相濟候様<sup>ニ</sup>と始終被罷越、心を付加勢御座候<sup>ニ</sup>付、一稜村中之為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一 当春夏兩度、八代新井手堀方出夫之節、惣人数罷出候跡火用心等為扱方、御家人衆村請持<sup>ニ</sup>而出勤御座候砌、私共兩村<sup>者</sup>、右権平殿兄弟御廻り方<sup>ニ</sup>相成、三日村<sup>ニ</sup>四拾五竈、佐野村<sup>ニ</sup>八拾六竈所々<sup>ニ</sup>打毀り村方夜中ハ一向休息も無之、被打廻、別<sup>而</sup>初度之井手堀留主不怪大雨<sup>ニ</sup>而御座候処、右兄弟衆一向休息無之、寢入候家之者、戸外より起居<sup>ケ</sup>、打廻り相成候<sup>ニ</sup>付、いづれも甚忝心強ク奉存居申候儀<sup>ニ</sup>御座候。  
右之通<sup>ニ</sup>御座候間、宜敷被仰付可被下候。以上

文政五年八月

佐野村庄屋

市左衛門<sup>㊦</sup>

三日村庄屋

丈平<sup>㊦</sup>

御横目

石原永右衛門殿

御尋<sup>ニ</sup>付申上覚

私共儀、村松長右衛門家来<sup>ニ</sup>而、三日村懸り御救免開内<sup>ニ</sup>居住仕居申候。然処当春以来、八代御新地新井手御普請被仰付候節、佐野・三日兩村之儀<sup>茂</sup>、惣人数出夫被仰付、村方<sup>江者</sup>老人子供迄相残至<sup>而</sup>、物騒之様子<sup>ニ</sup>承り付申候<sup>ニ</sup>付、右詰夫役留主中、所柄之儀<sup>ニ</sup>御座候間、私共兄弟申談、乍恐御国思為冥加、佐野・三日兩村打廻、火用心盗人用心等心を付申候処、右之段御聞込<sup>ニ</sup>相成、右御普請出夫留主内、私共廻方仕候儀<sup>者</sup>、何月幾日<sup>ノ</sup>候哉。可申上旨、御尋之趣承知仕候。左<sup>ニ</sup>申上候。

一当三月御新地新井手御普請之節出夫跡同月十二日より同十五日迄之間、佐野・三日兩村、兄弟手を分打廻り、心を付申候。猶五月同所御普請出夫之節も同月十五日より十六日晚迄、前條同様打廻り申候儀<sup>ニ</sup>御座候。右御尋<sup>ニ</sup>付覚書を以申上候。以上

文政五年八月

村松長右衛門家来

松本権平<sup>㊦</sup>

弟

松本甚蔵<sup>㊦</sup>

石原永右衛門殿

(文政六年)

郡浦手永一領一疋

高濱孫助

六十九歳

右<sup>者</sup>炮術・劍術数十年格別心掛能、同門相誘、厚致世話、且追々武器を<sup>茂</sup>相備、志厚有之候付、旁被賞、作紋袷羽織一被下旨、今度御達之趣、先<sup>者</sup>於私共<sup>茂</sup>難有仕合奉存、早速申渡候筈<sup>ニ</sup>御座候処、孫助儀、無祿之身分、殊更家内大勢極難渋<sup>ニ</sup>而、専内作・猪狩等を以取続居候内、武器抜群心掛厚、既文化七年以来為御心付被為拜領候御米代<sup>者</sup>、年々悉皆程武器を求、其外熊本御侍中も猶宿等仕候節<sup>者</sup>、相応之謝礼等<sup>茂</sup>有之候処、飯米代等差送<sup>ニ</sup>相成候よりも、古証矢之一腰<sup>茂</sup>送<sup>ニ</sup>相成候得<sup>者</sup>、何前<sup>茂</sup>重宝かり候様子<sup>ニ</sup>相聞、先<sup>者</sup>抜群武備を心掛候処より、極難渋之内、先書御達仕置候武器付之通り相貯、重疊奇特之もの<sup>ニ</sup>御座候間、先書御内達仕候通、諸役人段<sup>ニ</sup>進席被仰付被下候様有御座度、於私共奉願候。前条之通被及御達候儀、恐多奉存候得<sup>者</sup>、畢竟武器格別心掛厚次第、先書<sup>ニ</sup>私共筆足不申候付、再心奉願候儀御座候。惣体宇土郡御家人之儀<sup>者</sup>、身代兎哉角仕候もの共<sup>茂</sup>、貨殖之心懸<sup>者</sup>かしこく有之候得<sup>者</sup>、武器之心掛薄不宜風俗<sup>ニ</sup>付、此度孫助儀、進席被仰付候ハ、一統之励<sup>ニ</sup>可相成と見込申候間、彼是御別段を以、宜敷被成御参談可被下候。以上

九月

宇土

御郡代

御郡方

御奉行衆中

九六 高濱孫助

(九一〇一四)

御内意之覚

孫助儀<sup>二</sup>付、別帳之通申立有之候付、被賞、作紋羽織一被下置、諸役人段被仰付儀<sup>者</sup>、見合可被置哉と相達、右羽織被下置旨及達申候処、別帳申立之趣、筆足不申儀<sup>二</sup>而、猶又本行之通再達有之候。且又芸術并武器之貯、勝手向宜、御家人<sup>二</sup>者、外々類<sup>茂</sup>可有之候得共、孫助儀、武芸出精、同門相信第一、勝手向至<sup>而</sup>不如意之内、御心付米代<sup>茂</sup>、年々悉皆程<sup>二</sup>武器を求、追々と別帳武器付之通相貯、右之厚志<sup>二</sup>においてハ、一統御家人之中<sup>二</sup>而、類<sup>茂</sup>有之間敷、且近来及老衰、無余命者之儀<sup>二</sup>付、何とそ別段を以、此節進席被仰付被下候様、御郡代より追々内意も有之候。別帳前紙之通、孫助儀、地侍被召出候已後之年数、今年迄四十年<sup>二</sup>相成、別紙例書倉本武兵衛進席被仰付候節之見合<sup>二</sup>者、年数劣り、進席被仰付候<sup>二</sup>者、早<sup>二</sup>抱相見申候得共、難波之内、武器之心懸抜群厚、其上当年七十歳<sup>二</sup>相成、無余命者之儀<sup>二</sup>付、別段を以、此節諸役人段可被仰付哉、如何程<sup>二</sup>可有御座哉。尤右之通進席被仰付儀<sup>二</sup>候ハ、拜領方<sup>者</sup>見合可被置哉。

御内意之覚

宇土 御郡代

郡浦手永一領老正

高濱孫助

当年六十九歳

右孫助親高濱九右衛門儀、於御山方不埒之筋有之、一領老正被差放、依願能勢小左衛門支配被仰付候。然処孫助儀、炮術中村政右

衛門、劍術林素節門弟<sup>二</sup>而、二芸共<sup>二</sup>宇土郡相門中稽古引廻を<sup>茂</sup>申付相成、出精仕居候処、天明四年六月炮術心懸宜、数年出精仕候旨<sup>二</sup>而、宇土郡地主被召出、寛政元年十二月武芸心懸能、且御郡並之御奉公<sup>茂</sup>出精相勤候旨<sup>二</sup>而、一領老正進席被仰付候。其後宇土・砥用山御狩之節罷出、追々御銀を<sup>茂</sup>拜領仕、文化七年炮術・劍術各別心掛厚、相門引廻を<sup>茂</sup>出精仕候旨<sup>二</sup>而、每歳御米五俵完被爲拜領候。各<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、弥以心懸厚、二芸共月<sup>二</sup>兩度完之稽古日定、宇土郡在宅御侍を初、在御家人・札筒共<sup>二</sup>者、炮術四拾七人、劍術二十八人、大勢之相門誘立申候。夫<sup>二</sup>付、雜費<sup>茂</sup>有之候得共、大勢之家内、專猪狩を以、取続候程之極々難波之内、聊厭不申、春秋<sup>者</sup>定日外頻々不時稽古を<sup>茂</sup>申談、弥以相門中励<sup>二</sup>相成申候。且又前条之通極難波之内、別紙覚書之通、每歳拜領仕候御米代等を以、武器を<sup>茂</sup>相貯、先ッ抜群厚志之者御座候。天明四年地土<sup>二</sup>被召出候より当年迄都合三十九年御郡並之御用<sup>者</sup>勿論、最早老体<sup>二</sup>相成候得共、今以出樹・内稽古共<sup>二</sup>出精仕、抜群心懸厚、奇特之者御座候間、乍恐被賞、諸役人段<sup>二</sup>進席被仰付被下候様、於私共奉願候。則別紙林弾八列覚書式通<sup>并</sup>武器付共<sup>二</sup>相添、御内達仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

七月

宇土

御郡代

御郡方

御奉行衆中

孫助儀、達之通<sup>二</sup>而、天明四年炮術心懸能、数年出精いたし候付、地侍被召抱、寛政元年〔右地侍より六年目〕数年炮術

致稽古相伝等茂相濟、宇土郡内、炮術稽古之節、師役差支候節ハ、代見をもちたし、御郡並之御奉公出精相勤候付、一領一疋被召直、文化七年〔右一領一疋より二十二年目〕、炮術数十年格別心懸能、相伝も相伝、宇土郡相門中引廻申談等、厚稽古進方之儀、委心を用、世話いたし候付、毎歳八木五俵完被下置候。〔右八木被下置候より今年迄十三年〕右之通地侍被召抱候以後、今年迄三十九年ニ相成、御郡並之御奉公相勤候内、炮術・劍術各別心懸厚、宇土郡相門中引廻出精いたし、難渋之内、武器をも貯、厚志之者ニ付、諸役人段被仰付被下候様。本行之通ニ而、学校目付并師役人よりも、別紙之通達有之候ニ付、例吟味仕処、別紙書拔之通ニ而、佐敷手永一領一疋倉本武兵衛御奉公五十年之内、劍術・炮術師役四十二年目、諸役人段被仰付候。其外相伝之例見兼申候。武兵衛儀、右進席被仰付候節之僉儀中ニも、在役人師役ニ付而、再々応も被賞候見合相見不申候。尤同人儀ハ師役付而、兩度被賞、作紋羽織被下置候已後、八年ニ相成、間近ニ有之候間、今少ハ見合被置ニても可有之哉。然処、五十年之内師役四十年余出精仕候ニ付、金子三百疋程も可被下置哉。又ハ見合無之候得共、諸役人段ニ被召置候而者、如何程ニ可有御座哉。指南方数十年抜群出精、且御郡並之御用共ニハ五十年相勤候ニ付、旁被對、諸役人段可被召置哉。ケ様之年数指南等出精仕候者、於御郡者見合類も無御座候事ニ付、右之通可被仰付哉と及僉議、則諸役人段被仰付方ニ相究候。本行孫助儀ハ地土被召抱候已來三十九年ニ而、炮術・劍術共ニ師役と

申ニ而も無御座、年数之儀も、先条武兵衛諸役人段被仰付候節之見合ニ者、至り不申候間、此節諸役人段被仰付儀者、先見合可被置哉。尤孫助儀、已前八木被下置候様、願有之候節も、八木被下置儀ハ不容易儀ニ而、類引多出来可申候付、見合被置、作紋羽織可被下置段、僉議相究、其通達ニおよび候処、右羽織拜領之儀者、至而難有儀ニ御座候得共、不如意之内、武芸心懸厚、炮術相門中稽古之節々、自勤ニ而罷出、深切ニ世話いたし、且武器之心懸茂宜、一廉御用ニ相立可申者ニ付、極貧窮之者候へハ、相門中誘方届兼候様相成候而者、御家人中も勛を失可申儀ニ付、願之通御米被下候様。左候而ハ、御本方より御出方ニ相成候而ハ、御難題之筋ニ付、宇土郡諸運上錢之内より取計候様被仰付可被下候様。再ニ願之趣ニよつて、右之通八木被下置たる儀ニ御座候。夫より今年迄十三年ニ相成、格別厚志之者ニ有之候由、本行申立之通ニ付被賞、此節者作紋羽織一被下置候而者、如何程ニ可有御座哉。

右高濱孫助再儀無御記有之。

覺

一刀五腰并脇差五腰

但本行之内ニ老腰数代ニ伝来之品ニ御座候。

一具足老領

但数代伝来之品ニ御座候。

一鎗三筋

但本行之内、老筋数代ニ伝来之品ニ御座候。

一馬具卷式

一馬卷疋

一鉄炮三挺并道具、玉薬・火繩相添。

一弓五挺并征矢百本

一陣笠五枚

一同羽織袴ッ

一同幕巻張

一同田子巻荷

一法波四ッ

右之通、当時所持仕居申候。尤但書ニ申上候外之品々者、私儀追々ニ相求、或仕継等仕候義ニ御座候。以上

文政五年六月

高濱孫助

木下喜兵衛殿

覚

郡浦手永一領一疋高濱源助、武芸相門中誘方宜敷段申立之趣ニ付、為御聞方被差出承合候処、曾父已来之様子、本紙書面之通御座候。源助儀、天明四年武芸之儀ニ付被賞、地土被召出候已来、弥以相励、相門中稽古之儀、世活仕候旨ニ而、寛政元年一領一疋進席被仰付、劍術・炮術之両芸代見申付ニ相成候ニ付而者、不断打懸り深切相門中相誘申候由相聞、御伝之子弟并、在御家人數十人引込、自分宅ニ稽古場有之、定日打寄、其外相門之宅々江茂、罷越申候由、地土被召出候而、当年迄三十九年御郡並之御奉公を茂出精相勤申候由、武芸之儀、自身多年信口いたし、相門中誘方篤様

子ニ而、遠在別而為合相成申候由、且勝手向等之儀者、不宜様子相聞申候。右見聞仕候趣、書付御達申上候。以上

午八月

丸山林次

九七 糸石寿軒

(九一〇一五)

御内意之覚

御郡代直触医師

糸石寿軒

右寿軒儀、兼而医業出精仕、療治方手広有之、難渋之者共ニ者、猶更厚ク心を付、懇ニ療法仕遣、既而網田村之内、至而難渋之小前々々数年施薬有之段、村方より申出、則小前帳相達申候間、精々見聞仕せ候処、相違之儀、無御座、極々難渋者迄ニ而、年々薬礼等茂一向仕向得不申、太体之病症ニ者、薬貰受候儀、遠慮仕候程之儀ニ候処、必多度打廻、容体等見繕、懇療治仕候趣ニ御座候。而網田之外ニ茂、戸口浦、長濱之内、四・五人宛施薬を受候者茂有之、且又皿山焼物師共江茂、施薬仕、取束候而者、壹万六千余貼之施薬ニ相成居申候。惣体医業心懸厚、貧民江者、施之志、左之様子、兼而及承候間、乍恐被賞、御郡医並被召置被下候様、於私茂奉願候。左候ハ、其身者勿論外ニ、医師共励合ニ茂相成可申儀ニ御座候間、可然様被成御參談可被下候。則村方小前帳式冊相添、御達仕候。以上

十二月

宇土

御郡代

御郡方

御奉行衆中

壽軒儀、達之通<sub>二</sub>付、家業の様子、医業吟味役<sub>江</sub>承合候処、家業心懸能、治療篤志、学業出精、病用手全出精いたし、丁戌之間<sub>二</sub>属申候段、別紙之通達有之候。同人儀、文化四年御郡代直触被仰付候已後十七年<sub>二</sub>相成、且家業心懸能、病療治方出精いたし、難渋之もの候<sub>者</sub>、施薬どもいたし候付<sub>而</sub>ハ、文化十二年銀三兩被下置、夫より九年<sub>二</sub>相成候付、今少科目宜、せめて丙丁之間属申候段<sub>二</sub>御座候ハ、右之年数且余計之施薬をもいたし、旁を以進席も可被仰付哉<sub>二</sub>御座候得共、家業の様子余り劣居申候間、進席之儀ハ、難及僉儀可<sub>口</sub>御座哉。将又先年銀三兩被下置候節之千式百帖余之施薬いたし、此節ハ壹万六千帖余之施薬いたし、且又至<sub>而</sub>難渋之ものハ、謝礼候仕向得不申、大体之病氣<sub>二</sub>ハ、薬貰受候儀、遠慮いたし居候処、壽軒儀、網田郷中<sub>者</sub>、必多度打廻見繕、右様之もの<sub>二</sub>ハ、尚更心を用、療治いたし遣候由、奇特之志<sub>二</sub>御座候。依之此節尚又銀五兩程も可被下置哉。如何程<sub>二</sub>可有御座哉。

右付札之通、十月十五日達。

一、医業吟味役見聞書付附方共、扣受有之。

覚

郡浦手永下網田村居住

御郡代直触医師

糸石壽軒

右<sub>者</sub>療治方手広、難渋之者<sub>江</sub>数年施薬有之候由<sub>二</sub>而、別紙申立之趣<sub>二</sub>付、為御聞方被差出所柄<sub>并</sub>小前々々居合候者共、呼寄承合候処、相違之儀<sub>茂</sub>無御座候。至<sub>而</sub>難渋之者迄<sub>二</sub>而、謝礼得仕向不申、よつて大体之病<sub>二</sub>者、薬貰請候儀、遠慮仕居候由之処、壽軒儀、網田郷中<sub>者</sub>必多度打廻り見繕、右様之者<sub>江</sub>者、猶更心を用、療治仕遣候由<sub>二</sub>御座候。文化十三年より去年迄取束候<sub>而</sub>者、余計之貼数施薬相成、其身勝手向宜キ様子共相聞不申、奇特之儀共御座候。先年網田郷疫疾流行之節も、貧民施薬いたし候由、其節<sub>者</sub>銀五兩被為拜領候様子<sub>二</sub>御座候。右承合候趣、書付を以、御達申上候。以上

未

四月

伊藤多加右衛門

(文政七年)

九八 松岡謙濟

(九一〇一六)

覚

横手・錢塘・五町三手永<sub>二</sub>而、医業浅山文裁列六人進席申立之趣<sub>二</sub>付、為御聞方被差出、打廻見聞仕候趣左之通御座候。

横手手永西正保村居住

御郡医師並

浅山文裁

右<sub>者</sub>、享和三年親跡御郡代直触医師被召出候已来、家業心懸能、

療治方出精仕候旨<sup>二</sup>而被賞、文化十二年御郡医師並被仰付、弥以近方<sup>者</sup>勿論、遠方を懸手広療治方<sup>并</sup>不相交門生を<sup>茂</sup>相仕立、医儒学共相唱申候様子、委細本紙書面之通御座候。貧民謝礼等<sup>茂</sup>届兼、施薬同前之もの多ク相聞候得共、左様之もの<sup>江者</sup>、猶更心を相用候様子<sup>二</sup>、氣服いたし申候由、多年家業格別心懸篤、療治方手広出精仕候由、相聞申候。

錢塘手永方丈村居住

御郡医師並

緒方玄箋

右<sup>者</sup>、文化十年親跡御郡代直触醫師被召出候已来、家業心懸能、療治方出精仕候旨<sup>二</sup>而被賞、同十二年御郡医師並被仰付、弥以医儒学共心懸厚、兼<sup>而</sup>門生教導仕、且余計病人数<sup>并</sup>貧民<sup>江者</sup>、施薬同前之様子とも<sup>二</sup>本紙書面之通御座候。家業格別心懸篤、療治方手広出精仕候由、相聞申候。

同手永錢塘村居住

御郡医師並

土井計理

右<sup>者</sup>、安永九年親跡御郡代直触醫師被召出候已来、家業心懸能、療治方出精仕候旨被賞、文化十一年御郡医師並被仰付、且病人救<sup>并</sup>貧民<sup>江者</sup>、施薬同前之様子、本紙書面之通御座候。当年迄四十ヶ年家業心懸篤、療治方手広出精仕候由、相聞申候。

同手永中奥古閑村居住

御惣庄屋直触醫師

庄野逸記

右<sup>者</sup>、父庄野東記御郡代直触醫師跡式文化十四年御惣庄屋直触被召出候已来、家業心懸能、至貧之もの<sup>江者</sup>、施薬同様投薬仕、格別心を用候様子、本紙書面之通相聞申候。

同手永北走瀉村居住

御惣庄屋直触醫師

松岡謙濟

右<sup>者</sup>、数代医業家<sup>二</sup>、父松岡仙禎儀、天明六年御郡代直触醫師被召出、三十六年御郡並之御用<sup>并</sup>家業相勸申候由之処、病氣<sup>二</sup>付依頼被成御免候由、右謙濟儀、文政三年御惣庄屋直触醫師被召出候已来、学業心懸能、余計之病人救請持、且川筋自他之船出入之もの<sup>茂</sup>致療治、貧民<sup>江者</sup>、施薬同様心を用申候様子共、本紙書面之通御座候。家業格別心懸篤、療治方出精仕候由、相聞申候。

五町手永船津村居住

御惣庄屋直触醫師

池田慎濟

右<sup>者</sup>、文政三年御惣庄屋直触醫師被召出候已来、方角<sup>者</sup>勿論、遠方<sup>二</sup>懸り病人救、且貧民<sup>江者</sup>、施薬同様投薬仕申候様子、本紙書面之通御座候。右所柄旅船之もの<sup>茂</sup>療治いたし、家業格別心懸篤、療治方出精仕候由、相聞申候。

右六人之医業何<sup>レ</sup>、貧富<sup>并</sup>昼夜之無差別打廻、諸人一稜為合相成候由、一体唱宜承申候。右之通見聞仕候趣、書付御達申上候。

未六月

丸山林次



(文政八年)

九九 江口儀兵衛

(九一二一一)

覚

松山手永馬瀬村居住、諸役人段<sup>ニ</sup>而病死仕候  
江口理助悴

江口儀兵衛

四十一歳

右儀兵衛父江口理助跡式願<sup>并</sup>質地捨方寸志<sup>ニ</sup>而御賞美筋願<sup>ニ</sup>付、  
為御聞方被差出承合申候処、右理助儀、安永八年より松山会所役  
相勤、親代追々寸志差上候訳等<sup>ニ</sup>被対、文化三年親跡一領一疋被  
召出、文化四年江戸御類焼<sup>ニ</sup>付、鳥目壹貫目寸志差上申候処、諸  
役人段被仰付置、相勤居申候処、文政五年十二月病死仕候由。右  
儀兵衛儀、寛政十一年より松山会所見習<sup>ニ</sup>罷出、追々小頭会所詰  
<sup>ニ</sup>操上<sup>ニ</sup>相成、文化十年大見村庄屋助役兼帶申付<sup>ニ</sup>相成、相勤居  
申候処、同十二年庄屋助勤之儀<sup>者</sup>差免<sup>ニ</sup>相成、会所一偏申付<sup>ニ</sup>相  
成、追々格別精勤之稜々<sup>者</sup>御郡代限賞美等有之候由。同十三年  
二月会所詰差免<sup>ニ</sup>相成、松原村庄屋役申付<sup>ニ</sup>相成、文政三年四月  
馬瀬村庄屋<sup>ニ</sup>村替申付<sup>ニ</sup>相成、同五年依願、右村庄屋役差免<sup>ニ</sup>相  
成、都合二十四年役方心懸手全出精相勤申候由。武芸之儀、炮術  
・捕手本紙之通入門仕、稽古仕居申候由。惣体人物宜敷御座候  
由。且又質地捨方寸志之儀、證文前元錢一紙高九貫貳百貳拾七匁  
九分、御郡代より達前<sup>ニ</sup>御座候処、郡浦手永長濱村助三地方名子

書入證文貳枚<sup>ニ</sup>而三貫目<sup>并</sup>右村庄屋釜賀直助当分借貳百五拾目、  
且松山手永立岡村仁左衛門・源左衛門・清左衛門・甚兵衛四人、  
地方書入證文三枚<sup>ニ</sup>而百四拾七匁、都合三貫三百九拾七匁、引残  
五貫八百三拾目九分、質地御格之證文<sup>ニ</sup>而者無御座候得共、見圖  
帳より坪々引合、地主共手前相糺申候処、地方書入共證文、前之  
通相違之儀<sup>茂</sup>無御座候。年々恩米相応<sup>ニ</sup>払出、御百姓<sup>ニ</sup>成立得不  
申候処、此節被召上、直<sup>ニ</sup>元地主共<sup>ニ</sup>被為拝領被下候ハ、難渋  
之地主共、一稜民力之強メ<sup>ニ</sup>相成可申由、相聞<sup>江</sup>申候。右之通見  
聞仕候趣、書付御達申上候。以上

申

六月

赤星富右衛門

儀兵衛儀、達之通御座候間、親代寸志諸役人段二代目世滅究  
之通、御郡代直触未席可被召出哉。且質地捨方九貫貳百目余  
寸志差出候<sup>ニ</sup>付、儀兵衛<sup>江</sup>相追応之御品被下置度申立有之候  
得共、民力強メ、各別抜候様子<sup>ニ</sup>茂相見不申、並々之儀と相  
聞申候間、先年以来究被置候通り、御間<sup>ニ</sup>承届候段及達可申  
哉。

右付札之通、六月廿七日及達候。

一〇〇 大田黒方七

(九一二一一)

御内意之覚

御惣庄屋直触<sup>ニ</sup>而、郡浦会所惣見扱、城塚村  
庄屋兼帶

大田黒万七

歳六十四

右者安永四年会所小頭申付、追々繰上、其後下代役ニ転シ、去申年迄年数都合五十年出精相勤居候処、同年三月下代役者、差免会所惣見拟ニ而、御免方算術等手永中指南仕候様申付、当三月より者城塚村庄屋役、兼帯申付候処、何れ茂出精相勤申候。  
一享和三年請御免被仰付候節、しらへ方等一切御免方招受相勤、格別出精相勤申候。

一文化十一年役方出精仕候ニ付、無苗御惣庄屋直触ニ被仰付候事、一文政三年勤方出精仕候ニ付、苗字被成御免候事、

右之通当酉年迄都合五十一ヶ年手全ニ出精相勤居申候、總統算術達者ニ而、開平法等之術、習熟仕、御免方之儀、受免已前より取扱、前後委敷合点仕居、若年之頃より会所役人者不及申、村々庄屋帳書等仕立候者余計ニ有之、既ニ近年者手永中庄屋子弟杯往々御用ニ可相立人柄江著、御免方懇ニ指南仕、専ら仕立居申候。右之通老年不懈出精仕、吃度御用ニ相立候者ニ而、第一五十年余之勤勞、彼是被賞、乍恐此節御郡代直触被仰付、尚作紋麻上下一具被為拝領被下候様、於私共奉願候。此段宜敷被成御參談可被下候。以上

酉

宇土

七月

御郡代

御郡方

御奉行衆中

万七儀、達之通ニ而、五十一年相勤見合、有之候間、御郡代直触可被仰付哉。

但右之通年功被賞候ハ、猶麻上下被下置ニ者及申間敷哉と奉存候。

右付札之通、十月七日達。

寛

別紙大田黒万七身分申立之趣、本紙之通相違無之様子ニ相聞、行状異候儀承不申候。見聞仕候趣、御達申上候。以上

酉

九月

古閑文平次

一〇一 正垣熊次

(九一二一一)

御内意之寛

郡浦手永井樋方助役在勤中諸役人段ニ而、致病死候正垣常右衛門倅

正垣熊次

年四十九

右熊次親正垣常右衛門儀、安永七戌七月、親跡一領吉疋被召出、天明五年九月、宇土郡塘方助役并網津村赤石場見拟兼帯相勤、文化十三子三月より猶郡浦手永見拟を、兼勤仕候。文化十四丑正月多役手全ニ相勤候付、在勤中諸役人段ニ被仰付置候。文政元寅正月、井樋方助役ニ転役仕、御奉公都合四十八ヶ年出精相勤、当西五月病死仕候

一倅熊次儀、手全成者ニ而、炮術・劍術を、茂出精仕、則師範覚書之

十一月

河口新兵衛門

(文政九年)

一〇二 松本岩右衛門

(九一二一三)

通<sup>ニ</sup>御座候。且又、昨年より<sup>者</sup>親代役を<sup>茂</sup>相勤、惣体右家筋之儀者、根元一領一疋<sup>ニ</sup>被召出、常右衛門迄四代相統被仰付置候間、熊次儀<sup>茂</sup>親跡一領一疋被召出被下所持仕居申候。開立山之儀<sup>茂</sup>直<sup>ニ</sup>被為拜領被下候様有御座度、於私共奉願候。此段御内意仕候条宜被成御參談可被下候。以上

酉

宇土

九月

御郡代

御郡方

御奉行衆中

熊次儀達之通<sup>ニ</sup>而、数代壹領一疋相統被仰付来候家業筋之者<sup>ニ</sup>付、見合<sup>茂</sup>御座候間、父同様壹領一疋被召出、開立山直々可被下置哉。

右付札之通十二月廿七日達

一師役々々より相伝之次第等達之書付打略之。

覚

郡浦手永井樋方助役在勤中諸役人段<sup>ニ</sup>而致

病死候正垣常右衛門悴

正垣熊次

右親跡申立之趣<sup>ニ</sup>付承合候処、手全成人物<sup>ニ</sup>而、書算仕武芸稽古仕候由、其外申立之通相聞行状<sup>ニ</sup>付相替唱<sup>茂</sup>承不申候。尤御赦免開三反、同立山三反、郡浦手永中村綱引村之内<sup>ニ</sup>而所持仕居候様子<sup>ニ</sup>御座候。以上

酉

一〇二 松本岩右衛門

(九一二一三)

御内意之覚

郡浦会所手代<sup>ニ</sup>而病死仕候御郡代直触、松本米助悴

郡浦会所詰御免方

松本岩右衛門

歲四十二

右岩右衛門親松本米助儀、安永七年八月より村役申付、天明六年九月郡浦会所役<sup>ニ</sup>転シ、文化十年五月郡浦手永御家人中樺火矢打方・入用幕数、其外諸式一切自勘<sup>ニ</sup>而相調差出候を、御天守方江被召上且役方多年出精仕候旁<sup>ニ</sup>付而、御郡代直触<sup>ニ</sup>被仰付、不相替会所手代・下代而役兼勤仕、役方都合四十七ヶ年精勤仕居候内、去申二月病死仕候。

一悴岩右衛門儀、寛政十年午五月会所詰小頭申付、文化十一年十一月御免方付<sup>ニ</sup>転シ、当酉年迄都合式拾八年精勤仕居申候。総体至而手全成者<sup>ニ</sup>而、筆算等<sup>茂</sup>違者<sup>ニ</sup>仕、第一御免方<sup>ニ</sup>心掛厚ク一体吞込宜敷、一稜御用<sup>ニ</sup>相立申候。且又親代差出置候樺火矢入用諸式之儀、其後追々之手入等、今以引受、自勘<sup>ニ</sup>而仕繼申候付、御家人中稽古屹度為合<sup>ニ</sup>相成、向後共<sup>ニ</sup>右岩右衛門より仕繼方仕候存

念之由。且会所役繁勤之内<sup>ニ</sup>茂、武芸を<sup>茂</sup>心掛宜敷、炮術・劍術・槍術等稽古仕、両芸<sup>者</sup>目録を<sup>茂</sup>相伝仕候。則師範覺書を<sup>茂</sup>相添申候。親米助数十年役方出精仕勤懸り、病死仕、彼是<sup>ニ</sup>被対、乍恐苗字御免・御惣庄屋直触被召出被下候様、於私共奉願候。此段宜敷被成御參談可被下候。以上

酉

宇土

十月

御郡代

御郡方

御奉行衆中

岩右衛門儀、書面之通<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>、苗字御免之御惣庄屋直触被御付被下候様申立<sup>ニ</sup>御座候。然処通例御郡代直触<sup>ニ</sup>代目<sup>者</sup>、無苗<sup>ニ</sup>而御惣庄屋直触被御付候見合<sup>ニ</sup>候処、岩右衛門儀<sup>者</sup>、会所詰小頭より御免方付とも<sup>ニ</sup>、今年迄<sup>ニ</sup>都合二十九相勤、右役方<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>、是迄被賞候儀無之候付、此節相成<sup>ニ</sup>被賞筋<sup>茂</sup>可有御座哉。尤会所詰<sup>者</sup>、二十五年已上<sup>ニ</sup>而、礼礼被成御免、三十五年已上<sup>ニ</sup>而、無苗・御惣庄屋直触、四十五年已上<sup>ニ</sup>而、苗字被成御免・御惣庄屋直触被御付候見合<sup>ニ</sup>付、岩右衛門儀親之跡目、其身今迄之勤功迄にてハ申立通り<sup>ニ</sup>ハ、至り兼申候。然処郡浦手永御家人中棒火矢稽古打方之節、入用之品々御天守方より御借渡有之候処、遠路持越之往返、御道具<sup>續</sup>し夫仕、彼是之難涉<sup>茂</sup>有之候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>、親米助より諸品一式自勘<sup>ニ</sup>而相調差出置、一廉所柄之為合<sup>ニ</sup>相成候付、米助儀<sup>者</sup>、役方出精貧民<sup>江</sup>實地代捨方旁を以、御郡代直触被御付候。岩右衛門儀も、右之品々手入等引受、自勘<sup>ニ</sup>而向後共<sup>ニ</sup>仕継方いた

し候由、右<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、御家人中稽古、屹度為合<sup>ニ</sup>茂相成候由<sup>ニ</sup>付、岩右衛門も役方精勤旁を以、御郡代直触<sup>ニ</sup>代目之究り、無苗・御惣庄屋直触を一階被進、苗字御免之御惣庄屋直触可被御付哉。

但岩右衛門儀、武芸心懸宜敷ク、炮術・劍術<sup>者</sup>、目録を<sup>茂</sup>相伝いたし候由<sup>ニ</sup>付、此儀<sup>者</sup>御間<sup>ニ</sup>承届之及達可申哉。

右付札之通、四月十八日達。

覚

郡浦会所手代<sup>ニ</sup>而、病死仕候御郡代直触松本米助俸

松本岩右衛門

右<sup>者</sup>親跡相続申立之趣<sup>ニ</sup>付、御聞方仕候処、父米助儀、安永七年村役<sup>ニ</sup>相成、天明六年会所役<sup>ニ</sup>転シ、所柄御家人棒火矢稽古仕候節、入用之品々御天守方より願下ケ、且相納申候<sup>ニ</sup>付、殊之外不弁理<sup>ニ</sup>付、自勘<sup>ニ</sup>而相調差上申度奉願、願通被成御免、直<sup>ニ</sup>会所預被御付、稽古之節々、一綾之為合相成申候由御座候。役前<sup>茂</sup>手堅去々年迄四十七年相勤、病死仕候由、尤棒火矢打方入用之品々、左之通御座候。

- 一 御紋付御幕 二張
- 一 紺 右同 一張
- 一 星幕 一張
- 一 鷹 二振
- 一 細引 四筋

一 町繩 一隻

右之通拵置申候倅岩右衛門儀、寛政十年会所小頭申付相成、当年迄二十九年相勤申候由、且前条入用之諸品<sup>者</sup>為冥加仕繼差上申度存念之由相聞申候。武芸等<sup>茂</sup>心懸能、役前<sup>茂</sup>吞込居、数年手全出精相勤申候様子承申候。右見聞<sup>二</sup>仕候趣、書付御達申上候。以上

成

二月

丸山林次<sup>㊟</sup>

一〇三 中園英之助・井上育太郎

(九一二一三)

御内意之覚

郡浦手永地土中園弥右衛門倅、塘方助役

中園英之助

松山手永唐物拔荷改方御横目<sup>并</sup>御郡代手付横

目兼勤、井上甚次第

井上育太郎

右英之助儀文政三年、育太郎儀同五年塘方助役申付候処、兩人共

<sup>二</sup>役方心懸厚、出精仕候。然処諸御郡塘方助役之儀<sup>者</sup>、下地之席<sup>二</sup>

不拘、都<sup>而</sup>在勤中一領一疋被仰付、宇土郡塘方助役之儀<sup>者</sup>、從

前々下地之持席<sup>二而</sup>、役方迄申付、其段御達仕来候儀<sup>二</sup>御座候得

共、諸御郡と不对<sup>二</sup>御座候間、右兩人共<sup>二</sup>在勤中一領一疋<sup>二</sup>被仰

付被下候様有御座度、於私共奉願候。此段宜敷被成御參談可被下

候。以上

酉

宇土

五月

御郡代

御郡方

御奉行衆中

御郡方付紙

父兄懸之者、列席被召仕候<sup>而者</sup>、株増候形<sup>二</sup>御座候得共、倅

<sup>者</sup>、追<sup>而</sup>親跡を繼候<sup>へ者</sup>、暫之儀御座候。二男弟等<sup>者</sup>、永株

相増、本行育太郎儀<sup>者</sup>、弟之事<sup>二</sup>付株増<sup>二</sup>相見候得も、出精

相勤候を、今更退役も難被申付可有御座哉。其上父兄懸之

者、列席<sup>二而</sup>、在勤中被召仕候ハ、外々見合も有之事<sup>二付</sup>、

旁本行申立通可被仰付哉。

御郡方

英之助、育太郎儀、達之通にて、宇土郡塘方助役之儀、是迄

<sup>者</sup>、下地之持席<sup>二而</sup>相勤来候由<sup>二者</sup>御座候得も、外々御郡<sup>二而</sup>

<sup>者</sup>、在勤中一領一疋被仰付、二男弟之類<sup>二而</sup>も、同様被仰付

候儀、追々見合有之、達之趣無余儀筋<sup>二</sup>相聞候間、兩人共塘

方助役、在勤中一領一疋可被仰付哉。

右付札之通、四月十八日達。

覚

宇土郡地土中園弥右衛門倅、塘方助役中園英之助列、兩人在勤中

一領一疋申立<sup>二付</sup>、御聞方仕候趣、左<sup>二</sup>申上候。

郡浦手永地土中園弥右衛門倅

塘方助役

中園英之助

松山手永唐物拔荷改方御横目、御郡代手付横

目兼勤、井上甚次第、塘方助役

井上育太郎

右兩人役所心懸能相勤候由、行状異候儀承不申候。  
右之通見聞仕候。以上

酉

九月

河口新兵衛<sup>㊦</sup>

一〇四 田邊藤吉

(九一二一三)

御内意之覚

郡浦手永戸口浦御番人

田邊藤吉

右田邊藤吉儀、文化六年八月宇土郡戸口浦御番人被仰付、式人扶持、御切米五石被下置、御奉公無懈怠相勤居申候。文化十二年二月同役松村奎助病死、跡役未被仰付<sup>内者</sup>、數ヶ月一人<sup>二而</sup>相勤、同年八月右奎助、跡役奥野傳十郎<sup>江</sup>被仰付、右傳十郎儀、同十三年二月御番役被成御免、跡役河口傳吉同年八月引越候迄、全一人にて精勤致し、惣体平日共御番手全<sup>二</sup>出精仕、当年迄都合十七ヶ年迄、都合十七ヶ年相勤居申候。且同役替代等之欠月兩度之日數壹ヶ年余之出精、旁<sup>二</sup>被对、乍恐御見合を以、御切米壹石被増下候様有御座度、於私共奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御参談可被下候。以上

酉

宇土

九月

御郡代

御郡方

御奉行衆中

藤吉儀、達之通<sup>二而</sup>、御番人今年まで<sup>二</sup>十八年<sup>二</sup>相成、見合<sup>茂</sup>藤座候<sup>而</sup>、御切米壹石可被増下哉。御切米五石、式人扶持被下置候。

但三角瀬戸口御番人河口弾次見合を以、相しらへ申候。

右付札之通、四月廿七日申渡。

覚

郡浦手永戸口浦御番人

田邊藤吉

右身分申立<sup>二</sup>付、御聞方仕候処、文化六年右御番人被仰付、式人扶持、御切米五石被下置、当年迄十八年無懈怠相勤、其内同役引替之節々、壹人<sup>二而</sup>相勤申候様子、本紙之通<sup>二而</sup>、手全出精相勤申候由御座候。右見聞仕候趣、書付御達申上候。以上

戌二月

丸山林次<sup>㊦</sup>

一〇五 中熊勝平

(九一二一四)

御内意之覚

御郡代直触<sup>二而</sup>、病死仕候中熊喜左衛門<sup>悴</sup>宇土町居住

中熊勝平

当戌三十五歳

右勝平父中熊喜左衛門儀、天明二年十二月、松山手永村々難波<sub>二</sub>付、為取救鳥目三貫目寸志差上申候処、同三年正月御郡代直触被召出、寛政七年御手伝御用之節、金子五兩寸志差出、同九年御才覚錢三貫目調達仕、追々<sub>二</sub>五百四拾目被返下、残式貫四百目寸志差上申候処被賞、作紋御拾羽織一ツ被為拜領候。文政三年日光御靈屋向御手伝之節、鳥目拾寸寸志差上、都合四拾六年御郡並之御奉公相勤、文政八年十月病死仕候。勝平儀、惣体手全成者<sub>二</sub>而武芸之儀<sub>者</sub>宇土御家中渡辺素内・武藤傳兵衛門弟<sub>二</sub>而、長刀捕手心懸能、稽古仕、相応之御用<sub>二</sub>者、相立可申者<sub>二</sub>御座候間、何卒苗字御免之御惣庄屋直触被仰付被下候様、且又、勝平儀、質地借賤捨方仕、一稜民力強<sub>二</sub>相成候儀、別紙之通相違<sub>茂</sub>無御座候間、何卒相応之御賞美被仰付被下候様、於私奉願候条、宜被成御參談可被下候。以上

十月

荒木万蔵

御郡方

御奉行衆中

勝平儀、達之通<sub>二</sub>者、有之候得共、苗字御免・惣庄屋直触<sub>二</sub>者難被仰付、寸志<sub>二</sub>而御郡代直触二代目究之通無苗<sub>二</sub>而御惣庄屋直触可被仰付哉。  
但、質地捨方いたし候儀<sub>者</sub>、追々見合之通、御間承届之及達可申哉。

右付札之通四月廿七日達

一〇六 太七、理三次 他

(九二二一四)

覚

前田畑六枚 元卷反七畝 四拾四番之内 上古閑村地主

一、畑六畝拾五步 内 上卷畝拾五步 太七

下々五畝

高六斗卷升八合九勺七才

此質代錢貳百拾貳匁

右之畑、寛政七卯十二月、私父安右衛門より質地取置申候処、其後太七より請返、新左衛門と申者<sub>江</sub>讓地<sub>二</sub>壳渡、当時<sub>者</sub>新左衛門請持地<sub>二</sub>相成申候。然処太七より請返候節、證文ハ受取不申、矢張私宅<sub>二</sub>有之候を、亡父安右衛門右之證文を以、宇土町中熊喜左衛門殿方<sub>江</sub>、鳥目貳百拾貳匁借用仕候由<sub>二</sub>而御座候。

小無田壹枚 三百四拾六番 同村質地置主

一 田八畝 理三次

此質代錢七拾目

右之田方天明三年卯十二月、私父安右衛門より質地<sub>二</sub>取置、其後讓地<sub>二</sub>買切申候処、以前之質地證文其儘有之候を、宇土町中熊喜左衛門殿方<sub>江</sub>差遣、鳥目七拾目借用仕申候由<sub>二</sub>而御座候。尤右地方<sub>者</sub>、当時私作廻仕居申候。

錢合貳百八拾貳匁

但古證文指出、中熊喜左衛門殿より借用仕居候分。

右<sub>者</sub>先年私親安左衛門より宇土町中熊喜左衛門殿方<sub>江</sub>、右之古證文差出、鳥目貳百八拾貳匁借用仕居申候処、今度中熊勝平殿より

捨方ニ相成申候処、證文差出候由ニ而、坪々見図帳前より御引合御糺方被仰付、恩米等何程完相払来候哉可申上旨被仰付趣、奉得其意候。右者但書ニ申上候通、何レ<sup>茂</sup>不用之證文ニ而御座候を、亡父安右衛門より中熊喜左衛門殿江指遣、鳥目借受十五・六ケ年以前病死仕申候。其比ハ私幼年ニ御座候ニ付、恩米何程完之極メ御座候哉。相分不申候得共、亡父安右衛門鳥目借請居候ニ付、相違無御座候ニ付、安右衛門病死、即年より銀米壹俵完、年々相払来申候処、凶作打続、五・六ケ年恩米払方<sup>茂</sup>不仕、不埒ニ押移居申候処、右地方此節御捨方可被下旨、御達ニ相成候由。難波之私、先者一稜為合ニ相成、難有仕合ニ奉存候。此上幾重ニ<sup>茂</sup>宜敷被成御達可被下候。為其覺書を以申上候。以上

文政八年六月

上古閑村

用助

右用助申上候通、相違無御座、此節捨方ニ相成申候得ハ、一稜為合ニ相成申候間、幾重ニ<sup>茂</sup>宜敷被仰付被下候様、於私<sup>茂</sup>奉願候。為其肩書を以申上候。以上

同村庄屋

儀平

三隅丈八殿

一〇七 清八、伊助 他

(九一二一四)

覚

長塘七枚 百五拾番

笠岩村質地主

一田貳反三畝 内 中壹反三畝

当時

下壹反

清八

後家

此定米貳石四斗貳合

上ノ割 貳百五拾五番

一畑七畝 内 上五畝

中式畝

此定米貳斗八升

田畑合三反

定米貳石六斗八升貳合

此質地代六百目

右之田畑、寛政元酉七月、父伊左衛門代地方証文を以、宇土町中熊喜左衛門殿江作り懸り之約束ニ而、鳥目六百目借用仕、恩米七斗貳升完、年々相払来申候。

畑田 七百番

同村質地主

一上田壹反

当時 伊助

定米壹石貳斗五升

此質地代貳百目

右之田、寛政二年戌十月父久八代地方証文を以、宇土町中熊喜左衛門殿江作り懸り之約束ニ而、鳥目貳百目借用仕、恩米貳斗四升完、年々相払来申候。

畑田 四百五拾七番

一田七畝 内 上五畝

同村質地主

中式畝

当時久七

定米六斗四升七合

後家

上ノ割 貳百三拾番

一上畑三畝



定米壹斗貳升六合

田畑合壹反

定米七斗七升三合

此質地代貳百目

右之田畑、寛政二年戌十月、父清左衛門代地方証文を以、宇土町中熊喜左衛門殿方江作懸り之約束ニ而、鳥目貳百目借用仕、恩米貳斗四升完、年々相払来申候。

定德米惣合四石七斗五合

質地代錢合壹貳百八拾貳匁

右者先年笠岩村清八列親共代、宇土町中熊喜左衛門殿方江地方証文差出、鳥目都合壹百目借用仕申候処、今度中熊勝平殿より捨方ニ相成度、証文被指出候由ニ而、坪々見図張前より御引合御糺方被仰付、恩米等何程完相払来候哉可申上旨被仰付、奉得其意候。

右者小前書を以申上候通り、何れ証文差出、中熊喜左衛門殿鳥目借受、為恩米田畑壹反ニ付、恩米貳斗四升完相払来申候。然ル処、近年凶作打続、其上何レ病災彼是ニ而、至而難没仕候ニ付、恩米等相払不申、不埒ニ押移り居申候処、右地方此節御捨被下候旨、御達ニ相成候由、難没之私共、先者一廉之勝手ニ相成、難有仕合ニ奉存候。此段幾重宜敷被成御達可被下候。為其覚書を以申上候。以上

文政八年六月

笠岩村 清八 後家

同村 伊助

同村 久七 後家

右清八列申上候通、相違無御座、此節捨方ニ相成候得者、

一廉為合ニ相成候間、幾重宜敷被仰付被下候哉。於私も奉願候。為其肩書を以申上候。以上

同村庄屋

新蔵

三隅丈八殿

一〇八 中熊勝平

(九一二一四)

覚

宇土御郡代直触ニ而病死仕候中熊喜左衛門悴

中熊勝平

右身分申立之趣ニ付、承合候処、人物行跡相替候儀、承不申候。且質地捨方仕候儀、別紙之通相聞、何れ為合ニ相成候由承申候。以上

亥

正月

河口新兵衛

(文政十年)

一〇九 芥川源之助、文平

(九一二一五)

御内意之意

錢塘手永

御郡筒ニ而錢友手永東走瀉村庄屋

芥川源之助

御惣庄屋触<sup>ニ</sup>而 同手永南走瀉村庄屋

丈平

右者御献上御用<sup>ニ</sup>成候かせいた製之楯袴、錢友手永走瀉在緑川筋江御仕立被仰付置候処、近年御用分及不足、其上上益城水理出来に付テ出欠方<sup>ニ</sup>茂相成候得者、弥以不足仕候間、水理之障<sup>ニ</sup>相成不申場所<sup>江</sup>者、植繼被仰付仕立方之儀者、諸木仕立方御用懸之衆<sup>江</sup>請込被仰付、尚在勤中御郡代衆御直触<sup>ニ</sup>而、見扱役者人可被立旨<sup>ニ</sup>付、氣厚世話仕候者見立御達申上候様、御達之趣奉得其意候。右<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ見込之趣先達<sup>而</sup>、御内意申上置候通、走瀉在緑川筋之儀者、数千間手広<sup>キ</sup>所柄と申楯袴之儀者、寒中<sup>ニ</sup>差繼不絶手を入不申候<sup>而</sup>ハ難成、殊<sup>ニ</sup>弥尻を嫌申候<sup>ニ</sup>付、古木掘上彼是不一通手数<sup>ニ</sup>御座候処、当時迄主<sup>ニ</sup>成候者も無御座、漸々御用御支<sup>ニ</sup>茂相成候儀<sup>ニ</sup>付、乍恐此節右兩人見扱役被仰付、在勤中御郡代御直触<sup>ニ</sup>被召直被下候様奉願候。惣躰右之者共儀者、初発楯袴御仕立被仰付候節より、自身々々<sup>江</sup>茂余計<sup>ニ</sup>仕立、小前々々も誘立申候へ共、植元御用外壳買遠キ品柄故木主共、進兼申候を数年來世話仕、當時迄右御用出精相勤候儀者、御音信所<sup>江</sup>茂顯然仕居候儀<sup>ニ</sup>付、所詮外々より新規之人柄見扱役被仰付候<sup>而</sup>茂、向々存分仕立方行届不申見込<sup>ニ</sup>御座候間、乍恐右兩人<sup>江</sup>請込被仰付被下候ハバ、双方刻受持を以、仕立方差入り誘立後年共御用無御支様、平日私ども重疊相誘可申候間御別段を以見込之通被仰付可被下候、左候得<sup>者</sup>も外々より見扱役被仰付候と違御時節柄御心付等新規之御出方<sup>ニ</sup>も及不申、重<sup>キ</sup>御献上御用御国産<sup>ニ</sup>而相調、向々御意筋<sup>ニ</sup>茂相成候儀

<sup>ニ</sup>付、旁御別段被為及御詮議被下候様、重疊奉願候。此段御内意覚書を以申上候。以上

文政十年七月

錢友勇助<sup>印</sup>

増田角助殿

當時まるめろ手入之時候<sup>ニ</sup>差向候間、本行兩人急速<sup>ニ</sup>見扱役被仰付被下候様、御郡方御分職より口達可有候事。

御郡方

御献上御用<sup>ニ</sup>相成候かせいた製之楯袴、錢塘走瀉在緑川筋御仕立被仰付置候得共、近年御用分及不足申候<sup>ニ</sup>付、猶此節、取扱仕立方被仰付候<sup>ニ</sup>付、見扱役可被仰付旨、御達之趣承知仕、御惣庄屋見込之人物相違候様、内意及違置申候処、右之通相違申候。兩人之者共儀、初発御仕立之節より自身々々余計<sup>ニ</sup>仕立、小前々々<sup>江</sup>茂相誘世話仕、専出精仕候者共<sup>ニ</sup>御座候間兩人共<sup>ニ</sup>見扱役被仰付、在勤中御郡代直触被仰付被下候、乍恐於私奉願候。此段可然様被成御参談可被下候。以上

八月

増田角助

御郡方

御奉行衆中

源之助列儀、達之通新規之儀<sup>者</sup>御座候得共、かせいた之儀<sup>者</sup>御献上御用之品<sup>ニ</sup>付、楯袴衰微いたし候<sup>而</sup>者、難相濟候間兩人儀別段を以桑蚕方之者之見合を以楯袴見扱在勤中御郡代直触可被仰付哉。

右付札之通八月晦日達

覚

錢塘手永御郡簡東走瀉村庄屋

芥川源之助

歲三十三程

同手永御惣庄屋直触南走瀉村庄屋

丈平

歲七十程

右兩人、御進上御用ニ相成候かせいた製之楯棒成実及不足候旨ニ而、見抄役申立之趣ニ付、見聞仕候處、左之通

一芥川源之助儀、書算等可也ニ仕、相応之氣働も有之人物手全成由、相聞行狀ニ付、異候唱承不申候。

一丈平儀、実体成人物ニ而、庄屋役多年手全ニ相勤候由、行跡ニ付異候唱承不申候

右楯棒之儀、兩人之受持仕立分村笠ニ有之、惣体成実仕候程ハ利潤を得候事ニ付、此節自身々々サハ相励手入等心懸申候ハ、其<sub>者</sub>余自然と進立可申哉、前条之通ニ而、右兩人見抄役被仰付候<sub>而</sub>も随分相勤可申人物ニ見聞仕候。以上

河口新兵衛<sup>㊦</sup>

右之通被仰付候。以上

文政十年八月

服部太門

安野形助

不破敬次郎

一一〇 嶋田源之助

(九一二一五)

御内意之覚

御郡代直触、郡浦手永戸口浦村庄屋

嶋田源之助

右源之助儀、父嶋田源十網田・戸口浦兩村庄屋役相勤居候内、津波跡諸御用繁ク有之候付、寛政四年八月より右兩村ともに、源之助<sub>江</sub>庄屋代役申付、同九年十一月戸口浦村庄屋本役申付、同年十二月網田村庄屋役も兼勤申付置候處、多病ニ而断願出候付、文化三年網田村庄屋役<sub>者</sub>差免、戸口浦村迄勤続、当四年迄代役已来三十四年、本役二十九年出精相勤申候。然處近年弱柄ニ相成、庄屋役勤兼候由ニ而、断願出申候ニ付、差免候筈ニ御座候。尤數十年格別ニ精勤仕、其内<sub>ニ</sub>者津波大變ニ而、田畑・川井手等之形<sub>茂</sub>無之程之儀ニ御座候處、漸々と取起シ、右之節村方溺死多ク、惣人數七百九拾五人之内、式百六拾人活殘、誠ニ身骸迄相殘候迄之仕合ニ候處、種々成立之仕法等、朝夕ニ厚相示、其後次第ニ夫々之稼業ニ取巨り、人數漸を以、近年愈相増、当時<sub>ニ</sub>而者、五百人余ニ相成申候。畢竟取扱筋宜ク、平日儉約を専ラ相示、諸事行届候所より、右之通にて、一廉之功績<sub>茂</sub>相見、且勤年數<sub>茂</sub>前段之通ニ付、旁以被賞、乍恐作紋麻上下一具被為拝領被下候様、於私共奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

四月

宇土

御郡代

御郡方

御奉行衆中

村庄屋<sub>者</sub>五十年之勤ニ而、御郡代直触被仰付見合ニ候處、

源之助儀ハ、庄屋本役已後二十四年目、文政三年役方出精いたし、炮術心掛厚、目錄相伝いたし、且父存生之節、役

方数十年致出精、先年津波之砌、家内数人溺死いたし、

村々之者数百人及死亡、相残候もの共、居屋敷并田端刻

渡、其外荒地発方彼是、大造之儀候処、始末差はまり、万

端厚心を用、格別心配相働候付、旁を以御郡代直触被仰付

置、夫より本行申立之趣<sup>者</sup>、右直触被仰付候節之辞令<sup>二</sup>茂

相加り居候通<sup>二</sup>有之、其上手数間近<sup>三</sup>茂有之候間、此節申

立通りを以、作紋上下<sup>者</sup>難被下置可有御座哉。尤此度庄屋

役断願出候付、被差免筈<sup>二</sup>付而、御郡代より追々御達之趣

も御座候間、無味<sup>二</sup>も難被閣、銀三両可被下置哉。

右付紙之通、十二月廿八日紙面達。

覚

宇土御郡代直触・郡浦手永戸口浦村庄屋

嶋田源之助

右御賞美申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、柔和成人物<sup>二</sup>而、役向出精

相働候由。其外書面之通相聞、行状等相替候儀承不申候。此段見

聞之趣御達申上候。以上

西

七月

河口新兵衛<sup>㊦</sup>

(文政十一年)

一一一 松岡謙濟

(九一一一七)

御内意之覚

錢塘手永北走瀉村居住御惣庄屋直触医師

松岡謙濟

三十八歳

右謙濟儀、先祖已来医業六代相統仕、親松岡仙禎儀、天明六年四

月御郡代直触被仰付、三十六年御郡並御用相勤、家業心懸能、

追々御賞美被仰付置候処、病氣差起、依願直触御免被仰付、右謙

濟儀、文政三年十一月家業心懸能、学問<sup>并</sup>病用致出精候<sup>二</sup>付、苗

字御免御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付、同年十一月本山御作事地形揚出夫

之節罷出、出精いたし候段御間御聞届之被及御達候、惣体学業出

精療治方至<sup>而</sup>心懸能、遠近數十ヶ村病人数式千人余有之、其外新

開<sup>并</sup>密柑<sup>江</sup>入津仕候御米船、其外自他之船々病人等有之節<sup>者</sup>、右

謙濟<sup>江</sup>相頼、年々療治方相増素より病家貧福無差別、昼夜打廻出

精仕、其外奥古閑新地築立出夫之節<sup>并</sup>松山手永立岡堤御普請<sup>二</sup>付

鮑田・詫摩出夫之節も罷出、近來水理御普請走瀉小屋話之面々を

療知仕、格別出精仕候<sup>二</sup>付、先役より申立之書付御達仕置候得

共、未た如何様とも御様子無御座候間、此節被賞御郡代直触被召

直被下候様奉願候、此段御内意仕候条、可然様被成御参談可被下

候。以上

正月

鮑田

御郡代

御郡方

御奉行衆中

謙濟儀達之通<sup>二</sup>付、医業吟味役<sup>并</sup>再春館御目附<sup>江</sup>茂及向合

申候処、家業心懸宜治療習熟学業篤志病用出精いたし候由

丙科<sup>二</sup>相当申候、御目附よりハ学向<sup>者</sup>無之、療治方迄相応<sup>二</sup>

有之候由達有之御惣庄屋直触被仰付候より九年<sup>ニ</sup>相成、右之科目<sup>ニ</sup>てハ進席之見合も有之御郡御目附付御横目見聞之儀も別冊之通療治方出精一稜諸人之為合<sup>ニ</sup>相成候由<sup>ニ</sup>付申立之通御郡代直触可被仰付哉。

右付紙之通九月三日達

覚

錢塘手永北走瀉村居住御惣庄屋直触醫師

松岡謙濟

右身分別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候処、数代医業相統之家筋之由右謙濟儀、文政三年親跡御惣庄屋直触醫師被召出、数ヶ村<sup>ニ</sup>而大略式千人程之病人療治仕、且自他船々不施入津いたし病人有之節<sup>者</sup>是又療治仕、猶又、近年錢塘表大水理一件<sup>ニ</sup>付而、諸手永寄夫御普請之節<sup>ニ</sup>罷出、大勢之内病人<sup>并</sup>怪我人日々十人廿人<sup>茂</sup>有之由、外療<sup>を茂</sup>兼勿論貧富之無差別、昼夜打廻、一稜諸人為合相成、家業心懸能、療治方出精仕候由相聞申候。右見聞仕候趣御達申上候。以上

子三月

丸山林次<sup>㊦</sup>

(文政一二年)

一一二 庄兵衛

(九一二一九)

御内意之覚

傘御免

一 錢三百目

郡浦手永赤瀬村 庄兵衛

右<sup>者</sup>小脇差御免被仰付被下候様。

右<sup>者</sup>今度関東筋川々御普請御手伝御用<sup>ニ</sup>付、寸志差上申度奉願候処、願之通被召上、右錢高御勘定所上納相濟申候間、小右書之通乍恐御賞美被仰付被下候様、於私奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

文政十二年十二月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

庄兵衛儀、達之通寸志高宛之規矩<sup>ニ</sup>相当申候間、小脇差可被成御免哉。

右付札之通十二月十八日達

一一三 小山文平・小山直助

(九一二一九)

御内意之覚

御献上御用楹棹仕立方見拟 在勤中御郡代直

触<sup>ニ</sup>而、南走瀉村居住

小山文平

右<sup>者</sup>天明六年正月南走瀉村庄屋代役申付、寛政七年卯三月親跡庄屋役相談申付置候処、数年之功<sup>ニ</sup>よつて、無苗御惣庄屋直触被仰付置候。惣体人物<sup>茂</sup>宜候<sup>ニ</sup>付、文政十年九月御献上御用楹棹仕立方見拟被仰付、在勤中御郡代直触<sup>ニ</sup>被仰付置、出精相勤申候処、近来重病差発、何分難相勤由<sup>ニ</sup>而、楹棹見拟<sup>并</sup>庄屋役共御免被仰

付被下候様願出申候<sup>二</sup>付、内裏承繕申候處、相違<sup>茂</sup>無御座最早老年之儀<sup>二</sup>茂御座候間、何卒願之通楹棹見<sup>二</sup>御免被仰付被下候様。尤庄屋役之儀<sup>者</sup>、一日<sup>二</sup>而<sup>茂</sup>、急<sup>二</sup>御断申度断申出候<sup>二</sup>付、願之通差免申候。此段宜奉願候。

御郡筒<sup>二</sup>而小山丈平跡南走瀉村庄屋申付候。

右丈平倅

小山直助

三十五歳

右<sup>者</sup>文化十三年四月御郡筒<sup>二</sup>被召抱、同十四年四月父丈平庄屋代役申付、文政七申二月御郡筒小頭申付置候。当年迄庄屋代役十四年、御郡筒小頭共十五年出精相勤申候。右直助儀、生得律儀之者<sup>二</sup>而、人柄宜御座候間、父丈平願之通差免、其跡南走瀉村庄屋申付置申候。依之父跡御献上御用楹棹仕立方見<sup>二</sup>御免被仰付、在勤中御郡代直触<sup>二</sup>被仰付被下候様。尤御郡筒<sup>者</sup>被差免被下候ハ、欠人<sup>二</sup>不相成様、抱続可仕候。此段宜奉願候。右之通、御内意仕候条、可然様被成御參談可被下候。以上

文政十二年九月

飽田

御郡代

御郡方

御奉行衆中

丈平儀<sup>者</sup>、当十月致病死候<sup>而</sup>及僉議不申、左<sup>二</sup>付紙用置申候。

直助儀、達之通<sup>二</sup>而、楹棹仕立見<sup>二</sup>御免被仰付被下候様。在勤中御郡代直触可被仰付哉。

右付札之通、十二月十九日達

覚

錢塘手永<sup>二</sup>而、御献上御用楹棹仕立方見<sup>二</sup>御免被仰付被下候様。小山丈平父子進退、別紙申立之趣見聞仕候處、右丈平儀<sup>者</sup>、当月病死仕候由相聞申候。

右丈平倅御郡筒<sup>二</sup>而、南走瀉村庄屋

小山直助

右<sup>者</sup>手全成人物<sup>二</sup>而役前心懸能相勤、父丈平楹棹見<sup>二</sup>御免被仰付被下候<sup>者</sup>、内輪代勤を<sup>茂</sup>いたし居候由<sup>二</sup>而、仕立方被是等<sup>茂</sup>能手馴居候。兼<sup>而</sup>見<sup>二</sup>御免被仰付被下候<sup>者</sup>、今度親跡楹棹見<sup>二</sup>御免被仰付被下候<sup>者</sup>、相応可仕人物<sup>二</sup>相聞申候。右見聞之趣、御達申上候。以上

丑

十二月

井上勝藏<sup>印</sup>

井口角之進<sup>印</sup>

一一四 甚平

(九一二一九)

御内意之覚

御惣庄屋直触<sup>二</sup>而、錢塘手永御山口・錢塘会所小頭兼帶

甚平

六十一歳

右甚平儀、天明四年九月親跡錢塘手永御山口申付、文化九年十一

月手永横目役兼帯申付、同十一年七月御山口・手永横目持懸  
二而、海氏村庄屋役申付置候処、文化十二年正月役方多年各別致  
出精候二付、無苗御惣庄屋直触二被仰付、文政四年十二月海氏村  
庄屋差免、御山ノ口持懸二而、錢塘会所小頭役兼勤申付置候。右  
甚平儀、生得律儀なる者二而、海氏村庄屋役在勤中零落所二而御  
座候処、厚ク世話仕、諸事取締、御年貢諸上納茂、速ニ相納、村  
方漸々立直申候。御山ノ口当年迄都合四十六ヶ年相勤、右之内手  
永横目九ヶ年、庄屋役八ヶ年、小頭九ヶ年兼帯を茂申付、出精相  
勤申候二付、乍恐被賞、苗字御免被仰付被下候様奉願候。此段不  
闕、御内意仕候条、可然様被成御參談可被下候。以上

丑

三月

永田平左衛門

御郡方

御奉行衆中

山口并小頭者、四十年二而、無苗御惣庄屋直触被仰付、五  
十年二而、苗字御免之見合二候得共、甚平儀ハ格別精勤いた  
し候二付而、引上り三十二年目二無苗御惣庄屋直触被仰付  
夫より当年迄二十五年二相成、惣年数四十六年相勤、達之  
通に付、別段を以、苗字可被成御免哉。

右付札之通、十二月十九日達

覚

錢塘手永御惣庄屋直触二而、同手永御山口・

同会所小頭兼帯

甚平

右者別紙申立之趣二付、見聞仕候処、惣躰律儀成人物二而、是迄  
勤方之様子、其外勤年数等、委細本紙之通相聞、行状二付異候唱  
承不申候。此段見聞之趣、御達申上候。以上

丑

五月

古閑文平次<sup>㊦</sup>

岡田権兵衛<sup>㊦</sup>

一一五 近藤衛守

(九一二一九)

御内意之覚

宇土住吉燈籠堂御番人之儀二付、御内意之趣御惣庄屋三隅丈八見  
込承置候処、別紙之通書付相達申候。住吉之儀者山中離レ所ニ  
而、外ニ相応見込之人物茂、無御座候間、書面之通住吉宮社司近藤  
大和弟近藤衛守儀、御別段を以在勤中地土ニ被召出、燈籠燈方受  
込被仰付候ハバ、乍聊御出方減ニ茂相成、才一此者、下地正直成  
生質ニ御座候間得競候ハ、差はたり勤上可申、其上本家より壺丁  
計隔居候所柄ニ而便利茂宜、旁以無怠慢燈方可仕と於私茂見込申  
候。此段不闕御内意仕候条、宜被成御參談可被下候。以上

十二月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

宇土郡住吉燈籠堂之儀二付、本紙達之趣二付而御郡方御務  
付紙并御郡御目附付御横目見聞之趣茂左之通二付、是迄之  
通二而ハ相濟申間敷候間、川尻御加子分之灯方者被差上、

外<sup>ニ</sup>所柄在御家人之内、相応之人物<sup>茂</sup>無之様子<sup>ニ</sup>而達之通、住吉宮社司近藤大和弟近藤衛守儀、住吉燈籠堂灯方請持被仰付、在勤中地土可被仰付哉

但、右之通被仰付候ハハ川尻御加子より灯方<sup>者</sup>被差上、且油代減方等之儀<sup>者</sup>御船方・御郡方より夫々達<sup>ニ</sup>相成可申と奉存候。

本紙燈籠堂之儀、川尻御加子兩人引除一人充罷越、一夜越<sup>ニ</sup>受持灯方仕候处、間<sup>ニ</sup>者燈方不致哉之様子<sup>ニ</sup>相聞、三里隔候所柄、風雨之節なとハ怠候儀<sup>茂</sup>可有之哉。然処何れ之<sup>ニ</sup>湊<sup>ニ</sup>而も燈籠堂を目当<sup>ニ</sup>沖より着船いたし候様子<sup>ニ</sup>て<sup>者</sup>、灯無之<sup>而</sup>者、難相濟儀<sup>ニ</sup>付、宇土御惣庄屋見込相達之通、住吉宮社司近藤大和弟近藤衛守<sup>ニ</sup>受込被仰付候ハハ、間近<sup>キ</sup>所柄<sup>ニ</sup>候得<sup>者</sup>、灯方行届可申候。御礼一ヶ年<sup>ニ</sup>油代百貳拾目程御加子兩人御心付三拾五匁程御出方減<sup>ニ</sup>相成申候。且又衛守身分之儀<sup>者</sup>、於選舉方御僉議之筋も可有御座哉

御郡方

御船方

右付札之通十二月廿九日達

覚

宇土郡松山手永住吉燈籠堂御番人之儀、当時迄川尻御船方御加子之内<sup>ニ</sup>而差出来候处、遠方懸勤之時分<sup>茂</sup>加有之、自然燈方相怠候様<sup>ニ</sup>共御座候<sup>而</sup>ハ、自他出入之諸船、風雨之夜中等、目当など失、難<sup>レ</sup>渡仕候<sup>而</sup>者、御主意を貫キ不申候<sup>ニ</sup>付、所柄より燈方引請可申儀<sup>者</sup>、出来仕間敷哉。見込之趣可申上旨被仰付、奉得其意、

乍恐左<sup>ニ</sup>申上候。

一御加子之面々被差出候節<sup>者</sup>、油代五百三拾目御出方<sup>ニ</sup>相成候由、其外昼飯米等も可被渡下哉。此節所柄引請被仰付候得<sup>者</sup>、差寄聊<sup>ニ</sup>而も、御出方減方<sup>ニ</sup>相成不申候<sup>而</sup>難成、重疊申談積仕候处、左之通<sup>ニ</sup>御座候。

一油三斗六升 三月より八月迄、短夜百八十夜。

一一同四斗五升 一夜式合完、燈心十二筋、三所燈シ

九月より翌二月迄、長夜百八十夜。

一夜式合五匁完、右同断。

合八斗壹升 壹升五匁完

此代錢四百五匁

右之通被渡下度奉存候。

一男老入 当丑式十八 近藤大和弟 近藤衛守

右<sup>者</sup>住吉宮社司近藤大和弟<sup>ニ</sup>而、正直成ル人質<sup>ニ</sup>而御座候間、燈籠堂御番人被仰付度、尤乍聊御用相勤候儀<sup>ニ</sup>付、此節別段地土<sup>ニ</sup>被召出被下度奉存候。

一燈籠堂御普請之儀ハ、当時迄之通、往々共<sup>ニ</sup>御出方<sup>ニ</sup>而、御作事被仰付被下度奉存候。

一御番人詰小屋之儀<sup>茂</sup>、当時迄之通、往々共<sup>ニ</sup>松山・郡浦兩手永請<sup>ニ</sup>而、御作事被仰付被下度奉存候。

一住吉之儀<sup>者</sup>、笠岩・長濱より<sup>茂</sup>相隔り居候所柄山中<sup>ニ</sup>而<sup>茂</sup>、放レ家<sup>ニ</sup>而御座候得<sup>者</sup>、遠方より人柄御撰<sup>ニ</sup>相成候<sup>而</sup>茂、風雨之夜中燈方

等無懈怠相勤可申との儀<sup>者</sup>、指はまり難申上御座候处、前段衛守儀ハ本家近辺<sup>ニ</sup>付、兼<sup>而</sup>居住仕居、風雨之夜中諸船之難<sup>レ</sup>渡可仕時



分等、別而為合、相成可申奉存候。

右之通御座候間、宜敷被可成御達可被下候。以上

文政十二年九月

三隅丈八<sup>㊦</sup>

新居市左衛門殿

覚

宇土郡住居宮社司 近藤大和弟

近藤衛守

右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候處、衛守儀正直成性質<sup>ニ</sup>而、此節住吉燈籠堂御番人被仰付候ハ、無怠相勤可申人物<sup>ニ</sup>相聞、且住吉之儀<sup>者</sup>、人家相隔居候所柄<sup>ニ</sup>而、近村等より懸勤被仰付候而茂、燈方等無懈怠相勤可申丈夫之見込無之由之趣共、委細本紙三隅丈八書面之通相聞申候。以上

丑

十二月

岡田権兵衛<sup>㊦</sup>

中西弥三次<sup>㊦</sup>

一一六 孫七

(九一二一九)

御内意之覚

一寸志錢三百目 傘御免 郡浦手永里浦村 孫七

一同 三百目 右同 同村 常右衛門

一同 五百目 同村 利七

右<sup>者</sup>小脇差御免被仰付被下候様。

右<sup>者</sup>今度関東筋川々御普請御手伝御用<sup>ニ</sup>付、寸志錢被召上、右錢

高御勘定所上納相濟申候間、乍恐小右書之通、御賞美被仰付被下候様、於私奉願候。此段御内意仕候條、宜被成御參談可被下候。以上

文政十二年十二月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

孫七・常右衛門・利七儀、達之通<sup>ニ</sup>而、寸志高究之規矩<sup>ニ</sup>相当申候間、孫七・常右衛門儀、小脇差被成御免、利七儀傘・小脇差可被成御免哉。右付札之通、十二月廿九日達。

一一七 濱田三弥、木下喜兵衛 他

(九一二一〇)

御内意之覚

組附御中小姓列、濱田喜三兵衛弟

濱田三弥

右<sup>者</sup>、三郡御新地御築立御用懸被仰付、文政四巳三月より十一月迄之間、南北塘手<sup>江</sup>出勤出精仕候<sup>ニ</sup>付被賞、銀子三両被為拜領度奉存候。

宇土郡御郡代表衆手附横目、諸役人段

木下喜兵衛

右同断御用懸被仰付、郡浦海辺より石取出し、積送受込<sup>ニ</sup>而、必多度海辺<sup>ニ</sup>罷出、御普請之弁利<sup>ニ</sup>相成候様心配仕、且潮留<sup>并</sup>蘆川堀方等之節、手永出夫毎<sup>ニ</sup>罷出、出精仕候<sup>ニ</sup>付、右同断銀三両被為拜領度奉存候。

宇土郡一領一疋

右山貞助

右同断御用懸被仰付、文政四巳三月より南塘方江相詰、土手・石手和合水門等受込、且宇土山より茨取出し等<sup>二</sup>付<sup>一</sup>而<sup>茂</sup>厚心配仕、潮留之節<sup>者</sup>、松山受丁場築立之宰判等出精仕候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>被賞、銀五兩被為拜領度奉存候。

宇土郡御代衆直触、戸馳村庄屋

松浦圓助

右同断御用懸被仰付、戸馳村海辺一円余計之石工入込、刻石・栗石取出し、数百艘自他之船々、日夜押懸、積方仕候うち<sup>二</sup>者<sup>一</sup>、内輪種々混雜之筋<sup>茂</sup>差発、村方より<sup>茂</sup>故障等申出候得共、圓助儀、村方小前々々能申論、必多度海辺<sup>江</sup>罷出居、混雜不仕様取計、石取出運送等速<sup>二</sup>出来仕候様<sup>一</sup>、厚心配仕、潮留之節<sup>者</sup>、余計之繩・明儀等差出、夫方召連罷出、請丁場速<sup>二</sup>築立<sup>一</sup>、格別出精仕候。  
一 太牟田御開・御築立之節<sup>茂</sup>、右同様戸馳より余計之石取出し方<sup>二</sup>付<sup>一</sup>而<sup>者</sup>、村方を<sup>茂</sup>能相論、石取出シ之弁利<sup>二</sup>相成候様<sup>一</sup>、厚取計申候。

右之通而御新地御築立之節、不一方心配仕、且数年之間石場見分、諸役人宿等<sup>二</sup>至迄<sup>一</sup>、少シ<sup>茂</sup>無支様取計、格別出精仕候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>被賞、作御紋麻上下一具被為拜領度奉存候。

宇土郡地士河野寿助俣、郡浦会所詰

河野栄次

右同断御用懸被仰付、文政四巳二月より申十二月迄、元御小屋御銀請払局<sup>江</sup>相詰、格別出精仕候次第、左<sup>二</sup>申上候<sup>一</sup>。

一 栄次儀、手全成者<sup>二</sup>而<sup>一</sup>、御銀受払一卷始末貫通仕候人無之候得

者、大金之受払連郡不仕候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、郡浦新五左衛門<sup>江</sup>申談、彼方会所向之儀<sup>者</sup>、繰合を以、栄次御銀方附必多詰無支様申談候処、新五左衛門同意有之候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、其趣を以、栄次<sup>江</sup>申談候処、始末相詰可申段、請合申候。依之巳年以來四ヶ年之間無懈怠相勤、莫太之御錢受払、連郡仕、少<sup>茂</sup>相違無御座、明細しらへ相整申候。尤巳年御築立御普請中<sup>者</sup>、莫太之受払<sup>二</sup>而<sup>一</sup>、御銀方附屬之局を被立置、石手方・土手方・諸品方・米方と別局にて、其品々於御普請向出役<sup>者</sup>、面々より現受取之手形通等<sup>二</sup>付<sup>一</sup>記、印形を用払主<sup>江</sup>相渡候を以、錢受取<sup>二</sup>罷出候得<sup>者</sup>、其品之局々<sup>二</sup>而<sup>一</sup>相糺、御銀方<sup>江</sup>差廻候上、緒方吉次・伊藤多加右衛門立合<sup>二</sup>而<sup>一</sup>、引合無相違所にて錢渡<sup>二</sup>相成申候。然処右諸局御用懸之面々、都<sup>而</sup>会所々々之役人<sup>并</sup>庄屋役之者相加、詰代り之御手当を<sup>茂</sup>被仰付置候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、本役受持御用<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、引取不申<sup>而</sup>難叶儀有之節<sup>者</sup>、詰代之人相見候得<sup>者</sup>、間拔不仕候得共、二ヶ年之間会所役繁務之中より罷出候面々、夫々詰代出来兼候事多、右様之時<sup>者</sup>、栄次儀別局之しらへを兼出精仕候所より無間抜相濟申候、就中石手之儀、始末莫太<sup>二</sup>積入<sup>一</sup>、日々数百艘之代錢取<sup>二</sup>罷出<sup>一</sup>、御銀方<sup>江</sup>相詰居候うち、土手石手築前之者より錢受取<sup>二</sup>罷出候処<sup>一</sup>、此手之者共<sup>者</sup>、中途仮渡し仕置、築立坪改之上現差引仕候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、渡過<sup>二</sup>不相成様之しらへ方見通之処肝要<sup>二</sup>而<sup>一</sup>、栄次始末貫通仕居候処より見通之趣、緒方吉次<sup>江</sup>申達候得<sup>者</sup>、見通しらべ<sup>二</sup>相成<sup>一</sup>、立会錢渡<sup>二</sup>相成申候<sup>一</sup>、右之手数<sup>二</sup>而<sup>一</sup>隙取候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、石船之者共、朝より夕方迄相詰居申候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、膳<sup>二</sup>居飯を給候<sup>一</sup>。間合を得不申、每晚九ツ比迄相糺可成丈、翌日<sup>二</sup>不持越様相働申

候、左無御座候得者、石船・石手・土手共進、方ニ相成不申候、

此儀御銀局之專務にて、榮次能吞込候而、相詰之面々申統、何れも出精相勤申候。畢竟榮次必多詰<sup>二</sup>而、御銀渡之遲速より事業之進退<sup>二</sup>係り候迄之情態を能會得仕、厚心懸精勤仕候。

一右心懸<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、御銀方之透を考、沖手御普請所<sup>江</sup>罷出受負之者、仕事之出来足等致見分、其外御普請方<sup>二</sup>も心を用、助成之心厚有之候。

一孫鞆御築立之儀、石代等之差引返納錢引立之積<sup>二</sup>而、榮次<sup>二</sup>而取計申候、右<sup>者</sup>宇土・八代海辺・天草へ懸打散居候を右之所々打廻、石積出し築方等之内より前錢引立、心配不一通候。併程々応し、埒明候様厚心配仕候<sup>二</sup>付、貳拾七貫目余<sup>者</sup>返納<sup>二</sup>相成申候。

一潮留之節<sup>者</sup>罷出程々心懸仕候。

一天草表石船料拝借殘為取立、彼地<sup>江</sup>罷越心配仕申候。

一地割之節、數日罷出、未明より及暮候迄出精仕候。

一明細しらべ<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、主<sup>二</sup>成始未出精相勤申候。

右之通數年之間、無怠慢拔群出精仕候<sup>二</sup>付、相当之御賞美被仰付被下度奉存候。

(文政十三年)

一一八 武平、万吉

(九一一一〇)

御内意之覺

松山手永宇土御知行所松原村庄屋

武平

五十二歳

一寸志錢五百目

右之錢辻上納相濟申候間被賞、地土<sup>二</sup>被仰付被下候様。

同手永松山村新平悴

万吉

十六歳

一同 壹貫五百目

右之錢辻上納相濟申候間、被賞無苗

御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付被下候様。

右<sup>者</sup>今度関東筋川々御普請御用御手伝<sup>二</sup>付、寸志差上申度奉願候処、願之通被仰付、夫々上納相濟申候間、乍恐小右書之通被仰付被下候様、於私奉願候。此段御内意仕候条、宜被成御參談可被下候。以上

文政十三年

三月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

武平儀、達之通<sup>二</sup>而、寸志高宛之規矩<sup>二</sup>相当申候間、地

土可被召出哉。

万吉儀、右同断<sup>二</sup>付、無苗御惣庄屋直触可被仰付哉。

右付札之通、閏三月二日達

一一九 沢田忠右衛門

(九一二一一〇)

御内意之覚

宇土町人数<sup>三</sup>而、苗字御免被仰付置候沢田  
太平次悻、同町新三丁目町頭

忠右衛門

式拾壹歳

右忠右衛門親太平次儀、文化五年八月龍口御屋舖御類焼之節、寸  
志錢五百目差上、且先年御才覚錢御返濟錢壹貫七百貳拾貳匁、都  
合貳貫貳百貳拾貳匁差上、町人数之俣<sup>二</sup>而、苗字御免被仰付置候  
処、去年病死仕候。

一寸志錢壹貫目

右之錢辻、今度 御手伝御用<sup>二</sup>付、寸志差上被召上、御勘定所上  
納相濟申候。前条御才覚寸志錢之儀<sup>者</sup>、二代相統之舍を以倡置申  
候間、乍恐忠右衛門儀、此節被賞、親同然苗字御免被仰付被下候  
様。猶今度壹貫目之寸志差上候儀<sup>者</sup>被賞、作紋御上下壹具被為拜  
領被下候様、於私奉願候。此段御内意仕候条、宜被成御參談可被  
下候。以上

文政十三年閏三月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

忠右衛門儀、達之通<sup>二</sup>而、父沢田太平次、苗字被成御  
免候節、寸志之内御才覚錢寸志之儀<sup>者</sup>、二代相統之舍を  
以、御郡代より被相倡置候由。右寸志<sup>二</sup>限り申立之趣<sup>二</sup>

よつてハ、父同様相統被仰付見合<sup>二</sup>付、忠右衛門儀、父  
同様苗字可成御免哉。

一去年 御手伝御用<sup>二</sup>付而、差上候寸志錢壹貫目之儀ハ、御  
賞賜宛之規矩<sup>二</sup>相当申候間、作紋麻上下一具可被下置  
哉。

右付札之通四月七日達

一二〇 鎌賀儀兵衛、鎌賀尉七

(九一二一一二)

御内意之覚

苗字御免御惣庄屋直触<sup>二</sup>而、病死仕候郡浦手  
永網引村庄屋鎌賀儀兵衛悻

尉七

当寅四十四歳

右尉七父鎌賀儀兵衛儀、去丑年迄庄屋代役以来、六拾壹ヶ年精勤  
仕、在勤中屹度功績<sup>茂</sup>有之候<sup>二</sup>付而者、既<sup>二</sup>一昨年御内意仕置候  
処、去十二月病死仕候。右<sup>者</sup>御山方<sup>二</sup>付而者、一稜之功績・年功<sup>茂</sup>  
有之もの<sup>二</sup>御座候間、悻尉七儀、親之功績・年功<sup>茂</sup>被对、乍恐無  
苗御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付被下候様、於私奉願候。則一昨年御内達  
仕候写相添、御内意仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

文政十三年

四月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

尉七儀、達之通<sup>二</sup>而、父鎌賀儀兵衛、庄屋代役已来、惣

年数八六十一年之勤<sup>ニ</sup>御座候得とも、右代役之年数<sup>者</sup>、相立居不申、文政三年全勤三十二年<sup>ニ</sup>而、無苗御惣庄屋直触被仰付、同十年四十年<sup>ニ</sup>而、苗字被成御免候。亥年迄<sup>ニ</sup>庄屋本役已来全四十二年相勤、病死いたし候。苗字御免御惣庄屋直触五十年已下之年数<sup>ニ</sup>而ハ、跡目難被仰付御座候処、父儀兵衛庄屋役勤中、御山仕立方数十年之間差はまり出精いたし、近年<sup>ニ</sup>なり候<sup>而</sup>ハ、一際御山繁茂いたし、近々御用財木等御取出<sup>ニ</sup>相成、一稜之御用相立、格別之功業<sup>ニ</sup>有之、庄屋代役已来六十年余<sup>ニ</sup>相成、年旁被賞、御郡代直触進席被仰付候様との儀ハ、一昨年来申立<sup>ニ</sup>相成居候。写別冊相添、達之通<sup>ニ</sup>御座候<sup>而</sup>、別段を以、尉七儀、無苗御惣庄屋直触可被仰付哉。

右付札之通、六月朔日達。

御内意之覚  
郡浦手永綱引村庄屋

鎌賀儀兵衛

当子八十一歳

右儀兵衛儀、明和五年綱引村庄屋代役申付、天明六年本役申付、寛政十年依願庄屋役差免、同十二年再勤申付候。当子年迄都合六十年出精相勤申候。惣躰手全成者<sup>ニ</sup>而、精勤仕候間。文政三年五十年之勤功被賞、無苗御惣庄屋直触<sup>ニ</sup>被仰付、同十年五十八年<sup>ニ</sup>而苗字御免被仰付候。追々被賞候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、弥以精勤仕、今年迄六十年<sup>ニ</sup>相成申候。綱引村之儀、御山々手広所柄<sup>ニ</sup>御座候処、右儀兵衛庄屋役申付候以来、先御山支配役野田嶋右衛門申談、連年余

計之杉・檜植付數十ヶ所之御山を仕立、近年<sup>ニ</sup>至候<sup>而</sup>者いつれ之ヶ所<sup>茂</sup>盛長仕、御城内御用且<sup>ニ</sup>ノ丸御殿御用材木等、莫太之御差出被仰付、一稜御用<sup>ニ</sup>相立、先<sup>者</sup>拔群之功績<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、既<sup>ニ</sup>嶋右衛門儀<sup>茂</sup>結構<sup>ニ</sup>被仰付たる儀<sup>ニ</sup>御座候。御山仕立方之儀<sup>ニ</sup>、村々小前々々一和不仕候<sup>而</sup>者、被行可申様<sup>茂</sup>無御座候処、儀兵衛儀数十年之間、各別差はまり出精相勤候<sup>ニ</sup>付、近年<sup>ニ</sup>至候<sup>而</sup>者、一際御山繁茂仕候儀<sup>ニ</sup>御座候。右之通数十ヶ所御山盛長仕、御用<sup>ニ</sup>相立候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、袖方御役人<sup>者</sup>不及申、諸御役方<sup>茂</sup>必多度出仕<sup>ニ</sup>相成、何角冤繁多<sup>ニ</sup>有之候得共、乍老年諸御用差支<sup>ニ</sup>不相成様、相勤申儀<sup>ニ</sup>御座候。至<sup>而</sup>壯健成ル者<sup>ニ</sup>御座候得共、極老<sup>ニ</sup>罷成<sup>而</sup>者、近年<sup>者</sup>御役御断之心組<sup>茂</sup>仕居候由<sup>ニ</sup>候得共、村中何れ<sup>茂</sup>帰服仕居、惜候<sup>而</sup>相歎候<sup>ニ</sup>付、不相替精勤仕候由<sup>ニ</sup>御座候。御山々之儀、綱引村懸、一際目立候<sup>而</sup>相見候程<sup>ニ</sup>繁茂仕居申儀<sup>ニ</sup>御座候。追々御賞美<sup>茂</sup>被仰付、殊<sup>ニ</sup>前賞より<sup>者</sup>、至<sup>而</sup>年浅之儀<sup>ニ</sup>御座候得共、最早年明候得ハ、六十一年勤功績<sup>者</sup>、前文之通之儀<sup>ニ</sup>御座候間、乍恐猶来春六十年之年旁各別功績被取束、御別段を以被賞、御郡代直触<sup>ニ</sup>進席被仰付被下候様有御座度、於私奉願候。此段不闕御内意仕候条、宜敷被成御参談可被下候。以上

文政十一年

十一月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

覚

苗字御免・御惣庄屋直触<sup>ニ</sup>而病死仕候郡浦手永

網引村庄屋 鎌賀儀兵衛倅

尉七

右者 親跡相統別紙申立之趣ニ付、見聞仕候処、父儀兵衛儀、数十年役方心懸能精勤いたし、別而御山方ニ付而者、御山支配役申談、数十年之間、莫太之杉・檜仕立方、格別出精いたし候由、委細本紙書面之通相聞、倅尉七儀、手全成人物之由、行状相替候唱承不申、右見聞仕候趣、御達申上候。以上

寅

五月

村田市郎助<sup>㊦</sup>

(天保元年)

一一一 武七

(九一二一一二)

御内意之覚

抱高巻石六升余

松山手永宇土御知行所

牛巻疋

下網津村

一家内三人

武七

内

六十歳

壹人

女房

五十三歳

壹人

娘

さと

十九歳

右武七儀、小高<sup>ニ而</sup>御座候得<sup>者</sup>、兼<sup>而</sup>苦を編、又<sup>者</sup>柴・薪を取、宇土町辺<sup>ニ</sup>持出、渡世取統、生得正直・律儀成者<sup>ニ而</sup>、十七・八ヶ年以前より右村より宇土町迄二里程之道路之内、網津・笹原・新開・恵里辺前通之道路相痛、通路難渋之所々有之候得<sup>者</sup>、早速自身鍛・鶴背<sup>并</sup>茨杯を持越シ取纏、諸人之難渋を助ケ申候儀、太躰月々程之事<sup>ニ而</sup>、近村何れも見聞仕居、就中笹原村懸首入坂道之儀<sup>者</sup>、雨天<sup>者</sup>勿論冬向霜解強通路、甚難渋之所柄<sup>ニ</sup>御座候処、右之場所<sup>者</sup>、必多度手入仕候間、自然届兼候節<sup>茂</sup>有之候得<sup>者</sup>、武七<sup>者</sup>何を油断いたし居候哉杯と、諸人噂仕候程之儀<sup>ニ而</sup>、誠<sup>ニ</sup>数年来奇特之者<sup>ニ</sup>付、近村庄屋共より御賞美之儀、内密願出候様子<sup>ニ</sup>相聞候間、内輪之様子、精々承糺申候処、相違無御座、右道造り心懸申候根元<sup>者</sup>、網津村之儀多人数<sup>ニ而</sup>、田畑作廻不足有之候<sup>ニ</sup>付、武七儀十七・八ヶ年以前、郡浦手永新開村之内、田畑四・五反出作仕居候処、笹原・新開之道路筋<sup>者</sup>瀉地<sup>ニ而</sup>、少々降候<sup>而</sup>も、悪路<sup>ニ</sup>相成り、夫々応土橋等<sup>茂</sup>損し強久、出作往来甚難渋仕候<sup>ニ</sup>付、追々手入仕候由。然処右出作<sup>茂</sup>一兩年<sup>ニ而</sup>相止メ申候得共、自身往来難渋仕候儀を染ミ々々存込、其後も弥以手入仕候由。年分手入仕候度数等、其身<sup>ニ</sup>承合申候<sup>而</sup>、少<sup>茂</sup>名<sup>ニ</sup>懸不申模様<sup>ニ而</sup>、睨卜断合もいたし不申由。因<sup>而</sup>庄屋共見聞之趣承糺せ申候処、太躰年分二十度程<sup>茂</sup>手入可仕、左候得<sup>者</sup>、十八ヶ年<sup>ニ而</sup>者、三百六十日程之働<sup>ニ</sup>相当可申、右之通<sup>ニ而</sup>、遠近人馬之通路難渋を免レ、別<sup>而</sup>昼夜通申候近村之為合無申計、小前之者共<sup>ニ</sup>者、比類稀成ル奇特之者<sup>ニ</sup>御座候間、乍恐御別段を以、相応<sup>ニ</sup>被賞被下候様、於私奉願候。左候ハ、手永中ハ勿論近郷之者風俗倡方<sup>ニ</sup>茂、屹度可相

成と奉存候間、不關此段御内意仕候条、宜被成御參談可能被下候。以上

文政十三年七月

新居市左衛門

御郡方

御奉行衆中

武七儀、道橋相損通路難波之所々、遠方之所迄、數年來取繕人馬之難渋を助け、奇特之者<sup>ニ</sup>付、被賞被下候様、委細書面之通<sup>ニ</sup>有之、御郡御目附御横目より<sup>茂</sup>、外<sup>ニ</sup>各別奇特之儀<sup>茂</sup>相聞不申候へ共、道造之儀ハ、兼々心を付、無油断取繕候由。達之通御座候間、鳥目七百文程<sup>茂</sup>可被下置哉。

右付札之通り、十一月六日達

覚

松山手永宇土御知行所、下網津村

武七

右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候処、生得正直成者<sup>ニ</sup>而、兼々難渋<sup>ニ</sup>相暮候内、遠方迄之処、頻々道橋之取繕等いたし、所柄為合<sup>ニ</sup>相成候趣、委細書面之通<sup>ニ</sup>而、奇特成事共<sup>ニ</sup>相聞申候。尤聞<sup>ニ</sup>者娘を連<sup>レ</sup>押立罷出、道橋等取繕候儀<sup>茂</sup>有之候由<sup>ニ</sup>候得共、多ク<sup>者</sup>、宇土町<sup>江</sup>柴・薪等付越候欵、又<sup>者</sup>何そ之序<sup>ニ</sup>手入いたし候由<sup>ニ</sup>相聞、惣鉢武七儀外<sup>ニ</sup>各別奇特成儀<sup>茂</sup>相聞不申候得共、前条道造<sup>者</sup>、兼々心を付、無油断取繕候由<sup>ニ</sup>承申候。右見聞仕候趣、御達申上候。以上

寅

十月

山口三五左衛門<sup>印</sup>

(天保二年)

一三三 藤平

(九一二一三)

御内意之覚

松山手永伊無田村庄屋

一錢三百目

藤平

右藤平儀、功績<sup>ニ</sup>よつて合羽傘・菅笠御免被成置、庄屋役相勤居申候もの<sup>ニ</sup>而、御座候処、此節窮民取救寸志錢右之通差出、奇特之もの<sup>ニ</sup>付被賞、礼服・小脇差等被成御免被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被成御參談可被下候。以上

四月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

藤平儀ハ、庄屋役<sup>ニ</sup>而奉行寸志<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>見合之規矩相<sup>ニ</sup>当申候間、礼服・小脇差等可被成御免哉

右付札之通五月十日達

一三三 彦太

(九一二一三)

御内意之覚

松山手永御惣庄屋直触

彦太

右<sup>者</sup>在役申付置候処、依勤功無苗御惣庄屋直触<sup>ニ</sup>被仰付置候処、此節養子小郷覚兵衛儀、依寸志御郡代直触<sup>ニ</sup>被仰付候<sup>ニ</sup>付、右彦

太儀、御窓庄屋直触之儀者、乍恐御断申上、父母并自身共ニ覚兵衛家族ニ被差加被下候様、願出申候ニ付、承糺候処、内輪無余儀筋ニ而、何ぞ煩敷儀、無御座候間、願出之通御窓庄屋直触者被成御免、彦太并同人父母共ニ覚兵衛家族ニ被差加被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被成御參談可被下候。已上。

四月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

彦太儀、達之通ニ付願之通御窓庄屋直触可被成御免哉。

但彦太儀、父母共悴小郷覚兵衛家族ニ被差加被下候様との願者、御郡方しらへニ付、別紙を以、達有之候様及内意置申候。

一二四 井上甚之助 他

(九一一一三)

御内意之覚

諸役人段本席ニ而、唐物拔荷改方御横目且御

郡代手附横目并松山手永井樋方助役、津口・

陸口見拟役兼帶相勤居、当正月病死仕候井上

甚次養子

井上甚之助

当卯廿四歳

右甚之助養父甚次儀、寛政九年井樋方助役代勤申付、享和三年在勤中一領一疋ニ被召出、井樋方助役申付、文化十一年塘方助役兼

勤申付、文政四年御郡代手附横目当分申付、相勤居候処、同五年

親井上甚平御役御断願出、願之通被差免、甚平五十年余之勤勞旁

ニ被對、甚次儀、諸役人段本席ニ被召置、唐物拔荷改方御横目被

仰付、且御郡代手附横目本役并井樋方助役塘方助役・宇土所横

目、津口・陸口見拟役共ニ兼帶申付候処、数役自然届兼候儀有之

候而者、奉恐入候との儀を以、内意申出候ニ付、塘方助役・宇土

所横目之儀者、差免申候。甚次儀并井樋方助役代勤六ヶ年、同助役

より二十九年、手附横目当分役より十一ヶ年、唐物拔荷改方御横

目并手附横目本役より十ヶ年ニ而、寛政九年より当年迄御奉公惣

年数三十五年役向太切ニ相心得、多役数十年昼夜心懸、格別出精

相勤居申候処、当正月病死仕申候。甚次追々被賞候稜々、且是迄

稜立候勤向、居村取救之稜等者、委細別紙之通ニ御座候。甚之助

儀、手全成ものニ而、兼々慎方茂宜、第一養父母江茂事へ方宜、諸

稽古・家業共ニ心懸出精仕、近年藁麦根付セリ立方、又者村養水

せり立方等之儀、在御家人之内村分ケ受持申付来候ニ付、甚之助

儀も年々申付候処、年々右成ものニ者、心懸能相勤申候。武芸等稽

古之儀ハ、左之通。

一 劍術、和田傳兵衛門弟ニ而、文政十三年段詰相伝仕候。

一 炮術、中村三左衛門門弟ニ而、稽古仕候。

一 棒捕手、庄林弁助門弟ニ而、右同敷。

一 算術、甲斐優門弟ニ而、開平方術相伝仕候。

右之通心懸出精仕候委細者、右師範中より之別紙之通ニ御座候。

御免方之儀、為習熟、村帳書ニ組合、諸帳面しらへ等、専ら心懸、往々御用ニ相立可申ものと見およひ申候間、養父甚次儀



者、諸役人段本席<sup>二</sup>茂被仰付置、多役数十年來格別出精仕、最早御賞美を<sup>茂</sup>奉願度、見込居申候勤稜<sup>茂</sup>有之、且乍聊居村至貧之者<sup>江</sup>年々取救候儀<sup>茂</sup>有之、養祖父甚平以來二代之訳筋旁<sup>二</sup>被對、甚之助儀相應<sup>二</sup>被召出被下候様有御座度、於私奉願候。則別紙一括相添御達仕候条、宜被成御參談可被<sup>下</sup>候。以上

三月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

甚之助儀、達之通<sup>二</sup>而、祖父井上甚平儀、根元無苗之村庄屋<sup>二</sup>而、追々役方精勤いたし候付、步御小姓列迄進席被仰付置、五十年余之勤<sup>二</sup>而相果候付、右之年勞<sup>二</sup>被對、父井上甚次儀、諸役人段被召出、三十五年之勤<sup>二</sup>而相果、年功<sup>茂</sup>淺且家筋之訳<sup>茂</sup>無之候間、甚之助儀、諸役人段跡目相当之見合を以、御郡代直触上座可被仰付哉。

但甚次儀、居村至貧之者<sup>江</sup>年々取救を<sup>茂</sup>いたし候由、右之錢高尨實四百目余<sup>二</sup>而作紋之品被下置候規矩<sup>二</sup>合不申、纔之高<sup>二</sup>付、此儀ハ御間承届之及達可申哉。

右付札之通、八月三日達。

覚

諸役人段本席<sup>二</sup>而唐物拔荷改方御横目且御郡代手附横目<sup>并</sup>松山手永井樋方助役、津口・陸口見拟役兼帶相勤居、当正月病死いたし候

井上甚次養子

井上甚之助

右<sup>者</sup>親跡相統別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候處、養父甚次數々之役儀、數年出精相勤、且所柄難淡之者共、數年之間毎歲取救候儀、別紙小前帳之通相違無御座、奇特之行跡<sup>二</sup>而、右甚之助儀、諸芸心懸候儀共、委細本紙書面之通相聞、行狀異候儀、承不申候。以上

卯七月

井上勝藏<sup>㊦</sup>

中西弥三次<sup>㊦</sup>

覚

唐者拔荷改方御横目・御郡代衆御附横目役<sup>并</sup>松山手永井樋方助役、津口・陸口見拟役兼帶被仰付置、当正月病死仕候

井上甚次

右甚次儀 肩書之通多役数十年拔群出精相勤申候。追々被賞候稜々、左之通

一文化九年八月炮術格別出精仕、且劍術・馬術心懸能、出精仕候旨<sup>二</sup>而、御銀貳両被為拜領候。

一同十二年四月親甚平病中<sup>二</sup>付、快氣違之間、御手付横目役当分助勤被仰付、同年四月より十月迄<sup>者</sup>相勤居申候處、同十一月為御心付鳥目三貫文被為拜領候。

一同十三年三月大口村新地御築立之節、昼夜格別心配仕候旨<sup>二</sup>而、金子貳百足被為拜領候。

一文政四年十二月笠岩村御開所・井樋破損所御普請之節申談能、御

入目錢<sup>茂</sup>相減厚ク心を用、出精仕候旨<sup>二</sup>而、金子百足被為拜領候。

一文政八年八月八代七百町御新地御築立・潮留之節、出精仕候旨<sup>二</sup>而、金子百足被為拜領候。

一同十二年十二月立岡堤御堀添之節、代地しらへ諸御用立会、御普請筋厚ク心を用、万端精密<sup>二</sup>取計、始末詰切格別出精仕、且杉嶋新川掘替之節<sup>茂</sup>、數日相詰出精仕候旨<sup>二</sup>而、羽<sup>二</sup>重裕・御羽織一ツ被為拜領候。

右之通甚次追々被賞、且又稜立候勤所相糺申候處、左之通<sup>二</sup>御座候。

一文政八年より詫麻・上益城水害除御普請御取発シ、同九年七月右御用懸被仰付、去年迄五ヶ年之間、出夫度毎<sup>二</sup>無怠出勤仕、且宇土郡御山又<sup>者</sup>海辺より右御用之石類御差出<sup>二</sup>付<sup>而</sup>茂、追々出勤仕候。

一文政十年宇土町出火之砌、跡家建方<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、始末立会出精相勤申候。

一同年松合村救浦新地御築立之節、數度之出夫度毎<sup>二</sup>小屋詰仕石井樋一卷<sup>者</sup>勿論主<sup>二</sup>成取計申候。

一同十一年宇土両手永杉嶋・廻江水寄所為水引、馬瀬村樋発塘大石井樋御普請之節、始末主<sup>二</sup>成候程<sup>二</sup>、詰切相勤申候。

一同年非常之大風・高潮<sup>二</sup>而、潮塘數ヶ所破損仕候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、數十日所々<sup>二</sup>懸ケ出精仕、第一大口村新地・井樋新規仕置<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、始末主<sup>二</sup>成相勤申候。

一松合村文化九年より去年迄三度之大火八百軒程<sup>二</sup>而、跡家建方之

心配又<sup>者</sup>取統方等之儀<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、始末出精仕相勤申候。

一去年高良村内下り松新地御築立被仰付、最早過半相調申候。右<sup>二</sup>付<sup>而</sup>茂、始末格別出精相勤申候。

右之稜々<sup>者</sup>、去ル酉ノ年立岡堤御堀添以來、地場之御用筋込達候上、打重ね々々候<sup>而</sup>之勤稜、昼夜之心配出精有之候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、御別段御賞美を奉願候善之處、其儀<sup>二</sup>至不申候内、病死<sup>二</sup>相成、残念之儀<sup>二</sup>奉存候。

一米六石式斗四升

代錢六百式拾四匁

但年々之双場高下御座候得共、近年之直段を以、代錢差出申候處、本行之通米壹升<sup>二</sup>付壹匁完

一粟四石三升五合

代錢貳百壹匁七分五厘

但右同断、粟壹升<sup>二</sup>付五分完

一粳貳石壹斗八升五合

代錢百九匁六分五厘

但右同断、粳壹升<sup>二</sup>付五分宛

一藁壹斗

代錢五匁

但右同断、藁壹斗<sup>二</sup>付五分宛

一古布子式十四

代錢四百八拾目

但右同断、布<sup>二</sup>付式拾目宛

一錢三拾五匁

五稜

錢合考實四百五拾五匁四分

但文化十三年十二月より文政十三年十二月迄居住所三日村

至貧<sup>二</sup>而、年越難取統者共<sup>江</sup>配当仕候分、別紙小前帳前

右之通<sup>二</sup>而、甚次親井上甚平儀、歩御小姓列に<sup>茂</sup>被仰付置、二代之

訊筋<sup>茂</sup>有之、家柄に<sup>而</sup>御座候間、甚之助儀、御別段を以、親同様

諸役人段相統被仰付被下候様奉願候。井上甚平勤稜を<sup>茂</sup>吟味仕候

処、文政四年相達候書付控有之候<sup>二</sup>付、写申候<sup>而</sup>、則相添申候間

宜被仰付可被下候。此段乍恐御内意覚書を以申上候。以上

天保二年二月

松山権兵衛

清成八十郎殿

覚

私儀、明和七年三月松山会所小頭<sup>二</sup>出、根抄会所詰相勤居候処、

安永七年四月親庄右衛門、庄屋役勤懸<sup>二</sup>而、病死仕候<sup>二</sup>付、親跡三

日村庄屋役相統被仰付、天明元年五月井樋方助役<sup>二</sup>被召出、在勤

中一領老足格<sup>二</sup>被仰付、同年十一月飽田・詫麻・上下益城・宇土

灰石井樋御用・宇土郡網津村石場見<sup>二</sup>被仰付、寛政七年十

月井樋方助役持懸<sup>二</sup>而、御郡代衆御手付横目役当分被仰付、同八

年二月数役相勤候<sup>二</sup>付、石場見<sup>二</sup>被仰付、且又享和四年八

月請御免<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、見聞方繁多<sup>二</sup>有之、一役<sup>者</sup>御免被仰付被下候

様、御断申上候処、井樋方助役御免被成、右跡助役之儀ハ、悴甚

次<sup>二</sup>被仰付、在勤中一領老足格<sup>二</sup>被召出候。同年御手附横目定

役<sup>二</sup>被仰付候。文化二年七月唐者抜荷改方御横目被仰付、御手附

横目役<sup>茂</sup>直<sup>二</sup>兼帯被仰付置、尤同年閏八月宇土人馬所横目兼勤被

仰付、同十年四月津口・陸口見<sup>二</sup>被仰付、当年迄役儀都合

五拾五年相勤申候。下<sup>二</sup>付紙、明和四年より頭百姓役相勤、同五

年・六年兩年<sup>者</sup>、帳書兼帯仕、三年村役相勤申候。

一安永九年十二月、三日村庄屋役出精相勤候旨<sup>二</sup>而、御支配銀之内

を以、鳥目老實文被為拜領候。

一寛政五年三月、前年津波一件<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、井樋御普請昼夜出精仕候旨<sup>二</sup>

而、作御紋御上下一具・金子貳百足被為拜領候。

一同八年二月石場見<sup>二</sup>被仰付、数年出精仕候旨<sup>二</sup>而、御支配銀

之内を以、金子貳百足被為拜領候。

一同九年前夏洪水後、所々御普請所<sup>江</sup>罷出、諸事申談等、出精仕候

旨<sup>二</sup>而、金子貳百足被為拜領候。

一同年五月、御才覚銀一件<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、心遣仕候旨<sup>二</sup>而、金子貳百足被

為拜領候。

一享和二年四月、役方多年出精仕候旨<sup>二</sup>而、一領老足本席被仰付

候。

一文化元年八月、御才覚銀被返下候残分、寸志差上、且役方心懸

能、出精相勤、旁被賞候旨<sup>二</sup>而、作御紋御小袖一被為拜領候。

一同年十二月、在中請御免<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、出精相勤候旨<sup>二</sup>而、作御紋御上

下一具被為拜領候。

一同八年五月、多年出精相勤役前厚心を用、各別御用<sup>二</sup>相立候旨<sup>二</sup>

而、諸役人段本席被仰付候。

一同九年宇土人馬所建替<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、昼夜相詰、諸事致世話候旨<sup>二</sup>而、

同所集錢之内を以、金子百足被為拜領候。

一同年十一月、西本願寺宗意しらべ方<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、御使僧罷下り候一件

之御用、各別出精仕候旨<sup>二</sup>而、金子百足被為拜領候。

一同十二年六月、公義御困艱一件<sup>ニ</sup>付<sup>テ</sup>、出精仕候旨<sup>ニ</sup>而、金子百疋被為拜領候。

一同十三年七月、御奉公五十年各別出精相勤候旨<sup>ニ</sup>而、步御小姓列<sup>ニ</sup>被仰付候。

一米貳拾石程、天明元年より文化十二年迄、居住所三日村難波之御百姓共艱難之暮之取救申候儀、御間<sup>ニ</sup>被為聞召届候段、同年同月御書付を以被仰渡候。

一同十四年七月、濱町様御出御用出精仕候旨<sup>ニ</sup>而、御内々より御銀壹兩被為拜領候。

一文政四年七月、御奉公五十年余、数々之役前各別心懸能、手全<sup>ニ</sup>出精相勤候旨<sup>ニ</sup>而、作御紋単御羽織<sup>一</sup>被為拜領候。

右之通<sup>ニ</sup>御座候。以上

文政四年十一月

井上甚平

宇野騏八郎殿

奥村仙蔵殿

一二五 井上育太郎

(九一二一一三)

御内意之覚

松山手永塘方助役<sup>ニ</sup>而、宇土駅所横目兼帯、

在勤中一領一疋

井上育太郎

当卯三十六歳

右<sup>者</sup>精密なるもの<sup>ニ</sup>而、氣働<sup>茂</sup>相応<sup>ニ</sup>有之、筆算達者<sup>ニ</sup>仕、当時之役前<sup>ニ</sup>而ハ、一稜御用<sup>ニ</sup>相立居申候もの<sup>ニ</sup>御座候間、井上甚次病

死跡、在勤中諸役人段<sup>ニ</sup>被召直、唐者拔荷改方御横目被仰付被下候様有御座度奉願候。左候ハ、御郡代手附横目・井樋方助役、津口・陸口見扨兼帯申付度奉存候間、宜被成御參談可被下候。已上

三月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

育太郎儀、達之通<sup>ニ</sup>付、唐者拔荷改方御横目被仰付、在勤中諸役人段可被仰付哉。

右付札之通、八月三日達。

覚

松山手永塘方助役<sup>ニ</sup>而、宇土駅所横目兼帯、在勤中一領壹疋

井上育太郎

右身分別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候処、当前之役前手全<sup>ニ</sup>出精相勤、近来御郡代手附横目役<sup>茂</sup>申付<sup>ニ</sup>相成候様子<sup>ニ</sup>付、唐物拔荷改方御横目被仰付候<sup>而</sup>茂、相応可仕人物<sup>ニ</sup>相見<sup>江</sup>、委細本紙書面之通、相聞申候。以上

卯

七月

井上勝蔵<sup>㊦</sup>  
中西弥三次<sup>㊦</sup>

御内意之覚

清成八十郎

御郡代直触<sup>二</sup>而 松山手永

手永横目

北野甚七

当卯六十七歳

右甚七儀、天明元年馬瀬村庄屋申付、文政三年迄四十ヶ年相勤居申候処、同年馬瀬村庄屋<sup>者</sup>差免、松原村<sup>江</sup>所替申付、翌年手永横目兼帯申付置候処、文政七年松原村庄屋<sup>者</sup>依願差免、当時手永横目一役<sup>二</sup>而当年迄惣年数都合五十一年無懈怠相勤居申候内、庄屋<sup>并</sup>手永横目兼帯四十四年手永横目迄七ヶ年相勤申候。

一寛政四年津波之節、御米船及難船候<sup>二</sup>付、即刻駈付<sup>ケ</sup>濡米取揚<sup>ケ</sup>心配仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目三百文被下置候

一享和元年役方数年精勤且父代寸志之訳<sup>二</sup>旁<sup>二</sup>被对、苗字御免御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付、猶亦甚右衛門存生之内、追々近郷火事逢、難渋之者共<sup>江</sup>米錢差遣候<sup>二</sup>付被賞、家内<sup>江</sup>傘・菅笠被成御免候。

一文化五年小物成方御手船御作事<sup>二</sup>付、諸事心配仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目壹貫文小物成方より被下置候。

一同六年十月廿八日之夜、馬瀬村川筋<sup>江</sup>繫被置候御船々、俄之強風<sup>二</sup>塘下<sup>二</sup>吹付<sup>ケ</sup>候砌、即下<sup>二</sup>駈付<sup>ケ</sup>御船破々損<sup>二</sup>相成不申様引揚<sup>ケ</sup>心配仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目五百文被下置候。

一同八年馬瀬村零落之所柄、役方多年厚心を用、格別出精仕候旨<sup>二</sup>而、御郡代直触被仰付候。

一文政八年七百町新地御築立<sup>二</sup>付而、潮留<sup>并</sup>水理御普請之節々、村夫召連罷出、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目壹貫文被下置候。

一同十二年去子秋、大風凶作<sup>二</sup>而一統糧物難渋<sup>二</sup>付、麦作仕付<sup>ケ</sup>方各別差急候様申付置候処、甚七儀、村受杯出役申談<sup>二</sup>相成、格別出精仕候<sup>二</sup>付、支配錢之内を以銀式兩差遣候。

一同年立岡堤堀添之節、石材木運送方出精仕、御普請中小屋詰之面々賄方等受込、無間抜取計心配仕候旨<sup>二</sup>而、御銀五兩被下置候。

一甚七儀、若年より庄屋申付候処、兼<sup>而</sup>手全成もの<sup>二</sup>而壯建<sup>二</sup>も有之、格別零落所之儀<sup>二</sup>付、心配<sup>も</sup>厚出精相勤候<sup>二</sup>付、追々御賞美<sup>被</sup>仰付、弥以勤向入念、手永横目役<sup>二</sup>付而者、必多度村々打廻見聞筋行届、別<sup>而</sup>近年松合村再三之火災宇土町出火、又<sup>者</sup>風損凶作等打続候<sup>二</sup>付而者、飢寒凌寒候者多御座候処、必多度打廻、及飢寒候者共<sup>江</sup>者、勝手向可也之者共より取救等之申談仕、糧物<sup>并</sup>衣類等差遣候様之儀、種々厚<sup>ク</sup>心配仕、昼夜奔走仕、屹度御惣庄屋之手助<sup>二</sup>相成、必多度会所<sup>江</sup>も相詰、去秋凶作之儀、子ノ年より打続程之儀<sup>二</sup>付、別<sup>而</sup>村々難渋仕、御困<sup>者</sup>手薄、彼是甚以当惑<sup>二</sup>而御座候処、右甚七儀、年越も宿許<sup>江</sup>者、引取不申、駈廻相对取救之申談無間抜仕、格別出精仕候。

右之通、庄屋以来当年迄五十年余之勤勞、別<sup>而</sup>近年凶作打続候処無間抜取計、格別心を用精勤仕候<sup>二</sup>付、旁地土進席之議奉願度候得共、甚七儀、乍老年至極達者<sup>二</sup>有之、当役<sup>二</sup>者屹度御用<sup>二</sup>相立居候処、地土<sup>二</sup>而手永横目申付候見合<sup>二</sup>茂無之、才<sup>一</sup>者役方一篇<sup>二</sup>身を打はめ、昼夜さしはまり相勤、進席之儀<sup>者</sup>内々相断候様子<sup>二</sup>相

聞、奇特之事<sup>二</sup>も有之、旁<sup>二</sup>付右年功精勤之被賞、何卒作紋御上  
下<sup>二</sup>唐具<sup>二</sup>御銀<sup>二</sup>而茂<sup>二</sup>相応<sup>二</sup>被添下候様有御座度、於私奉願候条、宜  
被成御參談可被下候。已上

四月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

甚七儀、役方五十一年<sup>二</sup>相成、心懸能出精いたし候由、  
書面之通<sup>二</sup>而、文化八年役方格別致出精候付、御郡代直  
触被仰付、其後二十一年<sup>二</sup>相成候得共、右進席後<sup>者</sup>年勞  
被賞候儀無之候間、此節五十年余之勤勞を被賞、作紋麻  
上下一具可被下候哉。右之通被賞候ハ、銀被添下候<sup>二</sup>  
者及申間敷奉存候。

右付札之通八月六日達

覚

御郡代直触<sup>二</sup>而松山手永横目

北野甚七

右身分別紙申立之趣<sup>二</sup>付見聞仕候処、手全成人物<sup>二</sup>而、役方数十  
年心懸能出精相勤、年齢<sup>二</sup>者壯健有之、必多度村方打廻、極難渋  
之者共飢寒相對、取救等之申談深切<sup>二</sup>いたし、一稜為合<sup>二</sup>相成候  
様子、其外勤年数追々被賞候儀等、本紙書面之通<sup>二</sup>相聞申候。以  
上

卯七月

野田恒助<sup>印</sup>

一一七 大田黒圓右衛門 他

(九一二一四)

御内意之覚

御惣庄屋直触<sup>二</sup>而松山手永

笹原村庄屋

大田黒圓右衛門

当卯七十八歳

右圓右衛門儀、安永元年笹原村頭百姓申付、天明四年村横目兼帶  
申付置候処、寛政元年頭百姓<sup>者</sup>差免、村横目一役<sup>二</sup>申付、同十年  
村横目<sup>者</sup>差免、松山会所小頭<sup>二</sup>申付、享和三年小頭差免、笹原村  
庄屋申付、文化四年迄頭百姓以来三十六年相勤居候処、眼病<sup>二</sup>付  
依願庄屋役差免、快復仕候<sup>二</sup>付、同七年庄屋再役申付、相勤居申  
候。頭百姓以来当年迄六十年之内、眼病<sup>二</sup>而役儀断兩年引入居候<sup>二</sup>  
付、都合五十八年精勤仕居申候。

一寛政五年津波之節、急場之御用筋等、無間抜取計、生残り候もの  
共、生産<sup>二</sup>基方しらへ等厚ク心を用、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目三貫  
文被下置候。

一文化元年笹原村開御築立<sup>二</sup>付、下しらへ見分立会、塘手築立夫  
仕、且開明之上、地割万端厚心を用、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目唐貫  
五百文被下置候。

一文政八年七百町新地御築立之節、潮留<sup>并</sup>水理御普請之節々、夫方  
召連罷出、致出精候旨<sup>二</sup>而、鳥目一貫文被下置候。

一同十年役方多年心懸能、新地築方之節、始末格別致出精、右入目  
錢拜借返納相濟、彼是上下一稜為合<sup>二</sup>相成、且笹原村之儀、水干

之兩害を受候所柄<sup>二</sup>候処、近年新古井手掘浚等厚致世話、水害<sup>茂</sup>薄相成、將亦御出御用臨時之儀をも、無間抜取計候<sup>二</sup>付、苗字被成御免、御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付候。

一同十二年去子秋非常之風災<sup>二</sup>而不作<sup>二</sup>相成候得共、村方申諭能、受免通受除申候<sup>二</sup>付、支配銀を以、鳥目五百文差遣候。

一同年立岡堤掘添之節、夫方引連罷出、夫仕其外受込之勤稜出精いたし、且又杉嶋新川掘替<sup>二</sup>付、大勢之夫方召連罷出、出精仕候旨<sup>二</sup>、鳥目壹貫五百文被下置候。

一圓右衛門儀、惣体手全成もの<sup>二</sup>、平日村方申諭行届候<sup>二</sup>付、村方一和いたし、御年貢・諸出米銀・諸公役速<sup>二</sup>有之、一統勸農<sup>二</sup>基、以前ハ零落所<sup>二</sup>、御難題而已<sup>二</sup>相成居申候処立直、近年御損引等も容易<sup>二</sup>不願出、村中之風儀<sup>茂</sup>宜、上下之御為合<sup>二</sup>相成申候。

右之通六十年近キ勤勞且村方零落立直之儀も有之、最早極老之もの旁<sup>二</sup>被对、御郡代直触<sup>二</sup>被召直被下候様。

御惣庄屋直触<sup>二</sup>、右同立岡村庄屋

釜賀五平次

当卯七十二歳

右五平次儀、天明二年立岡村庄屋申付、文化四年古保里村庄屋兼帯申付、同十年古保里村庄屋兼帯<sup>者</sup>依願差免、立岡一村受持、当年迄都合五十年無懈怠相勤申候。

一文化三年役方多年心懸能、出精相勤、村方教示等宜旨<sup>二</sup>、礼服被御免候。

一同四年より十年迄七ヶ年古保里村庄屋兼帯申付置、依願差免候

節、右村之儀、御用繁之所柄致出精候<sup>二</sup>付、支配錢之内を以、鳥目壹貫文差遣候。

一文政元年村方零落<sup>二</sup>付、万端心遣強ク小前之もの共、示方宜、御年貢・諸公役等手堅取計、当前之御用筋無間抜多年致出精様候旨<sup>二</sup>、無苗御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付候。

一同八年七百町新地御築立<sup>二</sup>付、潮留<sup>井</sup>水理御普請之節々、夫方召連罷出至出精候旨<sup>二</sup>、鳥目壹貫文被下置候。

一同十二年立岡堤掘添之節、堤床代地其外諸事厚致心配、井樋塘筋見拟等<sup>二</sup>至迄取計筋行届、格別致出精、且又杉嶋新川掘替<sup>二</sup>付、も、同様出精仕候旨<sup>二</sup>、苗字被成御免候。

右之通<sup>二</sup>、五平次儀、惣体手厚もの<sup>二</sup>役前出精仕、真実<sup>二</sup>教示仕候間、村方帰服<sup>茂</sup>仕申付筋相用候処より、以前<sup>者</sup>零落之所柄、近年打統之凶作有之候<sup>而</sup>も、成立候方<sup>二</sup>相成、第一出入ケ間敷儀等<sup>茂</sup>差起不申、全村方示方行届候儀<sup>二</sup>、最早極老之もの五十年之勤勞旁<sup>二</sup>被对、御郡代直触<sup>二</sup>進席被仰付被下候様。

右同大見村庄屋

清七

当卯六十七歳

右清七儀、文化元年大口村庄屋申付、文政六年迄二十ヶ年相勤申候処、大口村庄屋<sup>者</sup>差免、大見村入庄屋申付、当年迄廿八年相勤、外<sup>二</sup>寛政八年より享和三年迄帳書相勤、都合三十六年無懈怠相勤居申候。

一文化十一年大口村新地御築立之節、数十日出精相勤候旨<sup>二</sup>、鳥目壹貫文被下置候。

一文政八年七百町新地御築立之節、潮留并水理御普請之節々、夫方召連罷出致出精候旨<sup>二</sup>而、鳥目老貫文被下置候。

一同十二年役方多年出精仕、立岡堤掘添之節、夫方召連罷出、且亦杉嶋新川掘替<sup>二</sup>付<sup>而</sup>も、出精仕候旨<sup>二</sup>而、合羽・傘・菅笠被成御免候。

右之通庄屋二十八年、外<sup>二</sup>帳書八ヶ年都合三十六年手全出精相勤、其外近年臨時之儀<sup>茂</sup>多御座候処、無間抜精勤仕候<sup>二</sup>付、右年功<sup>二</sup>被<sup>二</sup>對、苗字御免御惣庄屋直触<sup>二</sup>被<sup>二</sup>仰<sup>二</sup>付<sup>二</sup>被<sup>二</sup>下<sup>二</sup>候<sup>二</sup>様。

右三人之もの共、夫々右書之通被<sup>二</sup>仰<sup>二</sup>付<sup>二</sup>被<sup>二</sup>下<sup>二</sup>候<sup>二</sup>様有御座度、於私奉願候条、宜被成御參談可被<sup>二</sup>下<sup>二</sup>候<sup>二</sup>。已上

四月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

圓右衛門儀、達之通<sup>二</sup>而、頭百姓已來惣年数八五十八年<sup>二</sup>

相成候ても、小頭八六年、庄屋役ハ二十七年<sup>二</sup>相成、庄屋

役迄之勤<sup>二</sup>而、ハ苗字御免、御惣庄屋直触之見合に<sup>茂</sup>至り居

不申候処、追々功業等<sup>茂</sup>有之候付、文政十年苗字御免、御

惣庄屋直触<sup>二</sup>ハ被<sup>二</sup>仰<sup>二</sup>付<sup>二</sup>置候。其已後五年<sup>二</sup>相成、前<sup>茂</sup>間近<sup>二</sup>

御座候間、先見合被置、惣年数六十年已上<sup>二</sup>茂相成候

ハ、其節僉議之筋も可有御座哉。

五平次儀、達之通<sup>二</sup>而、庄屋役五十年<sup>二</sup>相成、御郡代直触

被<sup>二</sup>仰<sup>二</sup>付<sup>二</sup>候見合に<sup>二</sup>茂相<sup>二</sup>当<sup>二</sup>候<sup>二</sup>ても、文政十二年苗字被成御

免、已後三年相成、余り間近<sup>二</sup>御座候<sup>而</sup>、先見合可被置

哉。

再儀 付紙之通見合僉議相達置申候処、御郡代より猶口達

之趣<sup>茂</sup>有之、復考仕候処、五平次儀、庄屋一役五十

年相勤、役前出精いたし、示方行届、最早七十歳余

極老之者<sup>二</sup>有<sup>二</sup>之<sup>二</sup>候<sup>二</sup>由、書面之通御座候。苗字御免よ

りも前間近<sup>二</sup>ハ有<sup>二</sup>之<sup>二</sup>候<sup>二</sup>とも、苗字御免之儀ハ立岡堤

掘添、杉嶋新川掘替之節、出精付<sup>而</sup>、別途に被賞<sup>二</sup>

付、此節ハ五十年之勤勞且老年旁之訳を以、達之通

御郡代直触可被<sup>二</sup>仰<sup>二</sup>付<sup>二</sup>哉。如何程<sup>二</sup>可有御座哉。

清七儀、達之通<sup>二</sup>御座候<sup>二</sup>処、庄屋役ハ二十五年、無苗御

惣庄屋直触四十年已上、苗字御免之見合<sup>二</sup>有<sup>二</sup>之<sup>二</sup>、清七儀

惣年数ハ三十六年<sup>二</sup>相成<sup>二</sup>候<sup>二</sup>へとも、村帳書之年数難相

加、庄屋役之勤<sup>者</sup>、二十八年相成候間、此節<sup>者</sup>無苗<sup>二</sup>而

御惣庄屋直触可被<sup>二</sup>仰<sup>二</sup>付<sup>二</sup>哉、申立通<sup>二</sup>ハ難及僉議可有御座

哉。

右付札之通、九月十日達、釜賀五平次儀、同廿九日達。

二二八 字七

(九一二一四)

御内意之覚

松山手永三日・立岡兩村御山ノ口

字 七

右字七儀・寛政七年三日村村横目申付、享和三年三日・立岡兩村御山口兼帯申付、文政元年村横目<sup>者</sup>差免、同八年佐野村御山ノ口当分兼勤申付置候処、依願佐野村兼勤<sup>者</sup>、同九年差免、三日・立



岡岡村迄相勤居申候。惣躰右岡村懸り御山之儀者、下益城平原・

木原・阿高三ヶ村ニ相境、煩敷儀茂多、殊ニ至而嶮岨之御山々々ニ

御座候処、宇七儀、平常心懸打廻り見拟仕候ニ付、他村より入込

盜代等茂無之、近年ニ至り候而者、余程御山繁茂仕、且又四年以

前より空野・秣場之内、七分目より上通り、下益城相境迄新規植

立仕候ニ付而者、是以村方へ申諭行届、追々一稜之御山立ニ相成

可申、其外東目七ヶ村之儀者、自分受持ニ不拘、不断打廻り、新

役之もの共江も申諭、示方仕候ニ付、何れ之村々も氣受能、御山

仕立方仕、後年者、弥以繁茂ニ至り可申候。

右之通、宇七儀、手全成ものニ而、兼々役方心懸厚、格別出精相

勤、村横目廿四年、岡村御山ノ口廿九年、右之内三ヶ村御山ノ口

兼帯兩年、当年迄惣年数都合三十七年格別精勤仕候ニ付、年功精

勤旁ニ被对、礼服・小脇差被成御免被下候様有御座度、於私奉願

候条、宜被成御参談可被下候。已上

四月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

山ノ口者三十年ニ而、礼服御免之見合ニ御座候。宇七儀、達之

通ニ而、村横目已来者、三十七年ニ相成候へ共、村横目之儀者

五十年已下之勤ニ而ハ、年功不被賞見合ニ而、山ノ口已来者ニ

十九年ニ相成、一ヶ年浅有之候処、役前心懸能厚、格別出精

いたし候由に付、一ヶ年被縮礼服可被成御免哉。

右村札之通、九月廿三日達。

覚

松山手永三日・立岡岡村御山ノ口

宇七

右者、別紙申立之趣ニ付、見聞仕候処、生質手全ニ有之、役前心

掛能、諸木仕立方并御山見拟等精勤いたし、近年秣場之内新御仕

立ニ付而者、村方申諭行届キ居候由。委細本紙之通承申候。以上

卯

八月

村田市郎助

一一九 伊左衛門

(九一二一四)

御内意之覚

松山手永笹原村御山ノ口ニ而、下網津村、網

津村御山ノ口并同手永馬瀬・笹原・笠岩・郡

浦手永恵里・鶴見塚・両新開、都合七ヶ村塘

筋御仕立櫛下見拟兼帯

伊左衛門

右伊左衛門儀、肩書之通、村々御山ノ口申付置候処、出精相勤居

申候。然処、去ル西ノ年立堤掘添御普請ニ付而、諸手永より越夫

被仰付候節、堤内道掛入用之杉丸太千本、網引御山間引剪を以被

渡下候節、三里余之道法歩夫持ニ而者、難渋仕候ニ付、網引より

笹原井樋口迄持出、筏組立、宇土川口より濶川江乗込方を受込、

且夫より立岡堤迄届方之節者、夫方同様ニ相働、左候而、右道掛ニ

取懸り、昼夜格別骨折出精仕候処、右一件功業御賞美之節、右伊

左衛門儀申立洩ニ相成候由ニ而、未被賞無御座候。

一錢八百四拾目八分三厘

但文政九年笹原村養水磯所并樋巻艘居込御普請入目、本行之  
錢辻寸志指出、直<sup>二</sup>右入目錢<sup>二</sup>被渡下候分。

一同三百拾三匁

但文政十二年、右同石橋掛方等之入目錢・追寸志差出、右同  
断。

合巻貫百五拾三匁八分三厘

但右寸志<sup>二</sup>付<sup>二</sup>而、御普請出来養水<sup>并</sup>通路共<sup>二</sup>一稜為合<sup>二</sup>相成申  
候。

右之通、寸志差出、奇特之至<sup>二</sup>付被賞、傘・小脇差被成御免被下  
候様。且又立岡堤掘添之節、出精仕候儀<sup>者</sup>、其節外<sup>二</sup>被賞候御見  
合を以、別段<sup>二</sup>此節一同被賞被下候様有御座度、於私奉願候条、  
宜被御參談可被下候。已上

五月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

伊左衛門儀、達之通<sup>二</sup>而、文政九年・同十二年御普請入目

錢寸志都合巻貫百目余差出置候由<sup>二</sup>付、見合<sup>茂</sup>御座候間、

傘・小脇差可被成御免哉。且又立岡堤掘添御普請之節、出

精いたし候由之処、右一件御賞美之節申立洩<sup>二</sup>相成候由

<sup>二</sup>而、此節一同被賞被下候様との儀<sup>茂</sup>、書面之通<sup>二</sup>付、文

政十二年、右一件御賞美之節、松山手永山口弥平次列九人

被賞之見合を以、伊左衛門<sup>江</sup>鳥目三百文可被下置哉。

右付札之通、十月三日達。

覚

松山手永笹原・両網津村御山ノ口<sup>并</sup>同手永馬  
瀬・笹原・笠岩、郡浦手永恵里・鶴見塚・両  
新開都合七ヶ村塘筋御仕立櫃下見抄兼帶

伊左衛門

右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、役前心懸能、出精相勤候  
由。且酉年立岡堤掘添御普請之節、綱引御山より間引剪之杉丸太  
千本程堤床<sup>江</sup>届方いたし、其外蹟所并樋<sup>并</sup>石橋掛方入目錢寸志差  
出候員数等之儀共<sup>二</sup>、委細本紙書面之通<sup>二</sup>承申候。以上

卯

八月

村田市郎助<sup>印</sup>

一三〇 井上藤次郎 他

(九一二一一四)

御内意之覚

宇土町居住、士席浪人格

一錢三百七拾五匁

井上藤次郎

但丑七月迄中損分

右同

一同七百五拾目

岡村弥三兵衛

但右同断

宇土町居住、地士

一錢三百七拾五匁

藤本茂作

但丑七月迄中損分

同町居住、足輕段

一同四百五拾目 桑原作平次

但右同断

同町居住、御郡代直触

一同百八拾七匁五分

但右同断

門田寿吉郎

右同

一同六百目

但右同断

沢田忠三郎

同町居住、御惣庄屋直触

一同貳百貳拾五匁

但右同断

満永善七

錢合貳貫九百六拾貳匁五分

但去ル子秋大風前後、宇土町難渋之者共、糧物為備富家之面々

江、三千百八俵余買備申談ニ相成候内、井上藤次郎列直段下ケニ

而救売ニ相成申候。中損分別紙宇土町別当共より之しらへ帳式

冊分

高良村居住、御郡代支配

一錢百四拾九匁七分五厘

但丑七月迄中損分

井上武右衛門

同村居住、御惣庄屋直触

一同百九拾三匁

但右同断

鎌賀善左衛門

錢合三百四拾貳匁七分五厘

但去ル子秋凶作ニ付、高良村難渋之者共、糧物為備米五百四

拾俵買備申談ニ相成候内、井上武右衛門列直段下ニ而救売ニ相

成候中損分、別紙同村庄屋しらへ帳前

松合村居住、独礼

一錢六百七拾壹匁五分

但丑七月迄救売中損分

草野勘右衛門

一錢拾七貫九百七拾九匁六厘

但右同断并備米持越売立中損分

内巻貫三百拾貳匁五分 救売中損分

合拾八貫六百五拾目五分六厘

松合村居住、步御小姓列

一錢壹貫八匁

但丑七月迄救売中損分

江本甚十郎

右同、一領一疋

一同貳百四拾三匁

但右同断

河瀬丹十

錢合拾九貫九百壹匁五分六厘

但右同断ニ付、松合村漁師共、糧物為備三千百六拾五俵買備申

談ニ相成候内、直段下ケニ而救売中損分并備米持越売中損

分、別紙村庄屋しらへ帳式冊分

右者去ル子秋非常之大風ニ而、大凶年ニ付、一統糧物難渋ニ付

而者、翌春・夏迄之取続方至而心遣之年柄ニ付、下地御困初又者村

備等、丈夫ニ茂無之、手永中取続方莫大及不足可申見込ニ而、会

所御用錢或者御間御銀拝借等を以、糧物買入手当仕候得共、宇土

町高良村商家之者共并松合村漁師共、兼而買喰仕来申候人数四千

人程之儀、前条御困切并官錢買入之糧物等を以、取続ケ之儀届キ可申様<sup>茂</sup>無之、右三ヶ所居住富家之面々<sup>江</sup>買備之儀、御惣庄屋申談候処、究<sup>而</sup>及飢候者可有之と心遣之折柄<sup>ニ</sup>付、何方<sup>茂</sup>同意<sup>ニ</sup>而承知<sup>ニ</sup>相成、宇土町富家之面々より米三千百八俵余、高良村右同断より五百四拾俵、松合村草野勘右衛門列より三千百六拾五俵、都合六千八百拾三俵買備<sup>ニ</sup>相成、夫々手当相調申候処、其商之響<sup>ニ</sup>而、買入之直段次第<sup>ニ</sup>張上ケ申候得共、其儘之直段<sup>ニ</sup>而売捌<sup>ニ</sup>相成候<sup>而</sup>者、例年と違イ窮民共、纒之境<sup>ニ</sup>而難取統儀<sup>者</sup>、相違<sup>茂</sup>無之候間、各別申談<sup>ニ</sup>より、老升<sup>ニ</sup>付拾五文完以下之直段下ケ<sup>ニ</sup>而、救売之取計<sup>ニ</sup>相成、纒完之直段下ケ<sup>ニ</sup>者、御座候得共、貧民之取続<sup>ニ</sup>者、一稜為合<sup>ニ</sup>相成、其砌追々町別当、村庄屋より調帳を以内密相達候<sup>ニ</sup>付、内輪精々承糺申候処、相違之儀<sup>茂</sup>無御座、中損錢外欠立、又<sup>者</sup>備穀類売残分、去々秋作出来之上、売払<sup>ニ</sup>相成候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、中損<sup>茂</sup>有之候由<sup>ニ</sup>候得共、銘々より勿論申出<sup>茂</sup>無之候<sup>ニ</sup>付、委敷儀相分り不申候。尤草野勘右衛門<sup>江</sup>者、別段申談<sup>ニ</sup>相成候余計之儀數買備救売外、持越米売払中損莫大之錢辻有之、其分<sup>者</sup>相分り居候<sup>ニ</sup>付、口<sup>ニ</sup>書立候通<sup>ニ</sup>而、右救売之影を以、及飢候數千人危命を繫、老人<sup>茂</sup>離散仕候様之儀無之、何れ<sup>茂</sup>奇特之至<sup>ニ</sup>御座候。別<sup>而</sup>草野勘右衛門<sup>ニ</sup>おいてハ、兼<sup>而</sup>手厚キ人柄<sup>ニ</sup>付、追々御惣庄屋より申談筋も有之候処、一箇<sup>ニ</sup>相心得、余計<sup>ニ</sup>買備<sup>ニ</sup>相成申候末、前条之通中損有之、惣鉢松山会所御用錢、近年種々之儀打湊悉皆払出候程<sup>ニ</sup>而、当時現在至<sup>而</sup>乏敷、左候<sup>而</sup>、右凶作外火事彼是種々非常之儀、打重り候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、御惣庄屋より追々右富家之面々<sup>江</sup>申談、内輪稜々出方<sup>茂</sup>多ク有之、尚去冬<sup>ニ</sup>以来之年柄<sup>ニ</sup>

付<sup>而</sup>者、御惣庄屋より買備相談<sup>ニ</sup>而相成、相応々々相調、当時専ら救売を以取続居申候<sup>ニ</sup>付、何卒別段之御詮議を以、何れ<sup>茂</sup>相応々々被賞被下候様有御座度、於私奉願候。左候ハ、富家之面々<sup>茂</sup>相競、以往右様申談筋、弥以能行届、於下方<sup>茂</sup>心強ク一稜民力強メ<sup>ニ</sup>而相成可申と奉存候。則御惣庄屋以下庄屋・町役人より之書付<sup>ニ</sup>、小前帳等、別紙一括相添、御達仕候条、宜被成御参談可被下候。以上

三月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

本行藤次郎列拾式人、去ル子秋非常之凶作<sup>ニ</sup>而、米穀高統相成候付<sup>而</sup>、宇土町高良・松合等之者共、糧物取続方難渋いたし候付、右之面々より本紙米高直段下を以、救売いたし、中損分稜々之通<sup>ニ</sup>有之、貧民之取続<sup>ニ</sup>者、一稜為合<sup>ニ</sup>相成、別紙小前帳相添、達有之、書面之通<sup>ニ</sup>有之候間、いづれも奇特之儀、御聞承届之、及達可申哉。

本紙之内岡村弥三兵衛・桑原作平次・井上武右衛門・鎌賀善左衛門、右之四人ハ、猶又当春・夏、窮民取続之ため、同様救売いたし、中損分別冊達之通<sup>ニ</sup>付、本文達之辞令<sup>ニ</sup>加へ、御聞承届之及達可申哉。

右付札之通、十月四日達、小前帳數冊横帳<sup>ニ</sup>して書面不分<sup>ニ</sup>而、格別見合<sup>ニ</sup>可相成候付、相見不申中損之員數ハ本書之通<sup>ニ</sup>付、旁扣略候事。

覚

松山手永宇土町居住井上藤次郎列拾二人別紙之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候  
処、去ル子秋非常之凶作<sup>ニ</sup>而、米穀高價<sup>ニ</sup>相成候<sup>ニ</sup>付者、宇土町高  
良・松合等之者共、取統方難渋いたし候<sup>ニ</sup>付、右藤次郎列より本  
紙之米高買備直段下ケを以、救売いたし候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、難渋之年柄  
直段之違彼是取統方、一稜之為合<sup>ニ</sup>相成候様子<sup>ニ</sup>而、惣体会所備  
等<sup>茂</sup>手薄有之候由<sup>ニ</sup>付、別<sup>而</sup>町役人等も心遣之砌、右之取計<sup>ニ</sup>相  
成候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、一躰心遣<sup>茂</sup>薄らき候由<sup>ニ</sup>而、委細本紙之通<sup>ニ</sup>相聞、  
所柄之唱<sup>茂</sup>宜、中損欠立等之次第<sup>者</sup>、別紙小前帳之通<sup>ニ</sup>而、相違  
之儀相聞不申、何れ<sup>茂</sup>奇特之人物共<sup>ニ</sup>承申候。以上

卯

八月

村田市郎助<sup>㊦</sup>

井口角之進<sup>㊦</sup>

一三一 木村政吉

(九一二一四)

御内意之覚

御才覚錢寸志差出、苗字御免尚亦御類焼寸志  
差出、刀御免・御郡代直触被仰付置、致病死  
候宇土町居住、木村又右衛門<sup>悴</sup>

木村政吉

一錢貳貫五百目

当卯四十一歳

右<sup>者</sup>、親跡為繼目、今度関東筋御普請御用御手伝寸志錢、右之通  
差出、奇特之者<sup>ニ</sup>も有之、父又右衛門代御才覚錢寸志差出候節  
先役共より含置候趣<sup>茂</sup>有之、旁<sup>ニ</sup>被对、父跡苗字・刀御免之

御郡代直触相統被仰付被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被成  
御参談可被下候。已上

九月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

政吉儀、父木村又右衛門依寸志、御郡代直触被仰付置候  
処、相果候付、二代目<sup>者</sup>無苗可被仰付処、御才覚錢差出苗  
字<sup>苗字</sup>御免之節、御郡代より被含置候趣有之、右寸志<sup>ニ</sup>而  
ハ、二代迄ハ苗字御免之見合<sup>ニ</sup>御座候間、父同様苗字可被  
成御免哉、且今度関東川々御普請御手伝御用付<sup>而</sup>、繼目寸  
志として貳貫五百目差上、右之内卷貫五百目差上、右之内  
卷貫五百目ハ刀御免、壹貫目ハ御郡代直触被仰付候規矩<sup>ニ</sup>  
相当申候間、旁父同様苗字、刀御免、御郡代直触可被仰付  
哉。

右付札之通、十一月廿一日達

(天保三年)

一三二 澤田忠三郎、澤田善次郎

(九一二一一)

御内意之覚

宇土町居住御郡代直触

澤田忠三郎

右<sup>者</sup>、先年御才覚錢寸志六貫三百拾四匁并御類焼<sup>ニ</sup>付、寸志錢五百

目差出申候処、文化五年苗字・刀御免・御郡代直触<sup>二</sup>被仰付、今年迄二十五年相勤申候。然処最早年罷寄難相勤、乍恐御断申上度願書相達候<sup>二</sup>付、承札候処、相違<sup>茂</sup>無御座候間、願之通被仰付被下候様。

右同人養子 宇土町別当

澤田善次郎

当辰四十式歳

右<sup>者</sup>兼<sup>而</sup>手全成人物<sup>二</sup>付、去々寅年宇土町別当役申付、今年迄三ヶ年出精相勤居申候。然処養父忠三郎儀、前条之通寸志差出、御才覚錢寸志倡候節<sup>者</sup>、先同役共より含置候儀も有之候<sup>二</sup>付、御郡代直触之儀<sup>者</sup>、二代相統奉願候筈之処、追々寸志、左之通差出申候。

一 錢貳貫目

但關東筋川々御普請御用御手伝<sup>二</sup>付、本行之通養父澤田忠三郎より寸志差出、皆濟仕候。

一 同三貫目

但今度窮民御取救<sup>二</sup>付、善次郎より寸志差出、宇土向<sup>江</sup>引渡相濟申候。

合五貫目

右之通寸志差出、奇特之儀<sup>二</sup>付、宇土町別当役席<sup>茂</sup>有之、旁<sup>二</sup>被賞、町独礼<sup>二</sup>被仰付、御才覚寸志之訳を以、苗字・刀被成御免被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被成御參談可被下候。已上

辰

正月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

忠三郎儀、達之通<sup>二</sup>付、願之通御郡代直触可被成御免哉。善次郎儀、達之通<sup>二</sup>而、父忠三郎苗字・刀被成御免、御郡代直触被仰付候節之寸志之内<sup>二</sup>者、前条之通御才覚錢有之、誘之節二代相統之含<sup>二</sup>相成居候由。右之寸志<sup>二</sup>限り、達之趣よつてハ二代迄<sup>者</sup>、父同様被仰付候見合<sup>二</sup>付、其通可被仰付哉之処、猶又 御手伝御用<sup>并</sup>窮民御取救として、寸志錢本行之通差出、且善次郎別当相勤居、右寸志高別当より町独礼進席被仰付候規矩<sup>二</sup>相当申候間、町独礼被仰付、苗字・刀可被成御免哉。

一 付札之通二月十九日、江戸伺忠三郎儀、五月十一日達、善次郎儀同十三日申渡。

一 三三 右山貞助、右山弥八

(九一三二一)

御内意之覚

松山手永一領一疋

右山貞助

右貞助儀、文化三年親跡一領一疋<sup>二</sup>被召出、御赦免開を<sup>茂</sup>被下置数々在役申付、当年迄二十五年無懈怠相勤居申候処、病氣差発、乍恐御奉公御断申上度段、願書相達申候<sup>二</sup>付、承札候処、相違無御座候間、願之通被成御免被下候様。

右同人養子

右山弥八

当辰二十一歳

右弥八儀、人柄<sup>茂</sup>直、文武芸心懸能、入門等之次第、左之通

一 劍術 文政九年速水八郎兵衛<sup>二</sup>入門仕、同十一年位詰相伝仕、稽

古仕居申候。

一 居合 同十年井澤十郎左衛門<sup>二</sup>入門仕、右同断。

一 馬術 天保元年村松藤八<sup>二</sup>入門仕、右同断。

一 炮術 右同年平野信右衛門<sup>二</sup>入門仕、同二年目錄相伝仕、右同

断。

一 組打・薙刀 文政九年星野龍助<sup>二</sup>入門仕、天保二年組打・薙刀共

<sup>二</sup>目錄相伝仕、右同断。

一 水練 右同年山東彦右衛門<sup>二</sup>入門仕、稽古仕居申候。

一 文学 辛嶋才藏<sup>二</sup>同八年入門仕申候。

一 習書 同七年町熊之助<sup>二</sup>入門仕申候。

右之通<sup>二</sup>而、追々と仕御用<sup>二</sup>相立候見込<sup>二</sup>御座候。貞助先祖之

儀、御惣庄屋<sup>并</sup>一領一疋等数代被召仕候家柄、委細<sup>者</sup>別紙先祖付

之通<sup>二</sup>而、貞助<sup>茂</sup>数役二十五年相勤候<sup>二</sup>付、弥八儀養父貞助跡一

領一疋相統被仰付、御赦免開<sup>茂</sup>直<sup>二</sup>被為拝領被下候様有御座度、

於私奉願候。則貞助先祖附<sup>并</sup>弥八師範々々之書付等相添、御達仕

候条、宜被成御參談可被下候。已上

辰

正月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

貞助儀、達之通<sup>二</sup>付、願之通一領一疋被成御免、御赦免開  
地可被召上哉。

弥八儀、達之通<sup>二</sup>而、数代一領一疋相統被仰付来候家筋之

者<sup>二</sup>付、見合<sup>茂</sup>御座候間、親跡一領一疋被召出、御赦免開

地を<sup>茂</sup>直<sup>二</sup>可被下置哉。

右付札之通五月廿五日達。

覚

松山手永一領一疋

右山貞助

右貞助養子

右山弥八

右<sup>者</sup>、別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、貞助儀、病氣<sup>二</sup>而、御奉

公難相勤段、無余儀様子<sup>二</sup>而、養子弥八儀、人物手全<sup>二</sup>有之、文武

芸等出精いたし候由、委細本紙書面之通相聞、行状等異候唱承不

申候。以上

辰

四月

中西弥三次<sup>印</sup>

覚

初代

松山傳右衛門

右傳右衛門先祖<sup>者</sup>、蛭屋孫兵衛と申者、清正公<sup>江</sup>奉仕、御知行高

式百六拾石被下置、相勤居申候処、忠廣公御改易之砌、浪人仕、

宇土郡宇土町<sup>江</sup>引込、居住仕居申候。孫兵衛悴六良左衛門代、右

山六郎左衛門と相改、御領村<sup>江</sup>引移、居住仕、六郎左衛門悴右山

喜左衛門と申者、村支配<sup>二</sup>相成、酒質商売仕、御百姓潰方<sup>二</sup>相成

候者共取立遣候<sup>二</sup>付、為御賞美、貞享三年高拾石、其身一代被為

拜領、猶又御銀拾枚被為拜領候。右喜左衛門傳右衛門と申者、元禄三年六月宇土郡松山手永御惣庄屋被仰付、御知行高式拾石被為拜領相勤居申候処、病氣差発り、御役御断申上候処、願之通御免被仰付候。

二代目

右山吉左衛門

右者、傳右衛門傳<sup>二</sup>而、元禄九年八月親跡御惣庄屋被仰付、御知行高式拾石被為拜領、相勤居申候内、数年手全<sup>二</sup>相勤、手永中抄方宜敷御算用等も速<sup>二</sup>相仕舞、不時御用筋をも出精相務申候旨<sup>二</sup>而、乘馬御免被仰付、相勤居申候処、追々本名御免被仰付、右山傳右衛門と相改、御奉行所御物書段<sup>二</sup>被仰付、其後又々白銀式枚被為拜領、元文三年七月下益城中山手永御惣庄屋所替被仰付、御知行高式拾石被為拜領、彼方<sup>江</sup>引越相勤、松山手永御惣庄屋役共<sup>二</sup>四十八ヶ年相勤、寛保三年正月病死仕候。

三代目

右山喜左衛門

右傳右衛門傳<sup>二</sup>而、元文三年七月親跡宇土郡松山手永御惣庄屋被仰付、御知行高式拾石被為拜領、十三ヶ年相勤、寛延四年八月病死仕候。

四代目

右山傳右衛門

右喜左衛門傳<sup>二</sup>而、御座候処、寛延四年八月、宇土郡一領卷疋<sup>二</sup>被召出、当前之御奉公、無懈怠相勤申候内、曾祖父傳右衛門より右山喜左衛門迄、代々被下置候御赦免開松山手永佐野・三日両村<sup>二</sup>

而田畑反八畝、喜左衛門死後上り開<sup>二</sup>相成申候処、明和二年五月依願被為拜領置候処、安永五年五月病死仕申候。

五代目

右山長左衛門

右者、傳右衛門傳<sup>二</sup>而、御座候処、安永五年二月、親跡一領一疋<sup>二</sup>被召出、安永五年より文化三年迄三十一ヶ年、御奉公無懈怠相勤居申候処、老極仕、御奉公勤兼申候<sup>二</sup>付、御断奉願願之通御免被仰付候。

一六代目私儀、文化三年五月親跡一領一疋<sup>二</sup>被召出被下置候御赦免開地を<sup>茂</sup>、無相違被下置、宇土町見<sup>二</sup>被仰付、日勤仕候内、同四年八月、同町人馬所<sup>并</sup>町会所見<sup>二</sup>被仰付、兼帶被仰付候<sup>二</sup>付、当年迄廿五ヶ年相勤申候。

一文政四年正月、八代郡七百町新地御築立被仰付候<sup>二</sup>付而、松山手永海辺村々より茨剪出見<sup>并</sup>七百町南塘手出役被仰付候<sup>二</sup>付、正月より十二月迄相詰申候。為御賞美金子貳百疋<sup>并</sup>地方式反五畝被為拜領候。

一同五年正月より求<sup>尋</sup>廣川より七百町迄新川掘方被仰付候<sup>二</sup>付、出夫之節々、出勤仕申候。

一同六年十一月、松橋高良川掘方被仰付候節、出役仕申候。

一同七年三月、立岡大堤掘添御普請之節、出役詰方仕申候。為御賞美、銀五兩被為拜領候。

一御出御用<sup>并</sup>薩州様御通行之節々、出役仕申候。

一御郡中手永内不時御用被仰付候節々、当年迄廿五ヶ年、無懈怠出役仕申候。



一文政十二年十一月より同十三年三月迄、高良村懸十五社新地築立

御用懸被仰付候ニ付、出勤仕申候。

一文化四年八月より、宇土町抜米見扱被仰付候ニ付、文政三年迄十ニヶ年相勤申候。

一被下置候御赦免開、左之通

一畑老反式畝

三日村

内九畝

荒地

一田六畝

佐野村

右之通御座候。以上

宇土郡一領老正

天保二年

右山貞助

一三四 宇七、源八 他

(九一三一一)

御内意之覚

下網田村御山ノ口

宇七

歳七拾五

右宇七儀、寛政四年より御山ノ口申付、当年迄四十一年相勤居申候。惣躰手全成者ニ而、兼御山内見ケ扱無間断仕、植立等手厚相励せ候ニ付、自然と御山繁茂仕候。右之通出精仕、最早余命茂無之極老之者ニ付、数十年之勤劳旁被賞、礼服被成御免被下候様。

同村右同

源八

歳七十三

右源八儀、寛政九年より蔵頭相勤、文化六年右役相断候ニ付、頭百姓申付、相勤居候処、同十三年御山ノ口申付、文政元年庄屋代役を茂兼勤申付、大高多人数之村方世話筋茂行届、精勤仕居候処、同三年庄屋代役者差免、御山ノ口頭百姓而役兼勤ニ而、役方都合三十六ヶ年相勤居申候。未夕年数者満不申者ニ候得共、右之通数役ニ亘り、手全ニ相勤、当時御山内見ケ扱等、宇土同様至而手厚世話仕、外々手本とも相成候程ニ出精仕候者ニ付、旁ニ被对、御別段を以、礼服被成御免被下候様。

赤瀬村津横目

惣兵衛

歳六十七

右惣兵衛儀、天明三年より村横目・津横目兼勤申付、相勤居候処、村横目之儀者、文化十三年村々共ニ被差止候ニ付、津横目迄相勤、当年迄都合五十年手全出精相勤居申候間、被賞礼服被成御免被下候様。

波多村右同

惠七

歳七十式

右惠七儀、寛政四年より村横目・津横目兼勤申付置候処、村横目之儀者、前条同様被差止候砌、波多・三角浦両村津横目兼勤申付、当年迄都合四十一年相勤、右村之儀、頭百姓之次ニ組頭と唱へ、庄屋限申付、諸御普請等之節、組内引廻罷出、出精仕せ候者有之、根元惠七儀、天明二年より右組頭仕、廉直ニ相勤候ニ付、

右之通津横目等申付候儀、御座候。左候得者、打混役方五十一ヶ年之年数ニ相当り、最早余命<sup>茂</sup>無之者<sup>ニ</sup>付、何卒右数十年之勤勞<sup>ニ</sup>被对、御別段を以、礼服被成御免被下候様。

右宇七列四人之者共儀、何れも不相劣役方差はまり、老極<sup>ニ</sup>相成候迄相励精勤仕、外々之手本とも可相成者共<sup>ニ</sup>而、勤方年数之浅深も御座候得とも、最早極老之者共<sup>ニ</sup>付、自然追賞<sup>ニ</sup>とも相成候様御座候<sup>而者</sup>、残念之儀<sup>ニ</sup>御座候間、何卒右書之通、夫々急<sup>ニ</sup>被賞被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被御参談可被下候。已上辰

三月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

宇七儀、達之通<sup>ニ</sup>而、御山口四十一年相成、年数見合<sup>ニ</sup>越居申候間、礼服可被成御免哉。

源八儀、達之通<sup>ニ</sup>御座候處、御山口ハ二十年以上傘御免、三十年以上礼服御免之見合<sup>ニ</sup>有之、源八儀頭百姓之年数ハ難相加、御山口以来<sup>者</sup>十七年<sup>ニ</sup>相成、傘御免之見合<sup>ニ</sup>茂至り不申候得共、御山内見ケ抄等手厚世話いたし、出精仕候由。最早七十歳余<sup>ニ</sup>相成、年老旁之訳を以ハ、年数被縮候見合<sup>茂</sup>、追々有之候間、源八儀、此節傘可被成御免哉。礼服御免之儀<sup>者</sup>、見合可被置哉。

但、頭百姓之年数<sup>者</sup>、五十年より内<sup>ニ</sup>而者、難相立御座候。

惣兵衛儀、達之通<sup>ニ</sup>而、以前ハ村横目を<sup>茂</sup>兼勤仕居、文化

十三年村横目被差止候付、津横目迄相勤、当年迄五十年手全出精いたし候由。見合<sup>茂</sup>御座候間、礼服可被成御免哉。惠七儀、前条同断<sup>ニ</sup>而、村横目被差止、津横目迄相勤、当年迄四十一年<sup>ニ</sup>相成申候。三十五年以上之勤<sup>ニ</sup>而者、礼服御免之見合<sup>茂</sup>御座候間、惠七儀、礼服可被成御免哉。

例

三十五年 荒尾手永大嶋町津横目

傳助

四十二年 小田手永小天村右同

七郎助

右付札之通、六月三日達

覚

郡浦手永下網田村御山口宇七列四人別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候處、左之通<sup>ニ</sup>御座候。

下網田村御山口

宇七

同村右同

源八

右兩人何れ<sup>茂</sup>役前心懸能、御山見抄方出精相勤候由。且勤年数委細本紙之通承申候。

赤瀬村津横目

惣兵衛

波多村右同

惠七

右兩人数十年出精相勤候由。其外年数等委細本紙之通承申候。

右見聞仕候趣、御達申上候。以上

辰

五月

村田市郎助<sup>㊦</sup>

一三五 松浦圓助、徳右衛門

(九一三二一)

御内意之覚

御郡代直触<sup>ニ</sup>而、戸馳村庄屋

〔書込〕

松浦圓助

当辰六十九歳

戸馳村之儀、無類之旱田所<sup>ニ</sup>而、

養水無之所柄<sup>ニ</sup>而、圓助在勤中、

新堤奉願、掘方いたし候ヶ所々々

水保方宜、一稜之養水出来いたし、

近年御難題筋薄相成候付、此儀<sup>者</sup>

別段相応被賞被下候様との儀、付

札有之候事。△相印

右<sup>者</sup>寛永以来数代戸馳村庄屋役申付来、右圓助儀、数十年精勤仕候次第、左之通

一安永七年より天明元年迄四年会所小頭相勤申候。

一天明二年より戸馳村庄屋役申付、精勤仕候内、病氣差発候<sup>ニ</sup>付、

寛政十年依願庄屋役差免、天明二年より十七年相勤申候。

一文化十年病氣快復仕候<sup>ニ</sup>付、尚亦庄屋役申付、当年迄二十年相勤、前後庄屋役三十七年精勤仕居申候。

会所小頭以来、都合四十一年

一数代庄屋役相勤、且先祖之訳筋<sup>ニ</sup>被対、揚酒本手二本代々被為拝領置候。

一寛政四年津波之節、出精相勤、且寸志差出、旁被賞、寛政五年御郡代直触被仰付候。

一寛政四年八代御蔵御米積船難船之節、出精仕候<sup>ニ</sup>付、鳥目貳百文被為拝領候。

一文政七年御材木積船難船之節、出精仕候<sup>ニ</sup>付、鳥目三百五拾文被為拝領候。

一文政十年八代七百町御新地御築立<sup>ニ</sup>付、出精仕候旨<sup>ニ</sup>而、作紋御上下一具被為拝領候。

右之通数十年出精仕、一体勤方心懸厚、戸馳村之儀、御国境之上周廻五里余之離嶋<sup>ニ</sup>而、高九百石余・人数千人<sup>ニ</sup>近ク有之、公料

天草<sup>ニ</sup>隣り居、取締第一之所柄<sup>ニ</sup>御座候処、兼<sup>ニ</sup>手厚示方仕候<sup>ニ</sup>付、聊隣郷之風儀<sup>ニ</sup>頓着仕候儀も無之、御法度<sup>并</sup>御制度筋をも能

相守り、一島等敷婦服仕居候<sup>ニ</sup>付、御難題筋等<sup>者</sup>差発不申、格別積立書止候功積<sup>者</sup>少々御座候得共、前条之通離島<sup>ニ</sup>候<sup>へ</sup>者、△

(前掲の書込) 風波等之節<sup>者</sup>、諸御役人渡海も難成、類外之所柄<sup>ニ</sup>而、平日心遣筋多御座候処、畢竟各別之精勤仕候所より、示方

も能行届、人氣<sup>茂</sup>一和仕、一嶋静謐<sup>ニ</sup>相治り居、外々村方之手本とも相成申程之もの<sup>ニ</sup>御座候処、圓助儀最早及老年、余命も無之

候間、是迄数十年之勤勞且御境目離島類外之訳を以、地土進席被仰付被下候様。

石橋村庄屋

徳右衛門

当辰六十六歳

右徳右衛門儀、寛政四年より石橋村頭百姓申付、同十一年村横目申付、文化八年迄廿年相勤申候。

一文化九年石橋村庄屋役申付、文政二年神山村庄屋兼勤申付、当年迄廿一年相勤居申候。

頭百姓以来都合四十一年

一文化十四年役方心懸厚、村方申諭等行届、且御達筋能相守、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目老貫文被為拜領候。

一文政八年八代御新地築立之節、出精仕候<sup>二</sup>付、鳥目右同断。

右之通<sup>二</sup>而、兼々勤方心懸厚、両村共々根元零落之村方<sup>二</sup>而、農

力<sup>茂</sup>相衰居候処、追々新井出・新堤等堀方願出、水氣も拔、且養水之弁利を得候次第、左之通

一石橋村瀬田尻御領橋・角田烏帽子形入地・塩田町裏下ヶ名之内至

而旱田所<sup>二</sup>而、年々御損引等奉願、且同所内水田之ヶ所ハ、蕎麦

作等仕付出来兼、難渡者共糧物所持不仕、彼是<sup>二</sup>而年々御難題迄<sup>二</sup>相成来候<sup>二</sup>付、文政七年水氣拔新井手願出、堀方仕候処、地味立

直、蕎麦等植付候様相成、尚亦文政二年神山村之内<sup>江</sup>新堤願出、堀方仕候処、旱田薄キ申候。

一同村前田下ヶ名之内、泰雲寺道筋下夕至<sup>而</sup>之沼田<sup>二</sup>而、蕎麦作等

植付出来兼候<sup>二</sup>付、天保二年水氣拔新井手願出、堀方仕候<sup>二</sup>付、地味立直シ、蕎麦作植付候様相成申候。

一神山村之内、馬場村下ヶ名往古より沼田<sup>二</sup>而、前条同断<sup>二</sup>付、文

政十一年水氣拔新井手願出、堀方仕候<sup>二</sup>付、地味立直、脇村々<sup>二</sup>見合<sup>茂</sup>無之能地<sup>二</sup>相成、蕎麦作等植付候様相成申候。

右仕法立いたし候以来、一体地力も相増、人氣引立、御難題筋<sup>茂</sup>薄キ、屹度零落立直之一助<sup>二</sup>相成申候。右之通心懸厚ク数十年精勤仕功績<sup>茂</sup>有之事<sup>二</sup>付、未年浅<sup>二</sup>者御座候得共、御別段を以、無苗御惣庄屋直触被仰付被下候様。

右両稜共<sup>二</sup>夫々宜被仰付被下候様有御座度奉願候条、可然被成御參談可被下候。已上

辰

三月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

見合 圓助儀、会所小頭已来四十一年之内、庄屋前後三十七年<sup>二</sup>

相成、勤方心懸厚、離島・公料天草隣居、取締第一之所柄、兼<sup>而</sup>手厚示方仕、嶋等敷帰服仕居、諸事心遣筋多、各

別精勤仕候所より示方<sup>茂</sup>能行届、数十年之勤勞且御境目・離島類外之訳を以、地士進席被仰付被下候様、書面之通<sup>二</sup>

御座候。村庄屋通例之処<sup>二</sup>而者、五十年以上御郡代直触被仰付候。尤下地寸志等之訳<sup>二</sup>因<sup>而</sup>、御郡代直触迄進居候者

ハ、五十年以上<sup>二</sup>而者、地士被仰付候例<sup>茂</sup>御座候へ共、五十年未滿<sup>二</sup>而者、被仰付候見合<sup>者</sup>、矢部手永井野村庄屋山下庄

兵衛、惣年数四十六年御郡代直触より十二年目地士被仰付候。同手永佛原村・井無田村・郷野原村庄屋<sup>并</sup>御山口兼、

藤岡新次庄屋本役四十二年、寸志之訳<sup>二</sup>因<sup>而</sup>苗字御免、御惣庄屋直触被仰付、其後多年万端心懸能致出精、且矢部手

永御年貢米御仕法替之砌、在御蔵建方等之節引受、厚世話

いたし、御蔵床費地分之御年貢、其外御山口引高等数年寸志<sup>二</sup>いたし、奇特之儀<sup>二</sup>付、旁被対御郡代直触被仰付候以後、十九年<sup>二</sup>相成、歩<sup>三</sup>間遠<sup>二</sup>有之候付、地土被仰付候。本行圓助儀、年数前條之通<sup>二</sup>而、右庄兵衛・新次見合<sup>三</sup>年数いまた劣り居候間、申立之趣暫ク可被見合置哉。尤圓助儀、役前心懸能、精勤仕、御境目之所柄示方等行届、人氣<sup>茂</sup>一和仕、外村々目当<sup>二</sup>相成可申哉之唱<sup>茂</sup>有之、早田所・新堤掘方いたし、水保方宜、一稜之養水出来仕候由。且寛政五年去夏津波<sup>二</sup>而、村々難儀之様子及承、寸志差出、連々役方心懸能、出精相勤候付、旁被対御郡代直触被仰付候以来、歩<sup>三</sup>も間遠<sup>二</sup>御座候間、旁年数被縮、明後年<sup>二</sup>至<sup>三</sup>り候得<sup>者</sup>、惣年数四十三年<sup>二</sup>相成申候間、僉議之筋も可有御座哉。

徳右衛門儀、庄屋役以来二十一年<sup>二</sup>相成申候。通例之庄屋<sup>者</sup>二十五年以上、無苗御惣庄屋直触被仰付候見合<sup>二</sup>御座候。徳右衛門儀<sup>者</sup>、年数浅ク候得共、追々沼田新井手水拔之仕法を付、零落立直之一助<sup>二</sup>相成候由。書面之通<sup>二</sup>有之候功業<sup>二</sup>よつてハ、年数被縮被賞候見合<sup>茂</sup>御座候間、徳右衛門儀心懸厚、精勤仕、功績<sup>茂</sup>有之候間、別段を以、無苗御惣庄屋直触可被仰付哉。

右付札之通、六月十七日達

覚

郡浦手永<sup>二</sup>而、松浦圓助列兩人、別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候處、左之通御座候。

御郡代直触<sup>二</sup>而戸馳村庄屋

松浦圓助

右<sup>者</sup>役前心懸能、精勤仕候由。且数代家筋、殊<sup>二</sup>御国境<sup>二</sup>而所柄手厚示方等行届、人氣<sup>茂</sup>一和仕、外村々目当<sup>二</sup>相成可申哉之唱<sup>茂</sup>承申候。且又新堤掘方其外勤年数等、委細本紙之通<sup>二</sup>見聞仕申候。

石橋村庄屋

徳石衛門

右<sup>者</sup>頭百姓以来数十年手全出精いたし候由。本紙之通相聞、庄屋役申付相成候以来、追々沼田新井手水拔之仕法付候畝数太様四拾町程、石橋・神山兩村之内有之、蕎麦出来いたし、神山村<sup>者</sup>次第<sup>二</sup>成立之様子相聞、其外委細書面之通<sup>二</sup>承申候。右見聞仕候趣、御達申上候。以上

辰

五月

村田市郎助<sup>印</sup>

一三六 北野安右衛門

(九一二二)

御内意之覚

宇土町見<sup>抄</sup>・同所人馬所横目<sup>并</sup>御制度格別見<sup>抄</sup>兼帯・地土

北野安右衛門

右安右衛門儀、手全成もの<sup>二</sup>付、追々数役兼勤申付置候。然処宇土人馬所横目役之儀ハ、時<sup>二</sup>より他邦之人応対も有之、宇土之御

家中をも受居候町内旁<sup>二</sup>付、竹杖<sup>二</sup>而無之候<sup>而者</sup>、町廻同様<sup>二</sup>而際立不申、自然と不<sup>レ</sup>之筋<sup>二</sup>も成行申候間、追々之御見合を以、在勤中一領一疋<sup>二</sup>被仰付被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被成御參談可被下候。以上

辰

二月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

安右衛門儀、達之通<sup>二</sup>而、寛政十二年十二月御郡代直触江口儀兵衛と申者、宇土町人馬所横目役、在勤中一領一疋格被仰付候<sup>二</sup>付、右之見合を以、安右衛門儀も、宇土町人馬所横目役、在勤中一領一疋格可被仰付哉。

右付札之通、六月十九日達

一三七 北野甚右衛門 他

(九一三二一)

覚

宇土人馬所横目役之面々、以前より之段式等、相しらべ書上可申旨、奉得其意候。左之通<sup>二</sup>御座候。

北野甚右衛門

右者無苗<sup>二</sup>而、馬瀬村庄屋役相勤居申候処、天明元年在勤中一領壹疋格<sup>二</sup>被召出、宇土郡井樋方助役被仰付、老極仕候<sup>二</sup>付、寛政三年御断申上候処、井樋方助役<sup>者</sup>御免被仰付、宇土人馬所見拟役被仰付候事。

江口儀兵衛

右者御直触<sup>二</sup>而、松山手代役被仰付置候処、寛政十年手代役者、御免被仰付、同十二年宇土人馬所横目役被仰付、在勤中一領壹疋格被仰付候事。

井上甚平

右者唐物拔荷改方御横目・御手附横目兼帯、在勤中諸役人段被仰付置、文化二年宇土人馬所横目役当分被仰付候事。

井上甚次

右者文政四年父甚平五十年余之勤勞旁被為対、諸役人段<sup>二</sup>被召出、唐物方御横目・御手附横目・人馬所横目役を<sup>茂</sup>兼帯被仰付候事。

井上育太郎

右者井上甚次第<sup>二</sup>而、在勤中一領壹疋<sup>二</sup>て、塘方助役・人馬所横目役被仰付置候処、去年在勤中諸役人段<sup>二</sup>被仰付、唐物方御横目・御手附横目役等被仰付候事。

右之通<sup>二</sup>御座候間、宜敷被仰付可被下候。以上

辰

正月

松山権兵衛

清成八十郎殿

右山貞助

付札也

右者文化三年親跡一領一疋<sup>二</sup>被召出、直<sup>二</sup>宇土町見拟役被仰付、同四年宇土人馬所<sup>并</sup>町会所見拟役をも兼帯被仰付候事。

御内意之覚

宇土町居住・地士

安谷庄三郎

右庄三郎儀、松山手永各別難波<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、鳥目式貫目寸志差出、天明三年無苗御郡代直触<sup>二</sup>被仰付、同手永笠岩村御開石垣御普請<sup>并</sup>荒地開明入目之内、鳥目式貫目寸志差出、寛政六年作紋御上下一具被為拝領、御上金之節、錢式百目寸志差出<sup>并</sup>同手永村々為取救米寸志<sup>二</sup>差出、同七年御間御聞届之被及御達、同九年一統御僉議之趣有之、苗字御免・御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付、御才覚銀三貫七拾五匁寸志差出、文化元年地士進席被仰付、尚作紋御上下一具被為拝領、格別寸志錢百八拾目差出、享和二年御間御聞届之被及御達候。

一 龍ノ口御屋敷御類焼<sup>二</sup>付、文化三年錢式貫目寸志差出、おろしや御手当米四石八斗代四百六拾五匁、同六年右同断、<sup>二</sup>稜合式貫四百六拾五匁<sup>者</sup>、追<sup>而</sup>繼目之節被立下候段、同八年被及御達置候。

一文政三年日光 御手伝<sup>二</sup>付、錢式拾五匁寸志差出置申候。

一同八年立岡堤御普請之節、諸手永出夫為元氣付、酒三斗代錢<sup>二</sup>して、四拾八匁、右同断。

一同九年遊行上人通行之節、下宿相勤、取繕入目錢御作事所御役人積前式百九拾六匁分、自勤作事を以、右同断。

一同十二年関東筋川々御普請御用 御手伝<sup>二</sup>付、錢三拾目、右同断。

右之通<sup>二</sup>而、地士進席被仰付候以後、烏乱者見拟申付置、其外地士当前之御奉公、臨時之御用等出精仕、無苗御郡代直触以来当年迄都合五十一年相勤申候処、最早老極仕候間、乍恐御奉公御断申上度段、願出候<sup>二</sup>付、承糺候処、相違<sup>茂</sup>無御座候間、願之通被成御免、五十年余之勤方且日光<sup>并</sup>関東筋川々御普請御手伝<sup>二</sup>付、兩度之寸志、立岡堤・遊行上人通行之節、出錢等都合四百目之儀も、乍聊奇特之儀<sup>二</sup>付、被取結相応<sup>二</sup>被賞被下候様。

右安谷庄三郎倅

安谷太蔵

当辰四十六歳

右太蔵儀、惣躰手全成もの<sup>二</sup>而、筆算も仕、武芸も数々心懸出精仕、相伝等相濟居も有之、委細別紙之通<sup>二</sup>而、向々想心之御用<sup>二</sup>茂相立可申候間、父代御才覚寸志倡立候節ハ、先同役共より合置候筋<sup>茂</sup>御座候間、旁太蔵儀父同様地士相統被仰付被下候様。

一 前条庄三郎より差出置候寸志之内、追々繼目<sup>二</sup>可被立下段、御達<sup>二</sup>相成居候分<sup>者</sup>、追<sup>而</sup>太蔵跡繼目之節<sup>二</sup>被立下候様。

宇土町居住、御郡代直触、馬医

守田柳平

右柳平親平作と申者、宇土御牧馬医被仰付置、兄平十郎<sup>江</sup>も親跡御牧馬医被仰付、相勤居候処、宇土御譜代<sup>二</sup>被召抱候<sup>二</sup>付、天明二年其跡直<sup>二</sup>右柳平儀、馬医相統仕候。右之通亡父以来数十年御牧馬療治方自勤<sup>二</sup>而、心懸相勤候<sup>二</sup>付、寛政六年町役差免、其後尚被賞、享和元年無苗御惣庄屋直触<sup>二</sup>被仰付、弥以御牧御用入念相勤、近郷作馬療治方手広出精仕、龍ノ口御屋敷御類焼之節、百

五拾目且御才覺寸志四百拾匁、都合五百六拾目差出、文化五年苗字・刀御免・御郡代直触<sub>二</sub>被仰付候。

中野吉兵衛

一文政三年日光御手伝寸志貳拾五匁差出置申候。

一同八年立岡堤掘添之節、諸手永出夫為元氣付、酒貳斗代三拾貳匁寸志<sub>二</sub>差出置申候。

一同十年宇土町出火之節、焼失之者共為見舞、鳥目貳拾五匁差出置申候。

一同十二年関東筋川々御普請御手伝寸志三拾目差出置申候。

右之通<sub>二</sub>而御牧方御用を始、近郷作馬等療治方手広出精仕、難澁者共<sub>一</sub>江者<sub>一</sub>施薬<sub>一</sub>有之、天明二年より当年迄都合五十一年、無懈

怠出精相勤居候処、最早及老年、御牧御用等勤兼申候間、乍恐御奉公御断申上度段、願出候<sub>二</sub>付、承繕候処、相違<sub>一</sub>無御座候間、願之通被成御免、五十年余之勤勞且追々之寸志、乍聊奇特之儀<sub>二</sub>付、取結相應<sub>二</sub>被賞被下候様。

右守田柳平悱  
守田豊吉  
当辰三十六歳

守田豊吉

当辰三十六歳

右豊吉儀、惣躰手全成もの<sub>二</sub>而、馬医家伝之稽古<sub>一</sub>者不及申、外科<sub>一</sub>福間慶廸門弟<sub>二</sub>而、再春館<sub>二</sub>も折々罷出、巻木綿其外療治方、心懸能出精仕居申候。文化九年御牧御用代勤<sub>一</sub>并御普請方御用之節も罷出度、願出候<sub>二</sub>付、願之通申付、追々出役仕、近郷作馬療治方

手広出精仕、一簾為合<sub>二</sub>相成、且父代御才覺寸志<sub>一</sub>差出置、右寸志倡候節<sub>一</sub>者、前条同断<sub>二</sub>付、旁<sub>二</sub>被对、父同様御郡代直触相統被仰付、御牧馬医被仰付被下候様。

松山手永築籠村居住、御郡代直触

右吉兵衛儀、天明四年松山会所小頭申付、寛政八年根拟役申付、文化三年役方数年心懸能、所々御普請等之節、厚ク心を用、笹原新地石垣之儀<sub>一</sub>者、尚別段之仕法を付、積前より余分<sub>二</sub>出来、抜群出精相勤候旨<sub>二</sub>而、被賞、無苗御惣庄屋直触<sub>二</sub>被仰付、御才覺寸志錢壹貫六百四拾目差出、同五年被賞、苗字・刀御免・御郡代直触被仰付、同十一年病氣<sub>二</sub>付、願<sub>二</sub>よつて根拟役差免、数十年手全<sub>二</sub>精勤いたし候<sub>一</sub>付、支配錢之内を以、金子貳百疋差遣候。然

処最早及老年候<sub>二</sub>付、御奉公御断申上度願出候<sub>二</sub>付、承紮候処、老極相違<sub>一</sub>無御座候間、願之通被成御免被下候様。

右吉兵衛悱<sub>二</sub>而、宇土御知行所築籠・江部両村庄屋  
中野源八  
当辰四十六歳

中野源八

右源八儀、享和二年祖父跡築籠村庄屋申付、文化五年松原村庄屋兼帯申付、相勤居候処、病氣差免、依願、同八年松原村庄屋兼帯

者<sub>一</sub>差免、築籠村迄相勤居候処、文政十一年江部村庄屋兼勤申付、当年迄都合三十一年出精相勤、文政五年村方勸農筋、兼々厚ク心を用、年々刈揚地起等、一卜際手早ク御年貢米等、速<sub>二</sub>皆済仕候旨<sub>二</sub>而、被賞、七百町御新地<sub>一</sub>并立岡堤掘添等之節、追々被賞、鳥目

被為拝領、宇土方よりも勸農筋心配之儀、且御年貢米早皆済、又ハ高地片付兼候節、取計筋宜、或ハ上畝出来、水害・凶作等<sub>二</sub>付、心配いたし候節々被賞、鳥目被下置候儀、数十度有之、惣体

築籠・江部両村之儀<sub>一</sub>者、田方一式之上、毎歳程<sub>二</sub>水害を受、從

從

松山手永築籠村居住、御郡代直触



前々零落難渡之所柄<sup>二</sup>而、高地片付兼、年々御難題迄<sup>二</sup>罷成、先年来追々反別御心付米等、年限を以奉願候村方<sup>二</sup>而御座候処、源八儀已前より大高相賄、昼夜勸農方<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、種々工面を尽、肥シ・手入之時候を考、少<sup>茂</sup>手抜無之様取計、田根付之儀<sup>茂</sup>、次第<sup>二</sup>時候引揚ケ、自身野面<sup>二</sup>罷出、作子等引廻シ、出精仕、村方を相倡候<sup>二</sup>付、年々取実<sup>茂</sup>相増、近年御損引<sup>茂</sup>不奉願、彼是勸農筋一村<sup>二</sup>行届、近村<sup>二</sup>も、右之風儀を移シ、精農之者も多ク相成候程之儀<sup>二</sup>而、已<sup>二</sup>去ル子ノ秋八月九日大風<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、一統風損強キ内、築籠村之儀<sup>者</sup>、太唐重モ<sup>二</sup>作廻候所柄<sup>二</sup>候処、都<sup>而</sup>右大風以前<sup>二</sup>收納相濟、一統之風災を免レ候儀等、全ク源八兼々勸農筋倡立候功驗之一ツ<sup>二</sup>而、其外近年築籠村御年貢米、年々八・九月迄<sup>二</sup>皆納仕候処より外村々迄も引立、上納一統差急候様相成、宇土向大坂御登米之御都合能相成候由<sup>二</sup>而、旁一稜上下之為合<sup>二</sup>相成、彼是心懸厚ク数十年精勤仕候間、父代御才覚寸志倡候節<sup>者</sup>、前条同断之合も御座候<sup>二</sup>付、此節御郡代直触相統被仰付、庄屋役年功・勤勞之儀<sup>者</sup>、別段被賞、作紋御上下一具被為拜領被下候様。右之通夫々被仰付被下候様有御座度、於私奉願候条、宜被成御参談可被下候。已上

辰

四月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

御尋<sup>二</sup>付申上覚

私儀及老衰、御奉公御断奉願候処、勤年数并御賞美筋等、御惣庄

屋より申立<sup>二</sup>相成候書面之趣、相違有無御問合之趣奉承知候。右<sup>者</sup>書面之通相違無御座候間、宜敷被仰達可被下候。

一 倅太藏儀、武芸稽古附、左<sup>二</sup>一書を以申上候。

一 薙刀之儀、宇土御家中渡並素内殿門弟<sup>二</sup>而、先意流稽古仕申候。

一 捕手之儀、右同武藤傳兵衛殿門弟<sup>二</sup>而、天下無双流稽古仕、当二月目錄相伝仕居申候。

一 炮術之儀、右同林原半次殿門弟<sup>二</sup>而、有馬流稽古仕申候。

右之通御座候間、則師役衆より之書附相添、御達申上候。尤炮術先生之儀<sup>者</sup>、古人<sup>二</sup>相成申候<sup>二</sup>付、書附出来不仕候間、宜被仰達可被下候。以上

天保三年四月

安谷庄三郎<sup>印</sup>

井上育太郎殿

庄三郎儀、達之通<sup>二</sup>付、願之通地土可被成御免哉。

但日光<sup>并</sup>関東筋御手伝御用寸志且立岡堤堀添、遊行上人

通行之節、下宿取繕、入目銭等、都合四百目差出候由<sup>二</sup>付、右之趣ハ御間承届之及達可申哉。

太藏儀、達之通<sup>二</sup>而、父地土被仰付候節<sup>者</sup>、御才覚銭寸志有

之、御郡代より誘立之節含被置候筋有之候由。右寸志<sup>二</sup>限

達<sup>二</sup>よつてハ、二代迄親同様被仰付候見合有之候間、太藏

儀、達之通親同様地土可被召出哉。

但父代継目寸志差出置候分ハ、達之通<sup>二</sup>而、追<sup>而</sup>太藏

目之節<sup>二</sup>被立下候段、及達可申哉。

柳平儀、達之通<sup>二</sup>付、願之通御郡代直触可被成御免哉。

但日光<sup>并</sup>、関東筋御手伝御用寸志且立岡堤堀添、宇土町焼失<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、取救等付、追々鳥目等差出候由<sup>二</sup>付、右之趣

ハ、御間承届之及達可申哉。

豊吉儀、達之通<sup>二</sup>而、父御郡代直触被仰付候節之寸志之内

ニ、御才覚銭有之、御郡代より誘立之節、含被置候筋有之候由。右寸志<sup>二</sup>限、達<sup>二</sup>よつてハ、二代迄<sup>者</sup>親同様被仰付

候見合有之候間、達之通御同様御郡代直触可被仰付哉。

吉兵衛儀、達之通<sup>二</sup>付、願之通御郡代直触可被成御免哉。

源八儀、達之通<sup>二</sup>而、父御郡代直触被仰付候節ハ、御才覚

銭寸志差出、御郡代より誘立之節、含被置候筋有之候由。

右寸志<sup>二</sup>限、達<sup>二</sup>よつてハ、二代迄親同様被仰付候見合有

之候間、達之通親同様御郡代直触可被仰付哉。

但源八儀、庄屋役当年迄三十一年<sup>二</sup>相成、築籠・江部兩

村之儀、水害を請、従前々零落難渋之所柄<sup>二</sup>候処、勤能

方無手拔取計、一村<sup>二</sup>行届、近村<sup>二</sup>茂風儀を移、精農之

者<sup>茂</sup>、多相成候程之儀<sup>二</sup>而、御年貢米年々速皆納仕候処よ

り外村々迄<sup>茂</sup>引立、上納一統差急候様相成、彼是心懸

厚、精勤いたし候付、役方年功・勤勞之儀<sup>者</sup>、別段被

賞、作紋上下一具被下置候様申立有之候得共、其身御郡

代直触<sup>二</sup>而、庄屋相勤候者<sup>二</sup>者、別段功業被賞候<sup>而</sup>ハ、作

紋上下<sup>茂</sup>被下置たる見合<sup>茂</sup>有之候へ共、源八儀<sup>者</sup>、御郡

代直触之悴<sup>二</sup>而、庄屋役ハ相勤居候付、作紋上下ハ宜敷

過可申候間、鳥目<sup>二</sup>貫文程も可被下置哉。

右付扎 覚之通、七月廿日達

松山手永<sup>二</sup>而、安谷庄三郎列六人、別紙之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、左之通

宇土町居住、地士

安谷庄三郎

右庄三郎悴

安谷太蔵

右庄三郎老極<sup>二</sup>及、御奉公難相勤段、無余儀様子<sup>二</sup>相聞、悴太蔵儀、武芸心懸候次第共、委細本紙書面之通相聞、人柄・行状異候儀、相聞不申候。

宇土町居住、御郡代直触・馬医

守田柳平

右柳平悴

守田豊吉

右柳平儀、数十年御牧馬医心懸能、出精いたし、最早老極<sup>二</sup>及、難相勤段、無余儀様子相聞、悴豊吉儀、家伝之馬医<sup>并</sup>外科を<sup>茂</sup>、出精いたし、所柄弁利<sup>二</sup>茂相成候由。委細本紙書面之通相聞申候。

松山手永築籠村居住 御郡代直触

中野吉兵衛

右吉兵衛悴

中野源八

右吉兵衛、年数精勤之次第、且近年老年<sup>二</sup>及、難相勤段、無余儀様子<sup>二</sup>相聞、悴源八儀、数十年庄屋役心懸厚、村方勸農筋相誘、万端出精相勤候次第共、委細本紙書面之通相聞申候。

右見聞仕候趣、御達申上候。以上  
辰

五月

村田市郎助<sup>㊦</sup>

一三九 門田寿吉郎

(九一三一一)

御内意之覚

宇土町居住・御郡代直触

門田寿吉郎

右者享和二年親代寸志之訳<sup>二</sup>被対、苗字・刀御免、御郡代直触被仰付、且先年御才覚錢寸志差出、式人扶持被下置候処、其後之寸志、左之通

一 錢四貫目

但関東筋川々御普請御用御手伝<sup>二</sup>付、本行之通

一 同貳貫目

但窮民御取救寸志、本行之通

合六貫目

右之通寸志差出申候処、寿吉郎儀、惣体宇土町居住<sup>二</sup>而者御座候得共、兼<sup>而</sup>武芸等心懸厚、稽古之次第、左之通

一 薙刀先意流、宇土家中渡並素内門弟<sup>二</sup>而、目錄相伝仕居申候。

一 鎌無極心流、右同人門弟<sup>二</sup>而稽古仕居申候。

一 捕手天下無双流、同家中武藤伝兵衛門弟<sup>二</sup>而、目錄相伝仕居申候。

一 鎗宝蔵院流、同家中菅清門弟<sup>二</sup>而、稽古仕居申候。

一 炮術有馬流、同家中林原半次門弟<sup>二</sup>而、右同断。

一 劍術巖流、同家中藤竹文右衛門門弟<sup>二</sup>而、右同断。

右之通、数々稽古仕候内、二稜者目錄相伝仕居申候。惣体松山手永之儀、一領一疋手少ク御座候間、御手伝寸志之節、在中之規矩合を以、四貫目<sup>二</sup>而一領一疋進席之筈を以、倡置候由之処、町方之儀者<sup>者</sup>誤違候御模様<sup>二</sup>付、尚去年窮民御取救寸志相倡、都合右之錢辻差出、奇特之もの<sup>二</sup>付、準五ヶ町<sup>二</sup>而一領一疋之席者、御見合<sup>者</sup>無御座御模様之由<sup>二</sup>者御座候得共、前条之通、松山手永一領一疋手少ク、必多度御用差支<sup>二</sup>相成、寿吉郎儀者、武芸等心懸、御軍役も相応<sup>二</sup>用意仕居候もの<sup>二</sup>付、旁<sup>二</sup>被対、別段之御僉議を以、一領一疋<sup>二</sup>進席被仰付被下候様有御座度、於私重疊奉願候条、官被成御參談可被下候。已上

辰三月

清成八十郎

御郡方

御奉行衆中

覚

宇土町居住、御郡代直触

門田寿吉郎

右身分別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、武芸之儀、多年心懸能、出精いたし、目錄相伝之様子、且差出候寸志高等之儀、委細本紙之通相聞申候。以上

辰

四月

野田恒助<sup>㊦</sup>

寿吉郎儀、達之通父代寸志之訳<sup>二</sup>因<sup>而</sup>、苗字・刀御免之御

郡代直触被仰付置候。然処宇土町居住之者、寸志<sup>二</sup>而町別

当列・町独礼或苗字・刀御免・御郡代直触土席浪人格等被

仰付候見合ハ有之候得共、地侍一領一疋等被仰付候例ハ、

相見へ不申候。尤同町別当之内、勤勞<sup>二</sup>而ハ、苗字御免・

御惣庄屋直触、又ハ地侍被仰付たる見合<sup>者</sup>有之候。且又寿

吉郎寸志高六貫目<sup>二</sup>而、無苗之町御奉行直触より一領一疋

進席之規矩<sup>二</sup>相当、苗字・刀御免之者より、右進席之見合

<sup>二</sup>者、余分御座候。其上武芸も心懸能、<sup>二</sup>事者目録相伝い

たし、松山手永之儀、一領一疋少ク御用差支<sup>二</sup>も相成候

趣、書面之通<sup>二</sup>而、在町之儀ハ五ヶ町とハ違、前文之通別

当勤勞<sup>二</sup>而、地侍被仰付たる見合も有之程之儀<sup>二</sup>付、旁別

段を以、達之通寸志之訳<sup>二</sup>被对、巷領一匹に被仰付哉。如

何程<sup>二</sup>可有御座哉。

右付礼之通、十二月五日達

一四〇 林七

(九一三二二)

御内意之覚

郡浦手永長濱村

一錢五百目

林七

但当月民力強寸志依願被召上候<sup>二</sup>付、夫々上納相濟申候

間、小脇差・傘・菅笠等、御免被仰付被下候様。

右<sup>者</sup>民力強として寸志錢指上申度、奉願候処、願之通被召上候

付、夫々上納相濟申候間、御賞美筋之儀、前条但書之通被仰付被

下候様、於私奉願候。此段可然様被成御參談可被下候。以上

天保三年閏十一月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

林七儀、達之通<sup>二</sup>而寸志高見合之規矩<sup>二</sup>相当申候間、小脇

差・傘・菅笠可被成御免哉。

右付礼之通、十二月五日達。

(天保四年)

一四二 松山権兵衛

(九一三二三)

覚

松山手永御惣庄屋

松山権兵衛

右身分別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、左之通御座候。

一布田会所詰以來、諸御用筋心懸能、出精相勤、別<sup>而</sup>勤農方<sup>二</sup>付而

者、厚心配いたし、谷在村々誘方之儀<sup>者</sup>、当時頭然と相見居候儀

者、相聞不申候得共、山越四里余之道程、必多度罷越、村々小前

<sup>二</sup>茂巨り、深切<sup>二</sup>相論候様子<sup>二</sup>而、一躰風儀も改り、漸々成立<sup>二</sup>基

キ候様子<sup>二</sup>相聞、且又高森町步入所御用掛中、從來之縛筋引扱候

<sup>二</sup>付而者、諸帳面之しらへ彼是種々心配いたし候趣等、本紙之通

相聞申候。

一新道立之内岩坂村掛り道立之儀<sup>者</sup>、見込之通至極村方得弁理を候

由之處、北向山新道之儀<sup>者</sup>、山中嶮岨之所切開、彼是太造之御普請道立<sup>者</sup>、夫々成就いたし候得共、全躰絶壁中央之道立<sup>二</sup>、崖崩、拔石等仕、殊<sup>二</sup>冬内<sup>者</sup>氷り<sup>茂</sup>強久、別<sup>而</sup>荷馬等<sup>者</sup>牽通候<sup>二</sup>、茂心遣仕候由<sup>二</sup>、御米払等多ク<sup>者</sup>、立野通りいたし候様子<sup>二</sup>、根元右道立之儀<sup>者</sup>、谷在村々<sup>者</sup>、都<sup>而</sup>程<sup>二</sup>通路之見込<sup>二</sup>相成居候由之處、右之次第<sup>二</sup>付、最初見込程<sup>二</sup>得弁理を不申由、尤三久木野・二子石村<sup>者</sup>、道掛り<sup>茂</sup>宜相成、一稜為合<sup>二</sup>相成候様子<sup>二</sup>承り申候。

一 錦野村養水磧御普請<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、村方出銀誘等、厚心配いたし候段者、書面之通相聞、尤村出銀七貫目余と有之候内、式實目程<sup>者</sup>年賦返納<sup>二</sup>、会所御用錢之内より振替<sup>二</sup>相成居候由、然処去年凶作<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、返納年延願を<sup>茂</sup>いたし候様子<sup>二</sup>、以往返納方之儀<sup>茂</sup>見込付兼居候趣<sup>二</sup>、内輪<sup>二</sup>而<sup>者</sup>、寸志誘方等之心配いたし居候様子<sup>二</sup>相聞申候。

一 別紙申立外<sup>二</sup>布田会所詰以来、同手永河後田・長野・喜多右三ヶ村掛り<sup>二</sup>、數ヶ所之新堤追々<sup>二</sup>築方被仰付候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、主<sup>二</sup>成り出精いたし候様子<sup>二</sup>、石堤水掛<sup>二</sup>、都合七町余之上畝物等出来仕居候由、右之外一昨年洪水跡田畑荒地起しらへ、且布田・高森両手永内<sup>二</sup>、所々新堤御普請等<sup>二</sup>付、出精心配いたし候段者、委細申立之通相聞申候。

右<sup>者</sup>松山権兵衛功業筋見聞仕候處、前条之通<sup>二</sup>相聞、惣躰手全成人物<sup>二</sup>、一躰心懸厚ク、諸事吞込<sup>茂</sup>宜、別<sup>而</sup>勸農方等之儀<sup>者</sup>、深切<sup>二</sup>相誘候様子<sup>二</sup>、村方氣請も宜、去年松山手永所替引移、即下より種々之災害打重り候末、莫太之拝借返納方等、格別心配い

たし候由、委細<sup>者</sup>本紙申立之通<sup>二</sup>見聞仕候。以上

卯八月

池松善助<sup>〇</sup>

中西弥三次<sup>〇</sup>

御内意之覚

松山手永御惣庄屋

松山権兵衛

右権兵衛儀、文政四年阿蘇南郷手附横目役申付、高森步入所上見拟役を<sup>茂</sup>相勤、同十年布田手永御惣庄屋被仰付、出精相勤居申候處、同十三年松山手永<sup>江</sup>所替被仰付、右手永之儀、無類之難渋所<sup>二</sup>、差寄<sup>者</sup>歩半米等之御備も、累年及不足、三千石余越拝借をも奉願候程之儀<sup>二</sup>、其外諸拝借稜々多、宇土町・松合村火災<sup>并</sup>立岡村堤掘添等之拝借取束候<sup>而</sup>者、五百貫目余之錢高返納之仕法も相立居不申、且救ノ浦・下り松<sup>二</sup>ヶ所之新地、三隅丈八在勤中築立候得共、卒業<sup>二</sup>者至不申、第一入目錢仕、解之筋付置不申内、丈八儀所替被仰付、重立候稜々迄<sup>二</sup>而も、一応権兵衛見亘も付兼、当惑仕候由之處、一先涯分を尽、相勤可申差はまり、昼夜工夫を凝、相勤居申候處、同年四月松合村再三之火災、家数三百三拾五軒及焼失、跡家建方<sup>者</sup>不及申、千五百人余之漁師共、及急飢申程之儀<sup>二</sup>御座候得共、追々之火災にて取救筋<sup>茂</sup>任尽候上之儀<sup>二</sup>、大<sup>二</sup>及当惑候處、種々之取計を以、漸ク急飢<sup>者</sup>凌セ申候得共、難渋之手永<sup>二</sup>御座候得<sup>者</sup>、跡家建方<sup>二</sup>付、御郡出銀も難相成、寸志等を以建方<sup>者</sup>仕候得共、同所之儀<sup>者</sup>、家ぜき之所柄<sup>二</sup>御座候得<sup>者</sup>、又候火災之恐不少、松合村内救之浦<sup>江</sup>家数八十軒程引移、左候<sup>而</sup>、御山内開等奉願、唐芋畑人別に受持セ、其外日用、

時々入用之品々<sup>二</sup>至迄、弁利を付遣申候<sup>二</sup>付、転居仕候者共、安着仕申候。然処右村内<sup>二</sup>而も、七百三十人程飢寒凌兼候<sup>二</sup>付、永年賦<sup>二</sup>而拝借奉願、且衣類不着之者共<sup>者</sup>、富家江申談、衣類配当仕、可也<sup>二</sup>漁業取付申候処、翌卯ノ九月、尚又三十八軒焼失仕、是又種々取計を以、跡家建方仕申候。追々に都合四度之火灾<sup>二</sup>而、人氣も忙然と罷成、心遣之折柄<sup>二</sup>御座候得共、拝借等奉願候<sup>而</sup>も、返納見込無御座、差寄糧物取統之仕法付兼、日々所々より差合等之助を以押移、第一漁業稼方之仕法を付遣可申心配仕候処、同年十月より疫病烈敷流行仕、病人數千八百人余之内式百一人及死亡、惣<sup>而</sup>而火災跡貧民<sup>二</sup>限、相煩候程之儀<sup>二</sup>而及飢候<sup>二</sup>付、御救米拝領且御米拝借奉願、其外寸志等をも相唱、急飢<sup>者</sup>取救申候得共、懸醫師疫疾伝染仕、療治方難相成、手永医師中交代にて療治方仕、且御祈禱をも被仰付漸ク去夏<sup>二</sup>至退除仕誠以度度之災害打重り、既<sup>二</sup>所柄離散之心遣も御座候処、御難題筋<sup>者</sup>願尽候末之儀<sup>二</sup>而、外<sup>二</sup>手段も無御座候処、宇土町居住榎鳴卯兵衛より差出候寸志錢、松合村備<sup>二</sup>被仰付被下候様奉願、先此一条を以、人別申論候<sup>二</sup>付、いづれも漁業渡世<sup>二</sup>仕付申候。

一 立岡堤掘添<sup>二</sup>付<sup>而</sup>も、百三拾貫目余之錢高拝借仕、右掘添、費地御年貢米五拾四石余償米共<sup>二</sup>取立方、内輪熟シ兼居候筋御座候<sup>而</sup>、持扱重疊手を尽、漸取調、往々違乱無之様、取行出来仕申候。

一 松山手永田方之儀、干田之畝方勝にて、越拝借之壹歩半米返納之筋無之而已ならず、以往手永限独立之仕法無御座候に付、村々人別右独立之次第、重畳委敷申論、田畝壹反<sup>二</sup>付式合宛<sup>并</sup>費地開明

徳米等、備方之仕法を付、近年右備米より御心付を以取計、去夏非常之干魃<sup>二</sup>も御損引<sup>二</sup>至不申、其上越拝借分も究通返納出来仕、年々少々宛相殘備申候。

一 村<sup>二</sup>寄作地少キケ所<sup>江者</sup>、新畑・新野開等奉願、御救恤御備、又<sup>者</sup>御郡方上納をも被仰付、床地之儀<sup>者</sup>櫛方御仕立場奉願、種々取計仕、村々競付、大略開明且櫛木を<sup>茂</sup>次第<sup>二</sup>植付申候。

一 下り松新地之儀、権兵衛所付被仰付候砌、御普請六・七歩通出来仕居、其後春秋寄夫を以、塘手<sup>并</sup>井樋舟江等、追々出来仕、開明之儀、專心配仕居申候。

一 追々之諸上納、村々相滞居申候処、數ヶ条之稜々、夫々筋を付申候<sup>二</sup>付、以来<sup>者</sup>其年限に取行出来仕申候。

右之通重立候稜々、大略書面之通<sup>二</sup>御座候得共、手永中村々<sup>二</sup>巨候<sup>而者</sup>、種々取計候儀も御座候<sup>而</sup>、是迄之心配不一形、兼<sup>而</sup>於村々<sup>者</sup>、農事之遲速を糺、勸農方格別相唱、追<sup>而者</sup>、壹歩半米御備を<sup>茂</sup>相増、請免独立可仕と奉存候。惣躰新地・新井手等、人之耳目<sup>二</sup>立候程之事業<sup>者</sup>、御惣庄屋以下末々在役之者<sup>二</sup>至迄、競を得、差はまり、精勤も仕候得共、地場之仕事<sup>者</sup>心配丈ヶ之験も見<sup>へ</sup>兼進兼候情態も有之候処、別<sup>而</sup>松山手永之儀<sup>者</sup>、前条之通<sup>二</sup>而、下地無類之零落、殊<sup>二</sup>種々之災害差湊、拝借高も莫太<sup>二</sup>有之、加之手永不相応之大仕事も有之、彼是類外之事而已打重候末を取治候儀<sup>二</sup>御座候得<sup>者</sup>、誰人厭候情態<sup>二</sup>成行可申候処、権兵衛儀、毛頭其儀無之、前条之通昼夜差はまり、精勤仕候<sup>二</sup>付、会所役人を初、庄屋・村役人<sup>二</sup>至迄被引立、成立之筋專一に精勤仕候<sup>二</sup>付、只今通永続仕候ハ、無類之零落手永<sup>二</sup>御座候得共、往々<sup>者</sup>成立之期も可有御座、一稜之儀と奉存候。且又於布田手永在勤中

稜々功績も御座候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、阿蘇同役より御賞美申立置候様子<sup>二</sup>御座候間、両手永功績御取結被下、乍恐自分苗字御免被仰付、尚御知行拾石増被下候様、於私重疊奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御参談可被下候。以上

已

五月

御郡方

御奉行衆中

中嶋九郎左衛門

覚

松山手永御惣庄屋

松山権兵衛

右身分之儀、別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、松山手永之儀<sup>者</sup>、所謂零落所<sup>二</sup>而、権兵衛所替被仰付候後、種々心配仕候稜々之内松合村追々火災四度之内、三度目より以後、兩度之焼失<sup>者</sup>、権兵衛松山<sup>江</sup>、転所被仰付候後之由<sup>二</sup>而、右一件<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、御取救筋を初跡家造渡、且救ノ浦<sup>江</sup>家直シ方一件引続、疫疾流行等<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、不一方心配、骨折仕候由。将又同手永之儀、所々新地等、大造之御普請等<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、先役代莫太之拝借錢返納取究方心勞いたし、夫々筋を付ケ取堅候由。且又近年請免独立之御仕法被仰付候<sup>而</sup>者、田畝懸り米、費地開明徳米備方之仕法を付候<sup>二</sup>付、近年<sup>者</sup>御損引不奉願、右御備を以、御心付等之取計<sup>二</sup>而相濟候由。惣躰権兵衛儀、氣厚キ生質<sup>二</sup>而、諸事心を用、就中勤農方之儀、精密<sup>二</sup>相倡候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、未松山在勤<sup>者</sup>年浅ク有之候得共、示方<sup>茂</sup>行届候様子<sup>二</sup>而、一鉢之唱宜敷、其外作地少キ村々<sup>江</sup>者、新野開等奉願、

一稜之為合<sup>二</sup>相成候儀等、委細本紙申立稜々之通、相聞申候。以上

已

六月

野田恒助<sup>㊦</sup>  
岡田権兵衛<sup>㊦</sup>

松山御惣庄屋

松山権兵衛

右<sup>者</sup>、文政十年布田御惣庄屋被仰付、同十三年松山<sup>江</sup>所替被仰付候処、右手永之儀<sup>者</sup>、無類之難浚所<sup>二</sup>而、莫太之諸拝借等も有之候処、夫々返納之仕法を付ケ、松合村数度之火災、其中<sup>二</sup>疫病流行仕、凡千八百人程相煩、及飢渴候処、種々工夫を凝、成立之仕法を付、昼夜差はまり、勸農方相倡、追々とハ受免独立之心懸も有之、其外御郡代達之通相違無之、且示方行届、一体唱<sup>茂</sup>宜由、御郡御目附付御横目、書面之通<sup>二</sup>御座候。布田在勤中功業之儀ハ、宇土・南郷御郡代連名<sup>二</sup>而、別紙之通達<sup>二</sup>相成居申候。追々各別之功業と相聞申候間、達之通御知行高拾石被増下、自分苗字御免可被仰付哉。御惣庄屋七ヶ年相勤、年数<sup>者</sup>浅候得共、功業によつて<sup>者</sup>、五・六年目御加増被仰付候見合も御座候。将又権兵衛儀、阿蘇南郷御郡代手付横目之節<sup>者</sup>、自分苗字付居申候処、御惣庄屋被仰付候節、手永苗字<sup>二</sup>被仰付候間、前文之通之功業有之儀<sup>二</sup>付、旁自分苗字御免可被仰付哉。被御存寄無御座候ハ、選挙方<sup>江</sup>差廻可申哉。

御郡方

権兵衛儀、達之通<sup>二</sup>而、功業之趣別冊之通<sup>二</sup>有之候付、自

分苗字被成御免、御知行拾石被増下候様、申立之通<sup>二</sup>御座候付、例吟味仕候処、天保元年八月、槌田勇助錢塘手永御

惣庄屋<sup>二</sup>而、鯨油御買入一件、年々無間抜取計、白金御側蠟抄所御用新地出来御用懸<sup>茂</sup>、格別出精相勤候付、七年目

自分苗字被成御免たる見合有之候得共、御知行増之儀<sup>者</sup>、高三拾石之所柄<sup>二</sup>而も、新夕<sup>二</sup>御惣庄屋被仰付候節ハ、究

之御知行高<sup>二</sup>無拘、先式拾石被下置、追<sup>而</sup>功業次第御知行被増下、手永究之高<sup>二</sup>被仰付筈<sup>二</sup>、先年於御郡方僉議相究

居候付、三拾石之所柄<sup>二</sup>而踏出、式拾石被下置究高<sup>二</sup>被増下候議<sup>者</sup>、六・七年目<sup>二</sup>而、追々見合御座候処、松山手永

之儀<sup>者</sup>、究高式拾石之所柄<sup>二</sup>付、右之見合<sup>二</sup>者難被仰付可有御座哉。年数浅く右究高之外<sup>二</sup>御知行被増下、一同<sup>二</sup>自

分苗字御免なと<sup>二</sup>申儀<sup>者</sup>、見合も無御座、左之例書之通<sup>二</sup>而、三隅丈八抵用手永御惣庄屋以来、松山手永<sup>二</sup>所替被仰

付、九年目自分苗字被成御免、文政八年柏川掘貫一件且七百町新地築立、格別功業<sup>二</sup>よつて、御惣庄屋十三年目独礼

被仰付、御知行拾石被増下候見合御座候得共、本紙権兵衛儀、功業之次第<sup>茂</sup>格別<sup>二</sup>相見申候得共、右丈八<sup>二</sup>比候得

ハ、年数僅七年<sup>二</sup>而、自分苗字御免一同御加増之儀<sup>者</sup>、余り結構過可申哉。追々猶功業積候上、申立之趣次第、僉議

之筋も可有御座哉に付、御知行増之儀<sup>者</sup>、先見合被置、此節<sup>者</sup>自分苗字迄可被成御免哉。如何程<sup>二</sup>可有御座哉。

但権兵衛儀、槌田勇助同様七年目、此節自分苗字御免迄<sup>而</sup>者、輕く相見申候得共、御加増之儀ハ、至<sup>而</sup>重く有

之、中墨を以之御賞美之仕法<sup>茂</sup>無御座、先本文之通相しらへ申候。

再議

本文之通相しらへ申候得共、猶相考申候処、功業格別之者<sup>二</sup>付、自分苗字御免迄<sup>二</sup>而者、輕賞<sup>二</sup>相見申候間、作紋帷子一可被添下哉。

右付礼之通、八月廿五日申渡。

一例書ハ切放シ、例書袋二入置候事。

一四三 大田黒圓右衛門

(九一二一三)

御内意之覺

御惣庄屋直触<sup>二</sup>而、松山手永笹原村庄屋

大田黒圓右衛門

当已八十歳

右圓右衛門儀、安永元年笹原村頭百姓申付、天明四年村横目兼帯申付、寛政元年頭百姓<sup>者</sup>差免、村横目迄相勤居申候処、同十年村横目差免、松山会所小頭申付、享和三年小頭差免、笹原村庄屋申付、相勤居申候処、眼病差起、役儀断願出候<sup>二</sup>付、文化四年庄屋差免申候処、眼病快罷成申候<sup>二</sup>付、同七年庄屋再勤申付、今年迄頭百姓以来、都合六十年精勤仕申候。  
一 寛政五年津波之節、諸御用無間拔出精取計申候<sup>二</sup>付、鳥目三貫文被為拝領候。  
一 文化元年笹原村新地築立之節、下しらへ見分立合、塘手築立且開



明地割等、厚心配仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目彦貫五百文被為拜領候。

一八代七百町新地御築立之節、夫方召連罷出、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目彦貫文被為拜領候。

一文政十年役儀多年心懸能、笹原村新地築立之節、始末出精いたし、入目錢拜借返納相濟、上下一稜之為合且笹原村之儀、水旱兩害を受候所柄、近年新井手等掘浚、厚心配いたし、水害も薄、將又御出御用等、臨時取計無間拔致出精候<sup>二</sup>付、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付候。

一立岡堤掘添<sup>二</sup>付、夫仕其外請込之勤向致出精、杉嶋新川掘替之節を茂、出精相勤候旨<sup>二</sup>而、鳥目彦貫五百文被為拜領候。

右之通頭百姓以来、小頭庄屋共<sup>二</sup>都合六十年手全<sup>二</sup>相勤、且近年追々災害打続、又<sup>者</sup>大水利出夫彼是心配仕、下り松新地築立に付而、出夫小屋詰等仕、出精相勤、惣鉢圓右衛門儀、篤実成者<sup>二</sup>而、平日村方<sup>江</sup>之示方行届、村方一和仕、御年貢・諸出銀等、速相納、一鉢勸農方專心配仕、近年御損引をも不願出、風儀も宜相成、勸農<sup>二</sup>基候以後、零落次第<sup>二</sup>立直、種々心配仕、出精相勤、当年迄六十年精勤仕、最早余命も無之者<sup>二</sup>御座候間、乍恐勤勞旁被賞、御郡代直触被仰付被下候様有御座度、此段於私御内意奉願候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

巳

五月

御郡方

御奉行衆中

覚

中嶋九郎左衛門

御惣庄屋直触<sup>二</sup>而、松山手永笹原村庄屋

大田黒圓右衛門

右身分別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、手全成人物<sup>二</sup>而、役方數十年出精相勤、村方世話筋等行届居候由。追々被賞候稜々、且近年所々夫仕等<sup>二</sup>付<sup>而</sup>も、出精仕候様子、其外勤年數等之儀、夫々本紙之通<sup>二</sup>相聞申候。以上

巳

七月

野田恒助<sup>㊦</sup>

圓右衛門儀、頭百姓已来、今年迄<sup>二</sup>惣年數前後六十年<sup>二</sup>相成、右之内庄屋役三十年相勤申候<sup>而</sup>、文政十年十一月追々功業も有之、惣年數も五十四年<sup>二</sup>相成候間、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付、以後七年<sup>二</sup>相成、猶出精相勤候段、委細書面之儀<sup>二</sup>付、極老之者旁被对、達之通、御郡代直触可被仰付哉。

右付札之通、九月三日為達。

一四四 野田林太郎

(九一三一一三)

御内意之覚

松山手永御山支配役并榎楮見抄役兼帯、

歩御小姓列

野田林太郎

右<sup>者</sup>父野田嶋右衛門、宇土郡松山手永御山支配役被仰付置、父在勤之節、寛政七年卯五月父代役被仰付置、郡浦手永之内慮里・鶴見塚・両新開・網引迄五ヶ村御仕立榎楮見抄役、自勤<sup>二</sup>而相勤、

文化十四年より郡浦手永櫛楮見扨役、兼勤被仰付、文政四年迄五カ年兼帯相勤、文政七年申十二月父跡御山支配役、櫛楮見扨役兼帯被仰付置、都合当年迄三十九ヶ年之内、代役二十九年・本役十年御仕立櫛楮之儀ニ付、心懸厚出精相勤、花櫛老木之類者、接方仕、且松山手永大見村新御場所之儀者、手広所打開方等、茂せり立、櫛苗木植込等ニ茂、主ニ成心配仕、其外新御場所等ニ者、且々植込等仕せ候ニ付、近年御場所茂以前より者、手広相成居申候処、毎年春秋植繼、肥・手入等茂、主ニ成り厚心を用候ニ付、遂年櫛木、繁茂仕、年々余計之成実茂御所務ニ相成、且又御場所手入料拝借返納并櫛実返納共ニ、取立方等茂厚心配いたし候ニ付、滯ケ間敷儀茂無御座、櫛実者年々成実茂相増、一廉御為合ニ相成、櫛実採方等之節者、数十日廻在仕、郡浦手永之内茂五ヶ村請持被仰付置、右之外平日木下開明等之儀ニ付而茂、不絶打廻荒地等無之様ニ、万事心を用心配仕候儀ニ御座候。然処以前父代役之時分被賞、三度ニ金子百足・銀三両・錢三拾五匁、櫛方御銀之内を以被為拝領候迄ニ而、其後被賞候儀茂無御座候間、林太郎儀、未本役之年数者、浅ク御座候得共、代役以来三十九ヶ年、右之通格別出精相勤申候間、此節御別段被賞、作紋麻上下被為拝領被下候様有御座度、於私共奉願候。如願被仰付候ハ、各別出精仕候。功勞茂相願、一統勤方之励合ニ茂相成、於其身者、冥加至極之儀ニ而、難有仕合ニ奉存、弥以出精相勤可申候。左候ハ、往々一廉御為合ニ茂相成可申と奉存候間、何卒御別段を以、宜敷被為及御參談被下候様奉願候。此段御内意御達仕候間、可然様被成御達可被下候。以上

天保四年巳六月

櫛方 御役人共

宗村庄八殿

永広才兵衛殿

前文松山手永御山支配役并櫛楮見扨役兼帯野田林太郎儀、宇土郡松山手永并郡浦手永之内ニ而、惠里村列五ヶ村櫛・楮ニ付而之御用筋親代役より当年迄三十九ヶ年出精相勤申候。且又大見村懸并所々新場所出来ニ付而ハ手広相成開明手入等ニ付而者、御銀拝借被仰付、右一卷林太郎主ニ相成、心配仕、苗木植付已前より有来之場所共ニ植繼、肥・手入并接方等仕候ニ付、及繁茂、年々成実も相増申候儀ニ御座候。尤已前親代役之時分被賞、金子百足・銀三両・錢三拾五匁、都合三度櫛方御銀之用を以、被為拝領候、右之通数ヶ年御為相之儀、厚心配仕、出精仕候間、櫛方御役人中より内意願書相達申候通、此節被賞、作紋麻上一具被為拝領被下候様有御座度奉存候。此段可然様被成御參談可被下候。以上

巳六月

宗村庄八

永廣才兵衛

林太郎儀ニ付、櫛方より申立之書付、夫々委細書面之通ニ付作紋麻上一具可被下置哉。

但拝領方之品代銀ハ、櫛方より御勘定所江立用ニ相成筈ニ付、右被下置候得ハ、直ニ立用之及達申儀ニ御座候。

右付札之九月十七日達。

一字土御郡代中嶋九郎左衛門へ、御吟味役より申上候書付を以相

成候処、存寄無之との返書扣略之。

榎方御役人中

(天保五年)

一四五 江口儀兵衛

(九一三一一三)

御内意之覚

宇土郡御郡代直触末席

中嶋九郎左衛門

江口儀兵衛

右者 去ル文政八年七月父代寸志之<sub>二</sub>被对、御郡代直触末席被仰付置候。然<sub>レ</sub>処諸役人段二代目上繼無之候得<sub>者</sub>、御郡代直触末席被仰付来候<sub>レ</sub>、先年御詮議之旨有之、御郡代直触上席<sub>二</sub>被仰付段、御達之趣<sub>二</sub>付、同年十二月先役より右儀兵衛儀<sub>茂</sub>、取しらへ御達仕置候通<sub>二</sub>御座候<sub>レ</sub>、今以御様子無之候間、急<sub>二</sub>被及御詮議被<sub>下</sub>候様有御座度、奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御参談可被下候。以上

十月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

儀兵衛儀、再達之通御座候<sub>レ</sub>、先年被相達候書付<sub>者</sub>、見へ兼申候。以前八寸志諸役人段二代目<sub>者</sub>、御郡代直触末席<sub>二</sub>被召出来候<sub>レ</sub>、文政八年十月及僉議、御郡代直触上座<sub>二</sub>可被召直と相究、追々御郡代直触末席<sub>二</sub>被召出置候<sub>者</sub>、御郡代願之<sub>レ</sub>訳も有之候ハ、上座<sub>二</sub>可被召置哉と相達至申候付、儀兵衛儀、御郡代直触上座<sub>二</sub>可被召直哉。

右付札之通、十月廿一日達。

一四七 松田三成 他

(九一三二一四)

御内意之覚

宇土町居住、歩御小姓列

松田三成

右者 松合村疫病流行之節、去二月より五月迄、日数十三日出療治<sub>二</sub>罷越申候。

右同町居住、御郡医師神尾三伯養子

神尾三鼎

右者 養父三伯為名代罷越申候<sub>レ</sub>、邪氣伝染仕、打臥申候。

松山手永馬場村居住、御郡代直触

金田龜齡

右同断、二月より四月迄、日数九日罷越申候<sub>レ</sub>、疫邪引受打臥申候。

同手永網津村居住、御郡医師並、西元章倅

西玄甫

右同断、二月より五月迄之日数廿四日輪番無懈怠罷出申候。

同手永佐野村居住、御郡代直触、浦上真寿倅

浦上茂

右同断、二月より五月迄日数十五日罷出申候。

右者 松山手永松合村、去々十月より疫病烈敷流行仕、病人数千八

百人余<sup>二</sup>而、懸醫師之内、兩人<sup>者</sup>病死仕、又<sup>者</sup>相煩、去二月<sup>二</sup>至候而<sup>者</sup>、療治方差支申候<sup>二</sup>付、神尾三伯・拓植桂淳・金田龜齡交代療治仕候処、邪氣伝染仕候間、松田三成列罷越、何<sup>レ</sup>茂<sup>者</sup>兩人宛にて相詰、数十日療治方出精仕、病家之儀<sup>者</sup>小屋懸、片ひさし、土間住居之者も多、二便も居成<sup>二</sup>仕、臭気甚敷御座候由之処、何<sup>レ</sup>も昼夜差はまり、病家打廻、調合等無意出精仕、右様夥敷流行<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、兼<sup>而</sup>之療治懸<sup>リ</sup><sup>二</sup>而も無之、外村<sup>江</sup>出療治相詰候儀<sup>者</sup>、乍医業嫌<sup>レ</sup>可申候、其儀無之、何<sup>レ</sup>茂<sup>者</sup>奇特之者共<sup>二</sup>御座候間、乍恐屹度御賞美被仰付被下候様有御座度奉存候。此段於私御内意奉願候条、夫々宜敷被成御參談可被下候。以上

巳

五月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

覚

宇土町居住松田三成列五人、松合村疫病流行療治方<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、交代<sup>二</sup>而<sup>者</sup>数十日相詰、昼夜之無差別打廻、療治方何<sup>レ</sup>茂<sup>者</sup>出精仕候趣、其外本紙之通相聞申候。以上

巳

七月

野田恒助<sup>㊦</sup>

三成以下五人達之通<sup>二</sup>付、御間承届之及達可申哉。

再議 本行之通<sup>二</sup>而<sup>者</sup>療治方之日数、至<sup>而</sup>淺、拜領方<sup>二</sup>者及不申儀可有之哉と、付紙之通相しらへ申候処、所柄医師いつれも邪氣伝染仕、療治差支候付、交代<sup>二</sup>而<sup>者</sup>罷越候様、御郡代より

及達療治致せ候間、日数ハ浅有之候へ共、別段を以、拜領方被仰付度由、御達之趣も有之、別冊筑紫静寿・井上益敷<sup>二</sup>仕候<sup>而</sup>者、過分<sup>二</sup>相見申候へとも、前文之通<sup>二</sup>付、銀貳兩完可被下置哉。

右付札之通、五月四日達。

一四八 嘉平太、永助 他

(九一三二四)

御内意之覚

松山手永会所小頭

嘉平太

右同

永助

右<sup>者</sup>松合村四度之火災、宇土町火災<sup>二</sup>付<sup>而</sup>も、始末罷出、出精相働、且下り松新地築立、救ノ浦新地波戸築立、又<sup>者</sup>子ノ年海辺潮塘破損之修覆等、彼是格別出精仕申候間、被賞合羽・傘御免被仰付被下候様。

松山会所詰

作右衛門

同

平八

同小頭

弥五兵衛

同

藤兵衛

同

源兵衛

同先小頭

瀬兵衛

右之者共、松合村数度之火災、且救ノ浦新地<sup>并</sup>波戸築立・下り松新地築立<sup>二</sup>も、度毎<sup>二</sup>出役仕、出精相勤申候間被賞、鳥目老貫五百文宛被為拜領被下候様。

松山会所先小頭

仙左衛門

同小頭 喜三郎

同 政次郎

同 眞作

同 九又

同先見習 太蔵

右之者共、右同断之節罷出、骨折仕申候間被賞、鳥目七百文宛被為拜領被下候様。右之通御内意奉願候条。夫々宜敷被成御參談可被下候。以上

巳

五月 中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

覚

松山会所小頭嘉平太列十四人、身分別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候處、松合村数度之火災・宇土町同災、且下松・救浦新地出来等<sup>ニ</sup>付而、何れ<sup>茂</sup>心配いたし、出精仕候趣、夫々本紙之通相聞申候。以上

巳

七月 野田恒助<sup>④</sup>

嘉平太・永助儀、達之通御座候處、年数之儀<sup>茂</sup>、書面<sup>ニ</sup>相見不申、臨時之功<sup>ニ</sup>因而、傘等御免之儀ハ不容易儀<sup>ニ</sup>付、難及僉議、尤格別出精いたし候由<sup>ニ</sup>付、鳥目壹貫五百文宛可被下置哉。  
作右衛門已下瀬兵衛迄六人、達之通<sup>ニ</sup>付斟酌を以、同壹貫文宛可被下置哉。

仙左衛門已下太蔵迄六人、右同断に付、鳥目四百文宛可被下置哉。

右付札之通、五月七日達。

一四九 西山新左衛門 他村々庄屋 (九一三―四)

御内意之覚

松山手永地士<sup>ニ</sup>而 永尾村庄屋<sup>并</sup>松合村庄屋後見兼<sup>一書成也</sup>

西山新左衛門

当已三十六才

右新左衛門儀、去ル文政十二年永尾村持懸<sup>ニ</sup>而、松合村庄屋後見申付、其砌松合村二度目火災跡<sup>ニ</sup>而 粮物取続之仕法、専心配仕居申候處、引続三度目三百三十五軒焼失仕、跡家建方之儀<sup>者</sup>差置、粮物取続之手段、不一形相働候處、跡家建方<sup>ニ</sup>取懸候<sup>ニ</sup>付而も、芦北茂道御山<sup>ニ</sup>も数日相滞、且救ノ浦<sup>江</sup>家数八十軒転居仕セ候<sup>ニ</sup>付而も、小家ながら貫家<sup>ニ</sup>取建、右家直り之者共、漁稼無之砌者、粮物難渋仕候間、櫛方御山開明奉願、唐芋作仕セ、種々心を用、取続之仕法、心配仕居申候處、四度目之火災<sup>ニ</sup>至候<sup>而</sup>者、村方者勿論村役人達も茫然と罷成、家建方之手段も無之仕合<sup>ニ</sup>御座候處、右新左衛門儀、主<sup>ニ</sup>成、世話筋引請、種々工夫を尽、既<sup>ニ</sup>火消備<sup>茂</sup>、暫時<sup>ニ</sup>取立、火事逢之者共、難渋差廻候<sup>ニ</sup>付、先不取敢所持いたし居申候米式俵差出、飢を凌セ申候。將又救浦新地築立之節、村方引連出精仕、開明<sup>ニ</sup>付而も心配仕、同所波戸築方

之節<sup>者</sup>、別<sup>而</sup>骨折、下り松新地築立<sup>ニ</sup>も、右同様厚心配仕、数年之間格別心を用、相働申候間、乍恐被賞、作紋御上下<sup>ニ</sup>尙具被為拜領<sup>ニ</sup>被下候様。

松山手永水夫小頭<sup>ニ</sup>、在勤中御郡代直触、

松合村庄屋

後藤徳之助

当巳三十五才

右徳之助儀、文政十三年松合村庄屋申付、三度目大火後<sup>ニ</sup>、跡家建方最中<sup>ニ</sup>付、取続之世話筋を初、救ノ浦<sup>江</sup>転居仕セ、櫛方御山開明、四度目火災一件格別骨折、右新左衛門<sup>江</sup>引続心配仕、四度目火災之節、所持いたし居申候米尙儀、先持出、急飢を取救、且去々冬より去夏迄、疾病烈敷流行仕候処、及飢不申候様、厚心を用、取計筋能行届、将又救ノ浦新地開明<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、今以心配仕、下り松新地築立<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も、右同様<sup>ニ</sup>御座候間、乍恐被賞、作紋御上下<sup>ニ</sup>尙具被為拜領被下候様。

右同手永大口村庄屋

作右衛門

右作右衛門儀、松合村隣村<sup>ニ</sup>、四度之火災毎<sup>ニ</sup>急速<sup>ニ</sup>惣人数引連駆付、跡家造渡<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も、厚心配仕、救ノ浦新地築立、追々夫方召連罷出、潮留之節<sup>者</sup>、格別相働、子ノ年大風、居村新地塘手被損、跡修覆<sup>者</sup>、昼夜骨折仕、心を用出精相働申候間、乍恐被賞、鳥目式貫文被為拜領被下候様。

右同手永松原村庄屋 当時後見地士

平居武平

右同断下松山村庄屋 御郡代直触

中山直右衛門

右同断小曾部村庄屋 右同

竹馬幾右衛門

右同 江部村・築籠村庄屋 右同断

中野源八

右同 高良村庄屋 御郡簡

関清右衛門

右同 松原村庄屋地士 平居武平悻

平居助次郎

右同 古保里村庄屋 御惣庄屋直触

本川文左衛門

右同 境目村庄屋 無苗御惣庄屋直触

甚兵衛

右同 御領村庄屋

卯平

右同 柏原村庄屋

喜八

右同 三日村庄屋

丈平

右同 佐野村庄屋

次助

右同 上古閑村庄屋

儀平

右同 曾畑村庄屋

右同 馬瀬村庄屋 喜平

喜助

右同 下網津村庄屋

源次郎

右同 笠岩村庄屋当分

利久右衛門

同村 右同

傳兵衛

下網津村先庄屋

喜平

右之者共、松合村数度之火災跡家造渡<sup>ニ付而</sup>、遠路藁繩等持出、夫方引連罷出、心配仕、救ノ浦新地築立且子ノ年風災跡出夫、又者下り松新地築立<sup>ニ付而</sup>も、大造之夫立六七ヶ年打続、格別精勤仕候間、乍恐鳥目壹貫五百文宛被賞、被為拝領被下候様。

松山手永松合村御山口

徳次

大見村 右同

惣平

永尾村 右同

勇平

右同

吉兵衛

笹原・網津両村 右同

伊左衛門

右同断、数度之火災・跡家造渡、竹木御山出<sup>ニ付</sup>、格別骨折且宇土町出火<sup>ニ付而茂</sup>、同様心配仕申候間、被賞鳥目八百文宛被為拝領被下候様。

御郡筒<sup>ニ而</sup>松合村津横目・村横目

俊嶋喜三郎

右村 頭百姓

太四郎

同

茂七

同

平右衛門

同

甚作

組頭

七兵衛

同

源助

組頭

清三

同

喜平次

同

弥平

同

芳松

同

惣七

同

藤四郎

同

十左衛門

同

丈七

同

又次

同村先帳書

惣次郎

同村帳書

伊助

右同

弥助

右之者共、松合村數度之火災、并救之浦新地築立、同所波戸築方、又者救ノ浦江八十軒之家直り、新地開明ニ付而も、格別骨折、且去々冬より去夏迄之疾病流行ニ付茂、不一形心配仕、太四郎儀者為取救、米壹俵差出申候間、何レも乍恐被賞、鳥目壹貫文宛被為拝領被下候儀。

松山手永居住地士

安谷庄次郎

宇土町横目

卯兵衛

御郡代直触、宇土町所惣代

伊勢田茂兵衛

同町本一丁目丁頭

次平

同二丁目丁頭

貞次

同五丁目丁頭并帳書兼

庄兵衛

同三丁目丁頭并帳書兼

長平次

右七人之者共、宇土町出火之節、格別骨折仕、跡家造渡ニ付而も、始末根ニ成候程之儀ニ而、種々心配仕申候間、被賞安谷庄次郎・伊勢田茂兵衛兩人儀者銀貳両、其余五人之者共儀者鳥目壹貫文宛被為拝領被下候儀。

松山手永居住、壹領壹疋

西山新之允

右同

草野安次郎

地士

小林栄次

右同

江本七九郎

同

永井清太郎

同人弟

永井清三郎

御郡代直触

渡邊幸次

御郡簡

井上茂三郎

右者松合村四度之火災、救ノ浦新地築立之節、何レも格別出精骨折申候。且西山新之允儀者、出火之砌為取救米貳俵差出、下り松新地築立之節茂、追々出役仕、草野安次郎儀者、為取救米貳俵、渡邊幸次・井上茂三次儀者、米壹俵宛差出申候間、何レも乍恐相応之御賞美被仰付被下候儀。

河江手永御郡代直触

高橋文郁

右文郁儀、下り松新地築立數年之間、無懈怠罷出、病人有之候節者療治仕申候間、被賞相応之御品物可被為拝領被下候儀。

御郡代直触 高良村居住

河野八郎助



御惣庄屋直触 右同

鎌賀善左衛門

右同人儀者、新地築方之節、米銀請込、数年之間請拵仕、八郎助儀者、出夫之節出役仕申候間、被賞鳥目被為拝領被下候様。

彦領老疋

北野安右衛門

地土

郷源之允

御郡代直触

井上甚之助

御郡代直触 河野八郎助養父

河野宇七

右同断<sup>二</sup>而 竹馬幾右衛門倅

竹馬圓次

右何レも新地築建之節、追々出役仕、夫仕イ彼是骨折申候間、被賞鳥目被為拝領被下候様。

高良村頭百姓

利平

同

源次郎

同

太助

同

貞助

同村問屋

順右衛門

同村帳書

用助

同

次右衛門

同

專助

同

文平

右之者共、新地築立之節、追々罷出、骨折新地開明<sup>二</sup>付<sup>一</sup>も、厚心配仕申候間、被賞鳥目<sup>鳥目</sup>被為拝領被下候様。

右之通、去ル戌年以來種々之災害差添、七・八年之間格別出精相勤申候間、夫々宜敷被成御參談可被下候。此段御内意奉願候。以上

巳

五月

御郡方

御奉行衆中

中嶋九郎左衛門

新左衛門儀、達之通<sup>二</sup>而、松合村數度之火災、跡家建方

・新地築立等、数年之間格別心を用、相働候由、御郡御

目附付御横目より<sup>茂</sup>、本行新左衛門<sup>并</sup>後藤徳之助儀者、

別<sup>而</sup>骨折、彼是厚心配いたし、世話筋等行届候由。別紙

達之通<sup>二</sup>茂、有之候間。別段を以、作紋麻上下一具可被下

置哉。

徳之助儀、前条同断<sup>二</sup>付、作紋麻上下一具可被下置哉。

作右衛門儀、書面之通<sup>二</sup>付、鳥目老貫五百文可被下置

哉。

但作右衛門以下ハ、追々之見合<sup>二</sup>而、斟酌を以、相しら

へ申候。

武平以下喜平迄十九人、同老貫文完可被下置哉。

徳次郎以下伊左衛門迄五人、同五百文完可被下置哉。

善三郎以下弥助迄十九人、同七百文完可被下置哉。

庄次郎儀、銀貳兩、卯兵衛儀、鳥目七百文、茂兵衛儀、同八百文、次平以下長平次迄八、同七百文完可被下置哉。

新之允以下茂三次迄八人、御間承届之及達可申哉。

八郎助已下圓次迄七人、右同断及び達可申哉。

利平以下文平迄九人、鳥目三百文完可被下置哉。

右付札之通五月七日達。

覚

松山手永松合村<sup>并</sup>宇土町出火之節々、跡家造渡等<sup>二</sup>付、出精仕、且松合村疫疾流行<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、取統方等心配仕、將又新地出来之節等出精仕候由<sup>二</sup>而、西山新左衛門列七十八人、別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、何れ<sup>茂</sup>出精等之次第、夫々本紙稜書之通<sup>二</sup>而、西山新左衛門、後藤徳之助兩人儀<sup>者</sup>、別<sup>而</sup>骨折、彼是厚心配仕、世話筋等引届候様子<sup>二</sup>相聞申候。尤名前達等打替候儀<sup>者</sup>、本紙稜々<sup>二</sup>付紙仕置候通御座候。以上

巳

七月

野田恒助<sup>㊦</sup>

井口角之進<sup>㊦</sup>

一五〇 光暁寺

(九一三二四)

御内意之覚

松山手永松合村

光暁寺

右<sup>者</sup>松合村去ル戌年以來四度之火災、先役を初御家人中、会所役人每廻<sup>茂</sup>上下四五十人宛、光暁寺より引受、本堂・庫裡<sup>二</sup>かけ、数十日相詰、諸取引仕候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>ハ、茶・薪等<sup>者</sup>惣<sup>而</sup>差出、間内畳等<sup>二</sup>至迄踏荒シ、數人賄<sup>二</sup>付<sup>而</sup>茂、寺内都<sup>而</sup>家事取置、数十日隙費加之、諸御役人止宿之家居も及焼失、數度右寺より引受申候<sup>而</sup>、數年來難題相成候得とも、住持を初、寺中不残心得方宣敷込合候<sup>者</sup>、家内別間<sup>二</sup>引除、本堂座敷・庫裡共<sup>二</sup>明渡申候。右<sup>者</sup>先住以來人柄宣敷、不相替方端心得方殊勝<sup>二</sup>相見、數度之出火毎<sup>二</sup>數十日大勢一寺<sup>二</sup>引受、難題筋之儀<sup>二</sup>御座候間、乍恐寺柄相応之御賞美被仰付被下候儀、於私奉願候。此段御内意仕候条、宣敷被成御參談可被下候。以上

巳

五月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

覚

右<sup>者</sup>別紙之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、松合村出火<sup>二</sup>付<sup>而</sup>御役人等大勢数十日止宿<sup>二</sup>相成候節々、諸事懇<sup>二</sup>取賄候様子、先住以來当住<sup>二</sup>おひても、同様兼々心得方宣、殊勝之事共相聞、委細本紙書面之通承申候。以上

巳

七月

野田恒助<sup>㊦</sup>

井口角之進<sup>㊦</sup>

光暁寺儀、達之通<sup>二</sup>付、例吟味仕候処、相応之見合<sup>茂</sup>追々有之候得共、御間承届之及達、拜領方被仰付候儀、相見兼申候。左之例書之通<sup>二</sup>候へハ、御間承届之及達可申哉之処、浄雲寺之儀ハ、一度之事御座候処、本行光暁寺<sup>者</sup>、四度之火災度毎<sup>二</sup>大勢を引受、数十日世話いたし候由<sup>二</sup>付、金子貳百疋程<sup>茂</sup>可被下置哉、如何程<sup>二</sup>可有御座哉。

例

錢塘手永道古閑村

浄雲寺

寛政九年十二月

右<sup>者</sup>去夏洪水之節、同村之内家流失、水を逃来候者共<sup>江</sup>有合之粮物を以取賄、右之者共小屋懸いたし、寺を引払候迄ハ、数十日之間諸事世話いたし候段、御間承届候。

右付札之通五月七日及達。

一五一 本田定次

(九一三二一四)

御内意之覚

在勤中御郡代直触、養蚕受込、松山会所当用見拟、地押請込、郡浦手永下新開村居住

本田定次

当已六十六歳

右定次儀、天明五年郡浦手永村々帳書申付、寛政十年松山会所詰

申付、文化八年御免方請込申付、文政二年馬瀬村庄屋当分申付、同三年養蚕請込、左勤中御郡代直触被仰付、同五年馬瀬村庄屋当分之儀<sup>者</sup>、断願出候<sup>二</sup>付差免、同十一年猶又同村庄屋申付置候処同十二年馬瀬村庄屋<sup>并</sup>御免方請込共<sup>二</sup>断願出候間差免、松山会所当用見拟<sup>并</sup>地押請込申付、右役持懸<sup>二</sup>而、郡浦手永下新開村庄屋申付置候処、断願出候<sup>二</sup>付、当春庄屋差免申候是迄勤年功等左之通、

一帳書拾三ヶ年、天明五年より寛政九年迄

一会所役三十五ヶ年、寛政十年より当年迄

一文政元年笹原村新地築立之節、出精仕候に付、鳥目彦貫文被為拜領候。

一文政八年八代七百町御築立之節、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目彦貫文被為拜領候。

一同十二年立岡堤掘添之節、拜借之御銀請払手堅、費地等之儀も精密<sup>二</sup>取りしらへ、別<sup>而</sup>心配仕候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、鳥目彦貫五百文被為拜領候。

右<sup>者</sup>帳書以来四拾八ヶ年、会所役以来三十五ヶ年出精相勤、右定次儀、惣鉢手堅者<sup>二</sup>而、文化八年御免方請込申付候迄<sup>者</sup>、請免初より九ヶ年<sup>二</sup>相成、未請免折合不申候に付<sup>而</sup>者、種々心配仕、養蚕誘方<sup>二</sup>付<sup>而</sup>も、必多度廻村仕、且地押請込申付候以来、農隙見計数十日罷出、将又松山会所之儀、去ル子年立岡堤掘添以後、松合村・宇土町数度之火災、救ノ浦・下リ松両所新地築立、又<sup>者</sup>大水理出夫彼是会所役人手足不申候<sup>二</sup>付、昼夜相詰、将又下新開村庄屋申付候処、右村之儀<sup>者</sup>、郡浦手永宇土御知行所第一之零落所

二而、御年貢・諸上納且高地片付方彼是不一形心配仕、在勤中御郡代直触被仰付候以来十三ヶ年罷成、不相替精勤仕申候間、五拾年近キ勤勞旁被賞、御郡代直触本席<sup>二</sup>被仰付被下候様有御座度奉存候。此段御内意奉願候条、重疊宣敷被成御參談可被下候。以上  
巳

五月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

定次儀、達之通<sup>二而</sup>、帳書以来<sup>者</sup>、五十年<sup>二</sup>相成候得共、帳書之儀ハ、村役<sup>二而</sup>無之候付、年数<sup>二</sup>難加、会所見習以來三十七年之内、養蚕受込、在勤中御郡代直触十五年<sup>二</sup>相成申候。惣年数四十年以上、在勤中御郡代直触十五・六年<sup>二而</sup>、本席被仰付見合<sup>二</sup>御座候処、定次儀、未四十年<sup>二</sup>至不申候間、達之通<sup>者</sup>難及僉議御座候。然処会所詰之儀ハ三十五年<sup>二而</sup>、無苗御惣庄屋直触、四十五年<sup>二而</sup>苗字御免之見合<sup>二</sup>付、定次儀無苗御惣庄屋直触<sup>二者</sup>、二年越居申候得共、苗字御免<sup>二者</sup>八年程早メ<sup>二</sup>御座候処、数々之役方精勤いたし、在勤中御郡代直触被仰付候<sup>而</sup>も、十五年<sup>二</sup>相成申候間、別段を以本席苗字御免・御惣庄屋直触可被仰付哉。如何程<sup>二</sup>可有御座候哉。

右付札之通五月七日達。

覚

在勤中御郡代直触、養蚕受込并松山会所当用見拟、地押請込、郡浦手永下新開村居住

本田定次  
右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、数十年出精いたし、数々之役方無間抜相勤候様子<sup>二而</sup>、年数等之次第共、委細本紙書面之通承申候。以上  
巳

七月

井口角之進<sup>㊦</sup>

一五二 中村小左衛門、野田七右衛門

(九二二一四)

御内意之覚

郡浦手永前越村居住、御山支配役、在勤中諸役人段

中村小左衛門

右小左衛門儀、松合村四度之火災、宇土町大火之節共、跡家造渡<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、御山藪より余計之竹木剪出方速取計、数度之火災格別骨折申候間、乍恐相応之御賞美被仰付被下候様。

松山手永尾尾村居住、在勤中老領者<sup>二而</sup>、御牧見拟并松山手永塘方助役

野田七右衛門

右七右衛門役前出精仕、松合村四度之火災、宇土町出火<sup>二</sup>付<sup>而</sup>者、早速出役仕、度毎<sup>二</sup>数日骨折申候。且下り松新地之儀<sup>者</sup>、今以年々手入仕、多日出役厚心配仕申候間、乍恐被賞、金子貳百足被為押領被下候様。

右之通御内意奉願候間、宣敷被成御參談可被下候。以上

巳

五月

中嶋九郎左衛門

弥十郎

御郡方

当已六十四才

御奉行衆中

小左衛門儀、達之通<sup>二</sup>付、御間承届之及達可申哉。

七右衛門儀、達之通<sup>二</sup>付、銀五両可被下置哉。

右之通五月七日達。

覚

郡浦手永前越村居住御山支配役、在勤中諸役

人段。

中村小左衛門

右小左衛門儀、宇土町并松合村数度火災<sup>二</sup>付而、余計竹木剪出方

心配いたし候由、本紙之通<sup>二</sup>相聞申候。

松山手永永尾村居住、在勤中一領者足<sup>二</sup>而、

御牧見拟并松山手永塘方助役

野田七右衛門

右七衛門儀、宇土町并松合村数度火災<sup>二</sup>付而、数日出役いたし、

且下り松新地御手入等心配いたし候由、委細本紙之通相聞申候。

右見聞仕候趣、御達申上候。以上

巳七月

村田仁右衛門<sup>㊦</sup>

一五三 弥十郎 他

(九一三—一四)

御内意之覚

無苗御惣庄屋直触、松山手永網津村庄屋、御

牧別当兼帯

右弥十郎儀、寛政三年網津村庄屋并御牧別当申付、享和元年御山口并御牧廻を兼帯申付、文化二年御山口・御牧廻者当差免、庄屋・御牧別当兩役、当年迄四十三ヶ年手全<sup>二</sup>相勤申候。

一文政八年八代七百町御新地御築立<sup>二</sup>付、潮留并水理御普請之節夫

方召連罷出、出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目老實文被為拜領候。

一同十年役方多年出精、村方<sup>茂</sup>致帰服、先年洪水之節、川塘、井手

塘等破損<sup>二</sup>付而、荒地開明・塘手御普請彼是致心配、且網津村之

儀、水気強、蕎麦作根付難成ヶ所多所柄<sup>二</sup>付、水気抜・新井手堀

・井樋・磧・石橋等、寸志相倡、御普請も丈夫<sup>二</sup>致出来村方一稜

之為合<sup>二</sup>相成候旨<sup>二</sup>而、無苗御惣庄屋直触被仰付候。

一文政十二年立岡村堤掘添之節、村夫召連罷出、夫仕其外請込之勤

稜致出精、且又杉嶋新川掘替<sup>二</sup>付而も、大勢之夫方召連罷出、致

出精候旨<sup>二</sup>而、鳥目老實文被為拜領候。

一松山手永之儀、去ル西年立岡堤掘添、翌戌ノ年松合村四度之大火

・宇土町火災共<sup>二</sup>者、千軒余之跡家造渡<sup>二</sup>付、山路難所にて、繩

・藁等持出及数度、又者救ノ浦新地築立<sup>二</sup>付而茂、追々夫方召連

罷出、子ノ年風災<sup>二</sup>付而も、田畑作共痛損仕、多人數之村方取統

等、心遣之上、所々塘手破損・修復之夫立も余計<sup>二</sup>有之、彼是打

統候<sup>二</sup>付而者、村方へ之示方能行届申候。

一去ル寅ノ春、下り松新地築立<sup>二</sup>付而者、数度之出夫速<sup>二</sup>取計、笠

服内・井手掘方等之夫仕多御座候処、格別出精仕申候。

一網津村之儀、山合之所柄<sup>二</sup>而以前より水田多御座候処、先年新古

井手筋浚方等行届、跡作地相増、村方為合<sub>二</sub>相成候<sub>二</sub>付、去ル亥ノ年御賞美を<sub>茂</sub>被仰付、其後弥以掘浚等、当時<sub>二</sub>至候<sub>而者</sub>、苗床之外都<sub>而</sub>跡作地<sub>二</sub>相成、秋作取揚後直<sub>二</sub>跡作仕付、厚心配仕、日限を極メ、從來明野表<sub>二</sub>罷出、跡作速植付申候<sub>二</sub>付、近年<sub>二</sub>相成夫丈<sub>ク</sub>糧物出来増、一稜為合<sub>二</sub>相成申候。

右之通、而役四十三ヶ年無懈怠相勤、別<sub>而</sub>家筋之儀<sub>者</sub>、慶長年中より庄屋連綿仕、当弥十郎迄十一代勤続居申候<sub>二</sub>付<sub>而者</sub>、村方一統帰服仕居、御年貢・諸公役等速相勤、殊<sub>二</sub>近年災害<sub>二</sub>付<sub>而者</sub>、格別心配仕、村方申分等無之様示方能行届、出精仕申候間、乍恐被賞、苗字御免之御惣庄屋直触被仰付被下候様。

右同手永布古閑村庄屋

長左衛門

当巳六十七才

一 右長左衛門儀、天明四年布古閑村頭百姓申付、文化四年迄三十四年無懈怠相勤居申候処、文政元年同村庄屋申付、当年迄十六ヶ年<sub>二</sub>相成、都合五十年手全<sub>二</sub>相勤居申候。

一 八代七百町新地御築立之節、出精仕候旨<sub>二</sub>而、鳥目老貫文被為拜領候。

一 文政十二年役方数年出精且立岡堤掘添之節、村夫方召連罷出、致出精、杉嶋新川掘替に付<sub>而茂</sub>、同様出精仕候旨<sub>二</sub>而、合羽・傘・菅笠御免被仰付候。

一 去ル戌年松合村火災以来、下り松新地築立一件<sub>二</sub>付<sub>而</sub>も、右弥十郎同様出精仕居申候。

一 布古閑村之儀<sub>者</sub>、片穂所<sub>二</sub>而、従前々手永第一之零落所<sub>二</sub>御座候

処、頭百姓以来厚心を用、近年水田之ケ所々々數十間長左衛門心配仕、新井手立出来仕、跡作地相増、能取取実も相増、一稜村方為合<sub>二</sub>相成申候。

右之通手全<sub>二</sub>相勤、連々之零落所殊に近年不作打続、難浚弥増申候得共、田根付等時候後<sub>レ</sub>不申、手入等無怠、跡作仕付<sub>二</sub>付<sub>而</sub>も無抜目セリ立申候<sub>二</sub>付、夫<sub>レ</sub>丈糧物出来増、格別村方立直候と申程<sub>二</sub>者、無御座候得共漸々御年貢・諸出銀速皆落仕申候儀、長左衛門心配届申候処より之儀<sub>二</sub>御座候間、五十年之勤勞、旁乍恐苗字御免・御惣庄屋直触被仰付被下候様。

苗字御免・御惣庄屋直触、宇土駅小頭、右同手永三日村居住

井芹次助

当巳七十六才

一 右次助儀、安永七年三日・立岡両村御山口申付、天明八年佐野村御山口を<sub>茂</sub>兼帶申付、寛政三年佐野村御山口<sub>者</sub>差免、三日・立岡兩村御山口迄相勤居申候処、享和元年御山口<sub>者</sub>差免、宇土人馬所小頭申付、当年迄五十六ヶ年役々手全<sub>二</sub>相勤申候。

一 文化八年役方多年出精仕候旨<sub>二</sub>而、礼服・小脇差御免被仰付候。

一 文化十二年役方五十年余致出精、立岡堤掘添之節、出役之御役人・人馬繼替等、格別心配仕候旨<sub>二</sub>而、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付候。

右之通五十六年勤続、御山口式十四年、御山方見扨筋も行届、駅所小頭三十式年昼夜無差別精勤仕、一躰篤実<sub>二</sub>有之、駅所之勤向多年勤続仕候者と、以前より見合も無御座、先者稀成者<sub>二</sub>御座候

一 処最早老年<sup>二</sup>罷成、小頭勤兼候段、断願出居候儀<sup>二</sup>御座候間、五十六年之勤勞<sup>二</sup>被對、殊<sup>二</sup>余命も無之者<sup>二</sup>付、旁乍恐御別段を以、御郡代直触被仰付被下候様。

無苗、御惣庄屋直触、宇土新町庄屋

惠吉

当巳五十六才

一 右惠吉儀、寛政元年松山会所見習<sup>二</sup>罷出、同六年小頭本役申付、同十一年会所詰申付、文化三年井樋方小頭兼帯申付、同七年出銀方請込申付、同九年馬瀬村庄屋兼帯申付、文政二年下代召置候処、同四年下代差免、宇土駅惣代申付、同九年惣代差免、新町庄屋申付、当年迄四十五年手全<sup>二</sup>相勤申候。

一 寛政十二年平日心懸能、諸御用無間抜取計、出精相勤候旨<sup>二</sup>而、鳥目七百文被為拝領候。

一 文化元年笹原村開築立之節、下しらべ見分立合、塘手築立夫仕且開明之上地割<sup>二</sup>付而、出精相勤候旨<sup>二</sup>而、老貫文鳥目被為拝領候。

一 同九年役方多年手全<sup>二</sup>相勤、会所向諸御用筋厚心を用、数百艘之井樋御手入、年分絶不申候、余計之入目錢請払、手堅取計、格別出精仕候旨にて被賞、礼服・小脇差御免被仰付候。

一 文化十四年御年貢諸取立且新堤掘方、其外御囲切蔵新規建方等<sup>二</sup>付而、数日之間厚ク世話いたし、出精相勤候<sup>二</sup>付、鳥目七百文被為拝領候。

一 文政十三年役方数年致出精、立岡堤掘添之節、出役之御役人・人馬継等、格別致心配候旨<sup>二</sup>而、無苗・御惣庄屋直触被仰付候。

右之通、数役相勤、会所見習共<sup>二</sup>者、都合四十五年会所役<sup>二</sup>而、

出銀方請込<sup>二</sup>并下代駅所惣代庄屋迄、都而米銀請払<sup>二</sup>懸り、昼夜心配も多御座候処、惠吉儀、氣根強、諸事精密<sup>二</sup>取計、追々転役申付候節々、米錢<sup>二</sup>付而煩敷筋無之、跡役<sup>二</sup>江之引讓速<sup>二</sup>有之、右一条<sup>二</sup>付而者在役人手本<sup>二</sup>も可相成勤前<sup>二</sup>而、其上宇土町高地之内難渋地方多、惠吉庄屋以来、右片付方等厚心配仕、近年格別難渋無之、併近在数ヶ村<sup>二</sup>かけ、出作迄<sup>二</sup>而、御年貢取立手数多御座候処、別段心配仕、数十年之勤勞旁、乍恐苗字御免御惣庄屋直触被仰付被下候様。

無苗・御惣庄屋直触、宇土本町庄屋

儀平次

当巳六十一才

一 右儀平次儀、寛政十年宇土新式丁目丁頭申付、文化八年町頭差免、本町庄屋申付、当年迄庄屋二十三年、丁頭以来都合三十六年手全相勤申候。

一 文化八年寸志之訳<sup>二</sup>被對、影踏御免被仰付候。

一 文政十二年役方数年手全<sup>二</sup>致出精、立岡堤掘添之節、醬油を<sup>茂</sup>差出候<sup>二</sup>付、無苗・御惣庄屋直触被仰付候。

右之通都合三十六年相勤、且又兼々難渋之者共<sup>二</sup>江者、糧物・味噌・醬油等差遣、衣類薄キ者共<sup>二</sup>者、衣類杯内々差遣候儀御座候様子<sup>二</sup>候得共、深ク秘申候<sup>二</sup>付、委敷<sup>者</sup>相分不申。將又宇土町之儀者、高千八百石余之所<sup>二</sup>而、主無シ難渋地多ク、高地片付方年々心配多御座候処、儀平次数年庄屋相勤、種々手段を尽、数十ヶ村<sup>二</sup>かけ、出作向御年貢御取立等、深心を用、世話仕申候<sup>二</sup>付、近

年者格別難洩無之、漸々御難題筋薄ク偏儀平次心配筋行届候より之儀ニ御座候間、乍恐苗字御免、御惣庄屋直触被仰付被下候様。

岩隈村庄屋<sup>二</sup>而、松山井樋方小頭兼帯

直次

当巳四十二才

右直次儀、文化三年村帳書申付、同八年親跡岩隈・布古閑両村庄屋<sup>并</sup>御山口迄も兼帯申付置候処、布古閑村庄屋之儀者、断願出申候<sup>二</sup>付、文化十五年差免、岩隈村庄屋<sup>并</sup>御山口迄相勤居申候処、御山口<sup>者</sup>差免、岩隈村庄屋迄申付、井樋方小頭兼帯申付、都合当年迄二十八年相勤候内、村帳書五年、庄屋以来式十三年出精相勤申候。

一文政十二年役儀数年致出精、且立岡堤掘添之節、村夫召連罷出、致出精、杉嶋新川掘替に付<sup>而</sup>茂、同様致出精候旨<sup>二</sup>而、傘・合羽・菅笠御免被仰付候。

一松合村之内、救ノ浦新地築立<sup>并</sup>文政十一年春杉嶋・廻江・郡浦・松山水害除之ため、松山手永馬瀬村樋発・塘堀切・新石樋居込、同年秋大風<sup>二</sup>付<sup>而</sup>、大口村手永開井樋<sup>并</sup>救ノ浦井樋及破損候<sup>二</sup>付、数日御普請所<sup>江</sup>相詰、其外数度之火災、跡家造渡<sup>二</sup>付<sup>而</sup>も、格別出精心配も仕候。  
右之通役方数々数十年精勤仕、井樋小頭<sup>二</sup>付、下地数百艘之井樋、不時之御作事も絶不申、松山手永之儀<sup>者</sup>、早田所<sup>二</sup>付、養水増之新堤・新井手・井樋・寛<sup>かひい</sup>等、近年余計<sup>二</sup>相増仕繼、彼是手数多御座候処、無間拔取計、米錢請弘嚴重<sup>二</sup>仕、且又岩隈村之儀、

片穗所<sup>二</sup>而、極零落所、兼<sup>而</sup>取続、難洩強御座候間、近年水氣拔新井手掘方奉願、水田跡作地<sup>茂</sup>相増、糧物助成<sup>二</sup>相成、近年<sup>者</sup>難洩なからも、御年貢・諸出銀速相納候様相成候儀、直次精勤仕候より之儀<sup>二</sup>而御座候間、乍惣被賞、無苗・御惣庄屋直触被仰付被下候様。

高良村庄屋助役<sup>二</sup>而、津横目兼帯

寿七郎

当巳七十歳

右寿七郎儀、寛政六年高良村頭百姓申付、享和元年頭百姓<sup>者</sup>差免払頭申付、文化五年払頭持懸<sup>二</sup>而、津横目兼帯申付、文政二年払頭差免、津横目迄相勤、同十一年高良村庄屋代役申付、天保三年庄屋助役申付、頭百姓以来、惣年数都合四十ヶ年相勤申候内、頭百姓七ヶ年、払頭七ヶ年、津横目二十六ヶ年無懈怠相勤申候。

一高良村之儀<sup>者</sup>、在町立<sup>二</sup>而、農商打交り居、殊<sup>二</sup>津端<sup>二</sup>而、自他船々出入も繁、諸御役人休泊も多、薩州御家中船上り、其外兼<sup>而</sup>庄屋・村役人心遣多場所<sup>二</sup>而、村役人抔年久敷勤続得不申所柄<sup>二</sup>御座候処、右寿七郎儀、生得律儀成者<sup>二</sup>而、諸取計筋簾直<sup>二</sup>御座候故、頭百姓以来当年迄四十ヶ年相勤、津横目に付<sup>而</sup>者、下り松湊口出入之船改方立合、昼夜之無差別罷出、第一旅船坏難洩不仕様取計、一鉢津口之扱方も宜、近年穀類払底<sup>二</sup>付<sup>而</sup>八、抜積等無之様、心配仕申候。

一高良村之儀、高六百石余<sup>二</sup>而、惣人数八百人余有之、田畑作足り不申、雜魚又<sup>者</sup>歩員類を拾い、渡世仕候者多、近年不作続<sup>二</sup>付、糧物難洩甚敷御座候<sup>二</sup>付、下り松海辺<sup>二</sup>而、新地築立御免被仰



付、畝數二十町余<sup>二</sup>、當時專開明手入等仕居申候。右築立二件<sup>二</sup>付<sup>而者</sup>、寿七郎儀始未罷出、村方<sup>二</sup>之諸取計根<sup>二</sup>成、精勤仕、人別割渡開明方等、格別心配仕申候。

右之通役儀數十年手全<sup>二</sup>相勤、下り松新地開築以來、今以出精仕、殊<sup>二</sup>多人數之村方、津端<sup>二</sup>付、一躰人氣<sup>茂</sup>異り、兼々心遣多、御年貢御取立等、至<sup>而</sup>手數多、寿七郎厚心を用、精勤仕候<sup>二</sup>付、近年<sup>者</sup>、無滞相納申候、殊<sup>二</sup>寿七郎四十年無懈怠精勤仕候<sup>二</sup>付、乍恐被賞、礼服・小脇差御免被仰付被下候様。

右之通御内意奉願候条、夫々宜敷被成御參談可被下候。以上

已

五月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

弥十郎儀、達之通<sup>二</sup>而、庄屋四十四年<sup>二</sup>相成、見合之年數<sup>二</sup>越居之間、苗字可被成御免哉。

長左衛門儀、頭百姓以來五十一年、庄屋十七年<sup>二</sup>相成、

庄屋之年數淺御座候へ共、頭百姓<sup>二</sup>而茂<sup>二</sup>五十年<sup>二</sup>而者、礼

服御免等被仰付、見合有之候処、庄屋<sup>茂</sup>數年相勤功業も有之間、無苗・御惣庄屋直触可被仰付哉。

但苗字御免、御惣庄屋直触之申立<sup>二</sup>御座候へ共、苗字之儀<sup>者</sup>、難及僉議、本文之通相しらへ申候。

次助儀、達之通御座候処、去六月役儀可被免<sup>二</sup>相成候由、御郡御目付御横目、付紙之通<sup>二</sup>付、僉議不仕候。

惠吉儀会所見習<sup>二</sup>罷出、小頭会所詰已來四十六年之内、

庄屋二十三年相成、無苗御惣庄屋直触被仰付候<sup>而</sup>、六年<sup>二</sup>相成申候。此步<sup>三</sup>間近<sup>二</sup>御座候得共、庄屋八四十年以上、会所詰<sup>者</sup>四十五年以上<sup>二</sup>而、苗字御免之見合<sup>二</sup>御座候処惠吉儀、前文之通惣年數四十六年<sup>二</sup>相成申候間苗字可被成御免哉。

見合

儀平次儀、丁頭之年數ハ難加、庄屋以來二十四年<sup>二</sup>相成申候。苗字御免之儀ハ、四十年以上之見合<sup>二</sup>而、年數遥<sup>二</sup>劣居申候間、達之趣先見合可被置哉。

直次儀、庄屋二十四年<sup>二</sup>相成申候処、無苗、御惣庄屋直触<sup>者</sup>二十五年以上之見合<sup>二</sup>付、一ヶ年淺御座候へ共、役方數々精勤いたし、功業之趣も書面之通<sup>二</sup>御座候間、一ヶ年被縮、達之通無苗、御惣庄屋直触可被仰付哉。

寿七郎儀、頭百姓以來四十一年、津横目二十七年<sup>二</sup>相成申候。津横目之儀<sup>者</sup>、三十五年以上<sup>二</sup>而、礼服御免之見合<sup>二</sup>付、八年淺御座候処、頭百姓已來ハ、四十一年<sup>二</sup>而各別精勤いたし、新地築立等<sup>茂</sup>根<sup>二</sup>成、各別心配いたし候由、且極老之者<sup>二</sup>茂<sup>二</sup>有之候付、旁を以礼服可被成御免哉。

右付礼之通、五月七日及達。

覚

松山手永綱津村庄屋弥十郎列七人、別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、何れ<sup>茂</sup>出精相勤、年數等之様子共委細本紙書面稜々之通、相聞申候。尤年号違、且役方差免<sup>二</sup>相成候儀<sup>者</sup>、本紙<sup>二</sup>付紙仕置候

通<sub>二</sub>御座候。以上

已

七月

野田恒助<sup>㊦</sup>  
井口角之進<sup>㊦</sup>

一五五 本田栄

(九一三—四)

御内意之覚

郡浦手永居住地士、格別御制度見<sub>二</sub>抄<sub>一</sub>、病死  
仕候本田理右衛門倅

本田栄

当午廿九歳

右栄祖々父本田文右衛門と申者、寸志<sub>二</sub>よつて地士<sub>二</sub>被仰付、其  
後御郡並之御奉公出精仕、且武器之備宜敷旨<sub>二</sub>而、  
尙領<sub>二</sub>尙足進席  
被仰付候。

一 祖父本田藤右衛門儀、祖々父代寸志之訳、且武芸心懸能、武器之  
備<sub>茂</sub>宜敷尙被对、親同様尙領尙足相統被仰付候。

一 親本田理右衛門儀、武芸心懸厚且武器之備宜敷旨<sub>二</sub>而、父跡地士  
被仰付、文政六年格別御制度見<sub>二</sub>抄<sub>一</sub>、去冬迄自勤<sub>二</sub>而相勤居申  
候。右理右衛門儀、兼<sub>而</sub>武芸心懸厚、別<sub>而</sub>炮術之儀者、数年格別  
出精仕、芸術<sub>茂</sub>相進、同門中引廻、棒火矢細工等を<sub>茂</sub>仕、平常誘  
方能行届、御家人中励方にも相成、右出精仕候<sub>二</sub>付<sub>一</sub>而者、御賞美  
をも奉願候筈<sub>二</sub>御座候処、去冬病死仕申候。悴栄儀、惣体人柄宜

敷、武芸之儀者、親同様心懸厚、劍術・炮術者相伝も相濟、相門  
中申談、出精仕申候。然処郡浦手永之儀者、御国端<sub>二</sub>而一円海辺  
を受、別<sub>而</sub>天草江相接居持口之ヶ所多、防禦御備手薄御座候<sub>而</sub>者  
難相濟所柄<sub>二</sub>而、兼<sub>而</sub>武芸等心懸候様、格別示置、殊<sub>二</sub>下地御家  
人及不足候儀<sub>二</sub>も有之、右栄儀親同様、地士相統被仰付被下候  
様。於私重疊奉願候。左候ハ、手永御家人中文武励合弥以、出  
精可仕、於其身者、是迄代々備置申候武器之仕継等、無怠武芸之  
儀も一際取<sub>二</sub>抄<sub>一</sub>、出精可仕奉存候。則小崎平八・渡邊源之允より之  
覚書、別紙二通相添、御達仕候条、別段之所柄<sub>二</sub>付、重疊宜敷被  
成御参談可被下候。以上

午

四月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

栄儀、達之通<sub>二</sub>而、武芸<sub>茂</sub>心懸厚、劍術・炮術ハ、  
相伝<sub>茂</sub>相濟候由、御家人少之訳<sub>二</sub>てハ、親同様相統  
被仰付候見合<sub>茂</sub>御座候間、達之通親跡地士可被召出  
哉。

右付札之通、七月廿七日達

師役より之書付扣畧之。

覚

郡浦手永居住地士<sub>二</sub>而病死いたし候本田理右  
衛門倅

本田栄

右者親跡相統、別紙申立之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候処、人物宜、武芸出精いたし、相伝を<sup>茂</sup>相濟居候由。其外武器之備共<sup>ニ</sup>委細本紙書面之通相聞、行状等異候唱承不申候。以上  
午

六月

中西弥三次<sup>㊦</sup>

一五六 藤本茂郎太

(九一三二一四)

御内意之覚

宇土郡宇土町別当、地土<sup>ニ</sup>而病死仕候藤本茂作相統之孫

藤本茂郎太

当年十七才

右茂郎太祖藤本茂作儀、天明二年宇土新町庄屋役申付、同八年庄屋役<sup>者</sup>差免、宇土町別当助役申付、寛政元年別当本役申付置候処、同二年病氣差免、依願別当役差免、同六年快復仕候<sup>ニ</sup>付、猶又別当役申付候処、同十年又々以前之病氣差免候<sup>ニ</sup>付差免、享和三年本町庄屋役申付、文化元年新町庄屋役を<sup>茂</sup>兼帯申付、同三年新町庄屋<sup>者</sup>差免、宇土町別当兩人役之処、茂作<sup>者</sup>人<sup>ニ</sup>而本町庄屋をも兼帯申付置候処、同五年依願本町庄屋<sup>者</sup>差免、文化十年より以前之通、別当兩人役<sup>ニ</sup>旧復申付、文政十年年功其外被賞、地土進席被仰付候<sup>ニ</sup>付、翌年正月一旦別当役差免、宇土町会所見抄役申付候処、猶又同三月別当兼帯申付、出精相勤、天明二年以来、

去年迄庄屋別当、都合五十二年之内、病氣<sup>ニ</sup>よって兩度<sup>ニ</sup>七ヶ年引入申候。

一寛政九年御才覚銀寸志之節、三貫六百九拾目差上候処、右之内三貫目<sup>ニ</sup>而文化元年苗字被成御免、残り六百九拾目<sup>者</sup>御預<sup>ニ</sup>相成居申候。

一文化六年御類焼寸志<sup>者</sup>貫目差出候処、前条御才覚寸志残六百九拾目と取結、都合<sup>者</sup>貫六百九拾目<sup>ニ</sup>而、刀御免・御郡代直触被仰付、尚作紋御上下一具被為拝領候。

一文政八年七百町御新地御築立之節、心配仕候旨<sup>ニ</sup>而、鳥目<sup>者</sup>貫文被為拝領候。

一同九年米穀高直<sup>ニ</sup>而、町内至貧之者<sup>ト</sup>茂、糧物難渋<sup>ニ</sup>付而、富家之面々<sup>江</sup>直段下ヶ<sup>ニ</sup>而救売申談、下方一稜為合<sup>ニ</sup>相成、厚心配仕候段、御間御聞届之御達御座候。

一同十年庄屋役以来、数十年出精仕、宇土町之儀、宿駅を受候所柄<sup>ニ</sup>而、彼是心配多ク、且町出銀減方心を用、余錢備出来いたし、町会所取建、至貧之者共取救方之取計等、下方一稜為合<sup>ニ</sup>相成候旨<sup>ニ</sup>而、地土<sup>ニ</sup>被仰付候。

一同十二年立岡大堤掘添之節、費地御買上等之儀<sup>ニ</sup>付而、余計之振替錢取計、心配仕候旨<sup>ニ</sup>而、御銀<sup>式</sup>兩被為拝領候。

一天保二年近年凶作打続、去ル子ノ秋風災以来、別<sup>而</sup>糧物乏敷有之候<sup>ニ</sup>付、宇土町富家之面々<sup>江</sup>急飢為手当、追々米穀買備之儀、主<sup>ニ</sup>成申談、難渋之者共直段下ヶ<sup>江</sup>救売取計筋行届候<sup>ニ</sup>付、数百人之者共及飢不申様取続、市中一躰静謐<sup>ニ</sup>有之、御難題筋差免不申様相成候次第、畢竟茂作以下厚心配いたし候処より之儀<sup>ニ</sup>付、支配錢

之内を以、金子百疋差遣申候。

一文政十年宇土町本宅町目より式町目<sup>ニ</sup>かけ七拾余軒焼失<sup>ニ</sup>付而者、跡家建方之儀、御間御銀拜領奉願、重キ御難題<sup>ニ</sup>罷成候処、右一件諸取計、難渡之者共取救に付<sup>而者</sup>、富家之面々より火事見舞として、鳥目九貫目余差出候節、専主<sup>ニ</sup>成申談、引続御本陣御次宿再建<sup>ニ</sup>付<sup>而も</sup>、種々心配仕申候。

一右焼失<sup>ニ</sup>付<sup>而者</sup>、産業為取続、富錢町方御備錢之内より十ヶ年之間、三貫五百目宛被為拜領候<sup>ニ</sup>付、宇土町方よりも日貫錢増取立を以、年々五百目宛指出候儀等、小前<sup>ノ</sup>江論方行届、一ヶ年<sup>ニ</sup>都合四貫目宛之備出来仕、後年為合<sup>ニ</sup>相成可申候。

一字土町別当役之儀、以前より兩人役<sup>ニ</sup>而、時<sup>ニ</sup>より助勤申付候儀も有之候処、去ル文化三年より町余錢為出来、茂作老人役<sup>ニ</sup>申付、老人減方之給米代、其外出銀減方之仕法いたし、同九年迄七ヶ年之間<sup>ニ</sup>四貫六百目余之余錢出来仕候<sup>ニ</sup>付、依頼右余錢を以、町会所、官宅御買上<sup>ニ</sup>相成、又<sup>者</sup>御本陣御取繕入目拝借、或<sup>者</sup>町方難渡之者取救彼是一稜為合<sup>ニ</sup>相成候儀、全茂作働之驗<sup>ニ</sup>而御座候。然処右町会所・官宅之儀、去ル亥九月類焼仕、跡家建方之儀、町出銀迎も仕得不申、当惑之由<sup>ニ</sup>御座候処、尚又茂作重畳工夫仕、左之通町会所再興仕候。

一町会所一軒 惣瓦

但表口三間・入七間、裏口・囲堀・出入門<sup>并</sup>湯殿・雪隠共出来。

此入目錢六貫八拾六匁老分五厘

内

三貫目 但町備錢より年賦<sup>ニ</sup>借渡候分。  
残三貫八拾六匁老分五厘

但此分宇土富月々興行<sup>ニ</sup>付、雜費料として、札巻<sup>ニ</sup>付、一錢宛引除相成候内、年々造用等引残、余錢富受込、藤本茂作受持内證備仕置候分<sup>并</sup>町屋敷買売<sup>ニ</sup>付、五步錢備、其外才覚を以差出候分。

右之仕法<sup>ニ</sup>而、町会所再興出来仕、平日別当以下相詰、諸御用筋取計、諸御役人体泊共<sup>ニ</sup>引受、一稜弁利為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一文化六年おろしや御手当米拾俵代三百拾匁寸志差出申候。

一文政三年日光御手伝<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>、寸志錢三十目差出申候。

一同十二年関東筋川々御手伝<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>、寸志錢百目差出申候。

一字土町之儀、往還筋宿駅を受、殊<sup>ニ</sup>宇土御館下准五ヶ町<sup>ニ</sup>被仰付置候<sup>ニ</sup>付<sup>而者</sup>、兼々別当役勤稜繁雜<sup>ニ</sup>有之、御巡見<sup>并</sup>遊行上人巡

国之節々御休伯<sup>御</sup>を受來、公義御役人通行、薩州・球磨御家中休伯<sup>御</sup>を初、諸御役人往返<sup>ニ</sup>付<sup>而も</sup>、必多度心配多ク御座候処、惣鉢勤方<sup>ニ</sup>付<sup>而者</sup>、万端心を用、五十年余相勤候<sup>ニ</sup>付、諸事物馴役前吞

込能、長崎御役人・唐物糺方<sup>ニ</sup>付、渡海之節、度々応対仕、御難題筋<sup>ニ</sup>至不申様、追々取計、將又先年以来非常御物入之節々、寸

志等被仰付候砌、町内御家人以下申談行届、一稜之御用<sup>ニ</sup>も相立、別<sup>而</sup>宇土町火災後、跡家建方・産業取続・拝借返納筋<sup>ニ</sup>付

者、程々心魂を碎、厚心配仕、一鉢手全<sup>ニ</sup>有之、町中帰服仕、兼々教諭筋行届、格別出精相勤申候<sup>ニ</sup>付、先役よりも進席之申立

を<sup>茂</sup>御内意仕置申候処、去八月病死仕申候。右茂作相続之孫藤本茂郎太儀惣鉢人柄宜、筆算等心懸能、往々御用<sup>ニ</sup>も相立可申奉

内

存候間、茂作格別之年功・勤功、且御才覚・寸志錢三貫六百九拾目差出候<sup>ニ付</sup>而者、先役より含メ置候儀も有之、旁被对、乍恐祖父跡御郡代直触被召出被下候様有御座度、於私重疊奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

午

二月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

茂郎太儀、達之通<sup>ニ而</sup>祖父茂作地士被仰付置、庄屋・別当役四十五年之勤<sup>ニ而</sup>相果申候。字土町之儀、宿訳を受、繁雜<sup>ニ有</sup>之候処、致精勤、同町火災後、跡家建方産業取統、拜借返納筋付<sup>而者</sup>種々心魂を碎、厚心配いたし候付、御郡代直触被仰付候様、書面之通御座候。然処地士<sup>ニ</sup>二代目<sup>者</sup>無苗・御惣庄屋直触被仰付究<sup>ニ</sup>御座候得共、茂作儀御才覚錢・寸志<sup>ニ而</sup>苗字被成御免置、右之寸志<sup>者</sup>御郡代より被含置候筋有之、依達之<sup>ニ</sup>二代相統被仰付候見合<sup>ニ有</sup>之候間、茂郎太儀、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付<sup>ニ而</sup>可有御座哉之処、茂作勤功之次第、書面之通<sup>ニ付</sup>例吟味仕候処、別紙之通依勤功<sup>者</sup>一階落被召出候見合<sup>茂</sup>御座候間、茂郎太儀、祖父数十年之勤功<sup>ニ</sup>被对、御郡代直触可被仰付哉。

天保四年正月

矢部手永

木原牛雄

同年九月

深川手永

堀田伝蔵

右付札之通七月廿七日達。

覚

宇土町別当、地士<sup>ニ而</sup>病死仕候藤本茂作相統之孫

藤本茂郎太

右<sup>者</sup>、相統申立別紙之趣<sup>ニ付</sup>見聞仕候処、祖父茂作数十年精勤いたし、且寸志を<sup>茂</sup>差出候<sup>ニ付</sup>而者、追々御賞美之様子并去ル亥年宇土町火災<sup>ニ付</sup>而者、急場取救を初、跡家取立・産業取統等之儀より引統、町会所取建方等<sup>ニ</sup>至迄、種々厚心配仕候次第、其外稜々之儀共<sup>ニ</sup>委細本紙書面之通<sup>ニ</sup>相聞、茂郎太儀人物宜、行状異候唱相聞不申候。右見聞仕候趣、御達申上候。以上

午

六月

山口三五左衛門<sup>印</sup>

一五七 忠兵衛

(九十二三四)

御内意之覚

郡浦手永神原村頭百姓

忠兵衛

当年七十六才

右忠兵衛儀、安永八年頭百姓申付、天明七年迄相勤居申候処、病氣差起り、断願出申候<sup>ニ付</sup>差免、尚又寛政元年頭百姓申付、当年迄都合五十五ヶ年相勤居、右年数之内文政二年七月より同十一月迄同村庄屋代役を<sup>茂</sup>兼勤申付、右忠兵衛儀、平日手全<sup>ニ有</sup>之、神

原村之儀者、別而零落所<sup>三</sup>而御座候得共、兼而心懸厚申談、能行届、御年貢・諸上納取立方無間拔仕候<sup>二</sup>付、近年<sup>二</sup>至候<sup>而者</sup>、年々速<sup>二</sup>皆濟仕、畢竟忠兵衛專主<sup>二</sup>成、相誘候所より之儀<sup>二</sup>御座候間、老年且五十年余之勤勞旁被対、礼服・小脇差御免被仰付被下候様有御座度、於私奉願候。此段御内意仕候条、宜數被成御参談可被下候。以上

午

四月

御郡方

御奉行衆中

忠兵衛儀、達之通<sup>二</sup>而、頭百姓前後五十五年<sup>二</sup>相成見合も

御座候間、礼服・小脇差可被成御免哉。

例

中村手永五郎丸村頭百姓

文政六年九月

諸平

右付札之通七月廿八日達。

覚

郡浦手永神原村頭百姓

忠兵衛

右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、勤年數<sup>并</sup>多年心懸、出精相

勤候様子共、夫々書面之通相聞申候。以上

午

六月

山口三五左衛門<sup>㊦</sup>

一五九 郡浦新五左衛門 他

(九一三一五)

御内意之覚

郡浦手永御惣庄屋

郡浦新五左衛門

右新五左衛門儀、去々夏以来非常之洪水に付、手永中井樋所<sup>并</sup>井川塘・井手筋等、數ヶ所破損御座候<sup>二</sup>付、速<sup>二</sup>御普請無之候<sup>而者</sup>難相濟ヶ所迄<sup>二</sup>而、其外新堤・新井手掘方彼是取束候<sup>而者</sup>、去々年去年兩年之夫仕莫太之儀<sup>二</sup>而、格別心配仕、加之川尻水理破損之所々<sup>并</sup>野田塘筋笠腹付、且加勢川口仮築等御普請最初積方より出夫中始末罷出、惣夫數五千人余、明俵九千余払出、不一形心配仕、右出夫之内<sup>二</sup>者、遠方<sup>二</sup>而村々止宿仕、難渋<sup>二</sup>および、殊<sup>二</sup>余計之夫立、内輪無余儀筋も有之、雇夫等之取計を<sup>茂</sup>仕、万端無間拔出精仕、且村々庄屋中<sup>江茂</sup>熟和<sup>二</sup>申諭候に付、手永中氣受宜敷、御普請筋何レ之ヶ所も無申分相濟、厚心配仕申候間、彼是被取束乍恐被賞、作紋御上下器具・金子百疋被為拜領被下候様。

松山手永御惣庄屋

山隈権兵衛

右権兵衛儀、去々夏以来川尻水理破損所<sup>并</sup>野田塘筋・笠腹付、且加勢川口仮築等御普請之節々、初発積方立会より無懈怠罷出、手永丁場出夫<sup>二</sup>至候<sup>而者</sup>、始末詰切<sup>二</sup>而厚心配仕、惣鉢松山手永之儀<sup>者</sup>、平常災害多キ所柄<sup>二</sup>而、第一早懸之年柄、養水取之仕法等、専心配仕、井手筋・堤等之浚方且新井手・新堤掘方をも仕、太造之夫仕、殊<sup>二</sup>近年凶作打読、出夫難渋之折柄<sup>二</sup>御座候処、右川尻

水理ニ付、惣夫數九千人余、明儀壹万五千俵余、夫々無異儀差出、下地難渋なから村々庄屋中江茂程能申論候ニ付、手永中氣受茂宜敷、何レ之御普請無間拔出精相働申候ニ付、積前より者案外果敢取無申分成就仕申候儀、権兵衛心配能、行届候処より之儀ニ御座候間、彼是被取束、乍恐被賞、作紋御上下器具・金子百疋被為扨領被下候様。

郡浦手永御郡代手付横目役・唐者拔荷見抄□□左  
勤中諸役人段

木下喜兵衛

松山手永右同断、右同断

井上育太郎

右之面々々々夏以来両手永共非常之洪水ニ付而者、井手筋并井樋所等數ヶ所之損所、且新井手、新堤堀方をも仕、余計之出夫殊ニ近年凶作打読、内輪甚難渋之折柄にて、自手永御普請を茂届兼候程ニ御座候内、右川尻水理被損之所々并野田塘筋笠腹付、加勢川口仮築彼是數度之出夫、不一形心配仕、御普請場ニおいて者、始末詰切相働申候間被取束、乍恐被賞金子貳百疋宛被為扨領被下候様。

郡浦手永塘方助役、在勤中一両一疋

中園英之助

松山手永右同断

野田七右衛門

右面々儀、前条同様御普請中始末罷出、無間拔出精仕、兼而塘方助役之儀者、塘筋損所之模様打廻、平常骨折申候。第一御普請筋

之儀者、農隙を見計、時宜ニ応候而者、一同ニ取懸リ候儀も御座候得者、間二者四方にまたげ出役仕、殊ニ他御郡江之出夫等者、別而難渋之稜も御座候処、川尻水理御普請何レ之丁場も出精仕、無異儀成就仕、格別骨折申候間被取束、乍恐被賞、金子百疋宛被為扨領被下候様。

松山手永老領壹疋

北野安右衛門

右者去々夏以来洪水ニ付而、川尻・野田塘筋・笠腹付并加勢川口仮築御普請之節々、丁場數ヶ所二而塘方助役者人二而者、何分届兼申候間、右安右衛門儀、右御普請中助勤申付、野田七右衛門同様心配仕申候間、乍恐被賞銀貳兩被為扨領被下候様。

右之通乍恐夫々被賞被下候様有御座度、於私奉願候。此段不關御内意仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

已

十一月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

新五左衛門儀、達之通ニ付、作紋麻上下一具可被下置哉。

但前条坂裂順左衛門同段之見込を以、相しらへ申候。

権兵衛儀、右同断ニ付、同麻上下一具可被下置哉。

但右同断。

喜兵衛・育太郎儀、右同断に付、金子貳百疋宛可被下置

哉。

英之助・七右衛門儀、右同断ニ付、金子百疋宛可被下置

哉。

安右衛門儀、右同断ニ付、銀貳両可被下置哉。

(天保六年)

一六一 木下喜兵衛

(九一三二一六)

御内意之覚

郡浦手永居住、在勤中請役人段ニ而、唐物拔  
荷改方御横目、御郡代手付横目并并樋方助役  
兼帯

木下喜兵衛

当六十九才

- 右喜兵衛儀、安永六年より天明二年迄六ヶ年会所小頭相勤申候。
- 一天明三年より文化五年迄二十六ヶ年村役相勤申候。
- 一文化六年より文政二年迄十一ヶ年庄屋并会所役兼帯相勤申候。
- 一文政元年水夫頭兼勤申付、在勤中御郡代直触被仰付候。
- 一文政三年右勤稜々差免、唐物拔荷改方御横目被仰付、御郡代手付横目并并樋方助役申付、当年迄十五ヶ年相勤申候。
- 一天保三年数十年之勤勞被賞、地士本席被仰付候。
- 安永六年より当年迄勤年数都合五十八ヶ年、右之通幼年より会所小頭・村役等数々相勤、惣躰手全成人柄ニ而、庄屋在勤之砌者、村方諸失費を削り、質素儉約を専示シ、勸農を倡、有来候諸出銀をも省減之仕法を付、一稜村方為合ニ相成、当役ニ付而者、手永

中水旱之患を除候仕法筋等手厚、御惣庄屋江申談、零落之村方江者、必多度廻村仕、節檢を示シ、勸農を倡、見聞之筋、正直ニ仕、稜々数十年之在勤中格別精勤仕、一稜御用ニも相立、壹年ニ相成候而も、不相替出精相勤申候間、六十年近キ勤勞被賞、乍恐諸役人段本席被仰付被下候様有御座度、於私奉願候。此段御内意仕候条、重疊宜敷被成御參談可被下候。以上

午

四月

御郡方

中嶋九郎左衛門

御奉行衆中

喜兵衛儀、達之通ニ而、会所小頭以来五十八年唐物拔荷改方御横目被仰付、在勤中諸役人段被仰付、御郡代手付横目并并樋方助役以来十五年ニ相成、諸役人段本席被仰付被下候様、書面之通御座候処、去々年六月村役以来役方五十年余精勤いたし候付、地士本席被仰付候而、三年ニ相成、此步ニ間近ニ有之候間、達之趣先見合可被置哉。然処在役人惣年数四十年以上ニ而、下地寸志等ニ而、進席被仰付置候者、十五・六年以上ニ而、在勤中之席を本席ニ被仰付候見合ニ有之、喜兵衛儀、地士本席以来間近ニ有之候へ共、来年ニ至候得者、七十歳ニおよび、惣年数五十九年、在勤中諸役人段以来十六年ニ相成、地士より之步分四年ニ相成、格別致精勤、一廉御用ニ相立、及老年候而も、不相替出精相勤候旨、委細書面之通ニ而、極老之もの者、年数を被續、進席被仰付候見合も御座候間、来正月ニ至、諸役



人段本席可被仰付哉。

正月十一日申渡。

覚

在勤中諸役人段<sup>二</sup>而、郡浦手永唐物技荷改方御横目、御郡代手付横目并井樋方助役兼帯

木下喜兵衛

右者別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、手全成人物<sup>二</sup>而、数々之役儀、数十年精勤いたし候様子并勤年数、其余之儀共、委細本紙書面之通相聞申候。以上

午

六月

山口三五左衛門<sup>⑩</sup>

一六二 大田黒茂太郎

(九一二一六)

御内意之覚

松山手永笹原村居住、御郡代直触<sup>二</sup>而病死仕候大田黒万七相統之孫

大田黒茂太郎

当年十七才

右茂太郎祖父大田黒万七儀、安永四年郡浦会所見習<sup>二</sup>罷出、同八年小頭申付、寛政十一年会所詰<sup>二</sup>而御免方付申付、数年相勤居申候処、享和三年請免被仰付、右しらへ方一切引請、根役申付置候処、文化十一年御免方根役差免、諸御用錢并諸出銀受払、請込申付、同十三年下代役申付、文政七年下代役差免、会所惣見<sup>二</sup>而御免方申付、且算術手永中指南方をも申付、同八年右会所見<sup>二</sup>持

懸<sup>二</sup>而、郡浦手永城塚村庄屋申付置候処、及老年断願出候<sup>二</sup>付、

文政十三年庄屋役差免、安永四年見習以来文政十三年迄、在役都合五十六年手全出精相勤申候。

一寛政四年津浪之節、諸御用筋格別出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目吉貫文被為拜領候。

一同十二年御困初蔵繕入目錢之内、寸志差出申候処、礼服御免被仰付候。

一文化十一年役方多年出精仕候旨<sup>二</sup>而、無苗・御惣庄屋直触被仰付候。

一文政元年郡浦手永中村難渋之者共より、質地<sup>二</sup>取置候代錢貳貫三百八拾目捨方仕候に付、被賞晒布老反被為拜領候。

一文政三年役方数十年出精仕候旨<sup>二</sup>而、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付候。

一同八年役方五十年余手全出精相勤候旨<sup>二</sup>而、御郡代直触被仰付候。

一同年八代七百町御新地御築立<sup>并</sup>水理御普請出役跡、請御用筋出精仕候旨<sup>二</sup>而、鳥目七百文被為拜領候。

右之通数十年出精相勤候<sup>二</sup>付而者、追々御賞美を<sup>茂</sup>被仰付、惣躰篤実成者<sup>二</sup>而、郡浦会所迄<sup>者</sup>、四里程之道法、昼夜相詰、精勤仕、御免方請込、数十年之内<sup>二</sup>者、種々心配強、就中請免被仰付候<sup>二</sup>付而も入組候。しらへ筋氣根強相働、数々役儀相勤候内、会

所若年之者共并村々帳書共<sup>江</sup>算術指南をも仕、役儀差免候後、当年迄四ヶ年<sup>二</sup>相成、在勤中都合及六十年、稀成人柄<sup>二</sup>而、年来之勤功格別<sup>二</sup>有之、相統之孫茂太郎儀、一躰人物宜敷、往々相応之

御用<sup>二</sup>も相立可申と奉存、其上宇土郡之儀<sup>者</sup>、專海辺を受候所柄御家人及不足、防禦御備手薄有之、旁格別之御僉議を以、乍恐祖父同様御郡代直触被仰付被下候様、於私奉願候。此段御内意仕候条、重畳宣敷被成御參談可被下候。以上

午

十二月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

覚

松山手永笹原村居住、御郡代直触<sup>二</sup>而病死いたし候大田黒万七相続之孫

大田黒茂太郎

右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、祖父万七儀、郡浦会所見習以来、数々役前申付<sup>二</sup>相成、且算術指南方等<sup>茂</sup>手厚世話いたし候儀等、其外勤年数共<sup>二</sup>委細本紙之通<sup>二</sup>而、孫茂太郎儀、人物宣行状等異候唱<sup>茂</sup>承不申候。以上

未

二月

村田仁右衛門<sup>㊦</sup>

茂太郎儀、達之通<sup>二</sup>而、祖父万七儀、惣年数六十年之内、役方五十六年出精相勤候由。書面之通<sup>二</sup>付、追々之見合を以、茂太郎儀、苗字御免・御惣庄屋直触可被仰付哉。

但在御家人役方五十年以上之跡目一段落被召出候儀、追々之見合<sup>二</sup>付、本文之通相しらへ申候。且宇土郡海辺を受候所柄、御家人及不足候付、茂太郎儀、祖父同様御

郡代直触被仰付被下候様、書面之通<sup>二</sup>而、右之申立候<sup>者</sup>、追々父同様被召出候見合も御座候へ共、地土一領一疋迄<sup>二</sup>而、御郡代直触<sup>二</sup>者、例見へ兼、其上寸志等<sup>二</sup>而、次第<sup>二</sup>御家人株<sup>茂</sup>相増候間、容易<sup>二</sup>達之通<sup>二</sup>者、難被仰付、旁本文之通<sup>二</sup>御座候。

二月廿三日達

一六三 河瀬惣太郎

(九一三二一六)

御内意之覚

松山手永松合村居住、宍領宍正<sup>二</sup>而病死仕候河瀬丹十悻

河瀬惣太郎

当年十五才

右河瀬惣太郎祖父河瀬惣兵衛儀、安永八年鳥目五百五拾目寸志銭差出申候<sup>二</sup>付、礼服御免被仰付、寛政十年尚式貫目差出、且取救等仕候処、苗字御免・御惣庄屋直触被仰付、同十一年松山手永難渋之者共為取救、粟七拾五俵差出申候処、同十二年刀御免・御郡代直触被仰付、享和二年五百目寸志差出候処、地土進席被仰付、寛政九年御才覚銀寸志宍貫六拾六匁<sup>并</sup>享和三年関東筋川々御普請御手伝御用<sup>二</sup>付、式貫目都合三貫六十六匁差出候処、文化元年宍領宍正被仰付、文化二年松合村唐者抜荷改御番人被仰付、在勤中諸役人段被仰付、同三年江戸御屋敷御類焼之節、宍貫五百目差出申候処、同六年作紋御小袖一ツ被為拝領、文政十一年病死仕

候。

一右惣太郎親河瀬丹十儀、文政九年松合村出火之節、急飢之者為取  
救、白米貳十五石九斗八升、代錢三貫百拾七匁五分差出申候処、

依願繼目寸志<sup>二</sup>被立下、尚同十二年為民力強、三貫三百目差出申

候<sup>二</sup>付、同年十月親同様一領一疋被仰付、天保二年松合村唐物拔

荷改御番人被仰付、在勤中諸役人段被仰付、相勤居申候処、病氣

差発、去十二月御番人御断奉願候処、願之通御免被成、同月病死

仕候。然処、右丹十存命中、追々差出置申候稜々、左之通。

一錢四貫三百九拾三匁五分四厘

但文政十一年十二月松合村火災<sup>二</sup>付、急飢之者為取救、米穀

差出申候代錢之内、本行之通民力強寸志<sup>二</sup>立被下候。

一同六百七匁九分

但右同村、四度目火災之者取救、且疫病流行<sup>二</sup>付而取救候分

共、右同断

一同壹貫目

但去十二月民力強寸志差出、五歩一上納、残之儀<sup>者</sup>松合村火

災<sup>二</sup>付、松山会所御用錢之内より振出置候内<sup>二</sup>返入被仰付

候。

合六貫壹匁四分四厘

右之通追々差出申候<sup>二</sup>付、丹十倅惣太郎儀、人柄宜敷、武芸之儀

者、<sup>者</sup>炮術中村三左衛門<sup>江</sup>入門仕、劍術小崎平八門弟<sup>二</sup>罷成、稽古

仕、往々御用<sup>二</sup>も相立可申と奉存候間、右六貫一匁余寸志差出置

申候<sup>二</sup>付、乍恐親同様壹領壹疋相続被仰付被下候様、於私奉願

候。此段御用意仕候条、宜敷被成御参談可被下候。以上

午

十二月

御郡方

御奉行衆中

覚

松山手永松合村居住、壹領壹疋<sup>二</sup>而病死仕候

河瀬丹十倅

河瀬惣太郎

右<sup>者</sup>親跡相続別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、祖父代より追々寸

志錢差出候稜々、委細本紙之通<sup>二</sup>相聞、且倅惣太郎儀、人物宜、

武芸稽古いたし候様子<sup>二</sup>而、行状等異候唱<sup>成</sup>承不申候。以上

未

二月

惣太郎儀、達之通<sup>二</sup>而、父河瀬丹十寸志高繼目究之規矩<sup>二</sup>

相当申候間、父同様一領一疋可被召出哉。

二月廿三日達

(天保七年)

一六五 釜賀茂助

(九一二一九)

御内意之覚

松山手永居住、御郡代直触<sup>二</sup>而病死仕候釜賀

五平次倅、立岡村庄屋

釜賀茂助

当申四十一才

中嶋九郎左衛門

右茂助親釜賀五平次儀、天明二年立岡村庄屋申付、文化四年古保里村庄屋兼帯をも申付置候処、同十年依願、古保里村庄屋<sup>者</sup>差免、立岡村迄相勤、当年迄都合五十五年精勤仕申候処、病氣差起、役儀断願出申候間、当四月差免、跡庄屋之儀<sup>者</sup>悴茂助<sup>江</sup>申付候処、右五平次儀、病死仕候。然処五平次儀、一躰手堅者<sup>二</sup>而、村方教諭等能行届、小前々々能帰服仕、庄屋全五十五年相勤、立岡村之儀<sup>者</sup>、別<sup>而</sup>零落所<sup>二</sup>而、年々御年貢・諸出銀等之取立方厚心配仕、其上七ヶ年<sup>者</sup>、古保里村庄屋をも兼勤仕、於松山手永<sup>者</sup>格別精勤仕、追々御賞美等被仰付候稜々、別紙之通<sup>二</sup>御座候。且又悴茂助儀、人物宜敷、親代役以来当年迄、都合十六年手全<sup>二</sup>相勤申候<sup>二</sup>付、旁乍恐御別段を以、親同様御郡代直触相統被仰付被下候様有御座度、於私奉願候。則父子勤年数等、別紙相添、此段御内達仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

申

中嶋九郎左衛門

六月

御郡方

御奉行衆中

覚

私亡父釜賀五平次儀、天明二年寅八月立岡村庄屋役被仰付、文化四年古保里村庄屋兼帯被仰付置候処、同十年九月古保里村之儀<sup>者</sup>、依願御免、立岡村迄<sup>二</sup>被仰付置、当天保七年申年迄都合五十五年相勤申候。然処病氣差発、勤兼申候間、御断奉願候処、当四月如願被仰付、跡役之儀<sup>者</sup>、私<sup>江</sup>被仰付、安心仕、薬用専仕居申候処、養生相叶不申、今年七十七歳<sup>二</sup>而、先達<sup>而</sup>病死仕候。尤在

勤中御賞美等被仰付候稜々、左之通<sup>二</sup>御座候。

一文化三寅十二月役方数年心懸能、出精相勤、村方<sup>江</sup>之教示等宜ク候<sup>二</sup>付、被為賞、礼腹<sup>應</sup>御免被仰付候。

一文化四年より同十年迄七ヶ年古保里村庄屋兼帯被仰付置、依願御免被仰付候節、右村之儀、御用繁之所柄出精仕、旁御鳥目老貫文被為拜領候。

一文政元年村方零落<sup>二</sup>而、万端世話強、小前之者共示方宜、御年貢・諸公役等、手堅取計、当前之御用筋<sup>茂</sup>無間拔多年出精いたし候旨<sup>二</sup>而、無苗<sup>二</sup>而、御惣庄屋直触被仰付候。

一文政八年七百町御新地御築立<sup>二</sup>付、潮留<sup>并</sup>水理御普請之節之夫方召連罷出、致出精候旨<sup>二</sup>而、御鳥目老貫文被為拜領候。

一文政十二年立岡堤御掘添之節、堤底代地、其外諸事厚心配いたし、井樋・塘筋見<sup>二</sup>至迄取計筋行届、各別致出精、且又杉嶋新川堀替<sup>二</sup>付<sup>而</sup>茂、同様出精仕候旨<sup>二</sup>而、苗字御免被仰付候。

一天保二年卯十月役方五十年手全出精仕、村方示方も行届候旨<sup>二</sup>而、御郡代衆御直触<sup>二</sup>被仰付候。

右<sup>者</sup>亡父在勤年数<sup>并</sup>御賞美之稜々書上申候。

一私儀、文政四年巳四月父五平次病中故障等之節、代役御免被仰付置、当四月父跡庄屋役被仰付、代役より十六ヶ年<sup>二</sup>相成申候。

一文政十二丑年立岡堤御掘添之節、諸手伝等始未出精仕候旨<sup>二</sup>而、御鳥目三百文被為拜領候。

一私儀、当年四十一歳<sup>二</sup>罷成、何そ稽古等不仕候。

右<sup>者</sup>亡父勤年数御賞美之稜々<sup>并</sup>私代役以来之儀共書上可申旨、奉畏相しらへ申候処、右之通御座候。以上

御直触<sup>二</sup>而病死仕候釜賀五平次悻

立岡村庄屋

釜賀茂助<sup>㊦</sup>

天保七年五月

山隈権兵衛殿

覚

松山手永立岡村居住、御郡代直触<sup>二</sup>而病死仕

候釜賀五平次悻同村庄屋

釜賀茂助

右<sup>者</sup>別紙申立之趣<sup>二</sup>付、見聞仕候処、人物宜、庄屋代役以来数年  
出精いたし、村方世話筋能行届候由。且亡父勤年数等、其外共委  
細本紙書面之通、相聞申候。以上

申

九月

中西弥三次<sup>㊦</sup>

茂助儀、父釜賀五平次庄屋役五十五年相勤、病死いた  
し候<sup>二</sup>付、父同様、御郡代直触被召出候様。達之通候  
処、父五十年余之勤<sup>二</sup>而者、父之席より一階落被召出  
見合<sup>二</sup>付、茂助儀、苗字御免・御惣庄屋直触可被仰付  
哉。

但茂助儀<sup>茂</sup>、庄屋代役十六年相勤候得共、右年数  
<sup>二</sup>而、父同様<sup>二</sup>者難被仰付見合に付、本文之通相  
しらへ申候。

例

内田手永

深草十蔵

天保三年八月

右<sup>者</sup>、父村庄屋等五十六年之勤<sup>二</sup>而相果、十歳儀も庄屋代  
役以来二十三年相勤候付、父より一段落苗字御免・御惣庄  
屋直触被仰付候事。

右付札之通、九月十九日達。

一六六 江上菊寿

(九一三一九)

御内意之覚

郡浦手永戸口浦村居住、御郡医師並<sup>二</sup>而病死  
仕候江上桂寿養子

江上菊寿

当申二十三才

右菊寿先祖儀<sup>者</sup>、下川一学ト申者<sup>二</sup>而、戸口浦村<sup>江</sup>居住仕、医業  
仕、玄素と申者まで三代、右村支配<sup>二</sup>而御座候処、玄素悻永廣儀  
享保二十年図書殿支配に罷成、苗字江上と相改、医業仕居申候処  
一統支配方御改之節、宝曆三年九月、御郡代直触被仰付、明和三  
年三月病死仕、永廣悻養節儀、同四年親跡御郡代直触相統被仰  
付、医業仕居申候処、安永三年五月病死仕、養節悻江上節廣儀、  
天明二年二月親跡無相違相統被仰付、寛政四年四月病死仕候節廣  
俣江上桂寿儀、寛政元年正月より再春館<sup>江</sup>居寮仕、医学出精仕居  
申候処、親節廣病死仕候<sup>二</sup>付引取、寛政四年十月御郡代直触無相  
違相統被仰付、文化十二年八月家業格別心懸能、療治方手広出精  
仕、所柄難渋之者<sup>江者</sup>、施薬をも仕候<sup>二</sup>付被賞、御郡医師並進席被  
仰付、弥以出精仕居申候処、去十月病死仕候。養子菊寿儀、惣体

篤志<sup>ニ</sup>有之、家業心懸厚、外療之儀<sup>者</sup>、千代村宗杉門弟にて再春館<sup>江茂</sup>罷出、療治懸り村々之儀<sup>者</sup>、養父同様不相替療治仕、殊<sup>ニ</sup>外療をも兼、療治仕候<sup>ニ</sup>付、在中一綾之為合相成、且数代御郡代直触無相達相統被仰付候家筋<sup>ニ</sup>も御座候間、乍恐菊寿儀、御郡代直触相統被仰付被下候様有御座度、於私奉願候。此段御内意仕候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

申

五月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

覚

郡浦手永戸口浦村居住、御郡医師並<sup>ニ</sup>而病死仕候。江上桂寿養子

江上菊寿

右<sup>者</sup>別紙之趣<sup>ニ</sup>付、見聞仕候処、医業心懸能、数年親代診を<sup>茂</sup>いたし、一躰篤美成ル医生<sup>ニ</sup>而、養父病死後<sup>者</sup>、別<sup>而</sup>療治方出精いたし、廻診等能行届候由<sup>ニ</sup>而、所柄為合<sup>ニ</sup>相成候趣共、委細<sup>者</sup>本紙書面之通相聞申候。以上

申

七月

井上繁太<sup>㊦</sup>

菊寿儀、達之通<sup>ニ</sup>付、医業吟味役<sup>江</sup>問合申候処、治療篤志<sup>ニ</sup>有之、学業出精療治方<sup>茂</sup>、相応<sup>ニ</sup>被行候由達有之、科目丁科<sup>ニ</sup>相当申候。再春館御目付見聞之趣<sup>茂</sup>同様之投達有之、御郡医師並之跡目、右之科<sup>ニ</sup>而者、苗

字御免、御惣庄屋直触被仰付筈<sup>ニ</sup>候へとも、先祖より医業之家筋<sup>ニ</sup>而、桂寿迄四台御郡代直触相統いたし居候家<sup>ニ</sup>付、見合も御座候間、菊寿儀<sup>茂</sup>御郡代直触可被仰付哉。但再春館御目付達之書付ハ、寺尾泰俊事一紙<sup>ニ</sup>有之候。

例

(天保八年)

一六七 中熊久米吉

(九一三一一〇)

御内意之覚

松山手永宇土町独礼<sup>ニ</sup>而病死仕候、中熊新蔵

倅

久米吉

当酉四十三才

右久米吉祖父中熊久右衛門と申者、追々寸志錢差出申候<sup>ニ</sup>付、苗字・刀御免、町独礼被仰付置候処、享和二年病死仕、同人倅中熊新蔵儀、同三年親代寸志之訳<sup>ニ</sup>被对、町独礼相統被仰付候。

一錢八貫貳百八匁

但先年御才覚寸志錢差出申候。

一同老貫八百目

但享和三年 御手伝御用<sup>ニ</sup>付、寸志差出申候。

合而拾貫八匁

右之錢辻差出申候処、文化元年新藏江二人扶持被下置候。

右之通、追々依寸志之訳、結構被仰付、新藏儀者、御扶持方をも被為拝領候処、去十二月病死仕候。惣躰新藏親久右衛門代迄者、身上宜敷御座候由<sup>二</sup>而、追々寸志差出、且所柄難渋之者共、取救も手厚取計申候由之処、新藏代<sup>二</sup>至不勝手<sup>二</sup>罷成、当時尚更難渋仕申候。然処新藏儀者、寛政年中別当をも相勤、人柄宜敷者<sup>二</sup>而右倅久米吉儀、不相替人物篤実<sup>二</sup>有之、筆算達者<sup>二</sup>仕、向々御用<sup>二</sup>も相立可申と奉存候。且御才覚寸志之儀者、二代相統之舎を以倡置申候間家、旁親跡相応<sup>二</sup>被召出被下候様有御座度、於私奉願候。則久米吉祖父以来寸志御賞美等、稜々別紙相添、此談御内意奉願候条、宜敷被成御參談可被下候。以上

西

四月

中嶋九郎左衛門

御郡方

御奉行衆中

久米吉儀、達之通<sup>二</sup>而、父新藏儀ハ祖父代寸志之訳<sup>二</sup>因而町独礼被仰付、其後御才覚錢・寸志差出候<sup>二</sup>付、式人扶持被下置候処、去年相果申候。右御才覚錢・寸志之儀者、二代相統之舎を以被倡置候由、達之通<sup>二</sup>而、右寸志<sup>二</sup>限申立之趣<sup>二</sup>よつてハ、父同様被仰付見合に付、久米吉儀、父同様式人扶持被下置町独礼二代目究之通、町別当列可被仰付哉。

但苗字を付候儀者難成御座候。

右之通六月十三日伺、八月廿一日達。

覚

私祖父中熊久右衛門儀、数十年宇土町別当役相勤居候内、安永六年松山手永村々難渋<sup>二</sup>付、為取救鳥目差出候処、同八年亥六月被為賞、無苗<sup>二</sup>而御郡代衆御直触<sup>二</sup>被仰付候。

一人儀、天明二年之冬、村々取救<sup>二</sup>付而、鳥目差出、且追々之借方、又ハ質地を<sup>茂</sup>捨遣<sup>并</sup>宇土町橋掛直之節<sup>茂</sup>、寸志差出、旁被為賞、同三年正月苗字帶刀御免・町独礼<sup>二</sup>被仰付、作御紋麻上下巻具被為拝領候。

一人儀、御巡見様御本宿御繕<sup>二</sup>付而、寸志差出、且宇土町難渋之者共、取救<sup>二</sup>付而、米錢等差遣<sup>并</sup>米救売を<sup>茂</sup>仕候<sup>二</sup>付而、天明八年五月年始門松建候儀、御免被仰付候。

一父中熊新藏儀、享和三年二月親代寸志之訳<sup>二</sup>被為对、町独礼<sup>二</sup>被仰付、苗字帶刀・年始門松建候儀共<sup>二</sup>、御免被仰付候。

一錢八貫式百八匁

但先年御才覚銀、御返済、残錢寸志差上申候。

一同老貫八百目

但享和三年 御手伝御用<sup>二</sup>付、寸志差上申候。

合拾貫八匁

右之錢辻、享和三年寸志<sup>二</sup>差上申候処、父新藏儀、文化元子十月式人扶持被為拝領置候。

右之通追々結構<sup>二</sup>被仰付置候処、父新藏儀、当年七十三歳<sup>二</sup>而当十一月十三日病死仕候。

一私儀当年四十二歳<sup>二</sup>相成申候。

右者 私祖父以来、寸志又ハ御賞美之稜々等、御見合之筋御座候間、書上可申旨奉畏、相しらへ申候処、右之通ニ御座候。以上  
天保七年十二月  
中熊久米吉<sup>㊦</sup>

覚

松山手永宇土町独礼ニ而病死仕候。中熊新蔵  
悴

中熊久米吉

右者 別紙之趣ニ付、見聞仕候処、亡父中熊新蔵代、追々寸志錢差出候儀等、委細<sup>者</sup>別紙書面之通ニ而、行状等異候唱<sup>茂</sup>承不申候。以上

酉

五月

佐治次郎助<sup>㊦</sup>

(天保九年)

一六九 野村新助

(九二二二二)

御内意之覚

松山手永見<sup>抄</sup>并<sup>并</sup>勸農倡方受込兼帯、苗字御免  
・御惣庄屋直触<sup>ニ而</sup>、在勤中御郡代直触、松  
山会所手代

野村新助

五十四歳

右新助儀、寛政十年松山会所見習、享和三年小頭、文化三年所々

御用宅御作事受込、同八年会所詰、同十一年根拟役<sup>ニ而</sup>会所詰兼帯申付、同十四年宇土御知行所御免方、其外諸御用受込、文政二年宇土方受込<sup>者</sup>差免シ、根拟持懸<sup>ニ而</sup>出銀受込、同四年根拟出銀方共<sup>ニ</sup>差免、下代役同十一年手代役繰上、天保二年手永見<sup>抄</sup>申付、在勤中御郡代直触<sup>ニ</sup>被仰付、同年勸農倡方受込、同三年松合村成り立受込<sup>茂</sup>申付、都合年数当年迄四十年之内七ヶ年<sup>者</sup>、三稜之役兼帯任、昼夜無差別類外出精仕候。

一文政十年役方多年手全致出精、受払精密<sup>ニ</sup>有之、御年貢取立方行届、余錢備も無違乱取扱、且養水方之儀、種々致心配、水田之ヶ所跡作仕付候分<sup>茂</sup>、段々致出来、上下一稜之為合<sup>ニ</sup>相成候旨<sup>ニ</sup>而、無苗・御惣庄屋直触被仰付候。

一文政十二年立岡堤掘添<sup>ニ</sup>付、地方御買上、代地取組等、其外御普請<sup>ニ</sup>懸り候筋之儀、一切根<sup>ニ</sup>成申談、差はまり抜群出精いたし、且又杉嶋新川堀替<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も罷出、出精仕候者<sup>ニ而</sup>、苗字御免被仰付候。

一文政十三年家内五夫婦数多<sup>ニ</sup>候処、睦敷精農相励、且宇土御知行所御用筋心配仕候旨<sup>ニ而</sup>、宇土より新助<sup>江</sup>堅<sup>三</sup>引作紋袷羽織一ツ被下置、猶兩親<sup>江</sup>木綿袴反完、家内<sup>江</sup>鳥目老實文被下置候。

一天保二年大勢之家内熟和<sup>ニ</sup>有之、兼々父母<sup>江</sup>能勞り事、且農業精を出し、一躰心得方<sup>茂</sup>宜敷、尤之事<sup>ニ</sup>付被賞、一家内<sup>江</sup>鳥目三貫五百文被下置候。

一文政九年十一月、松合村初度大火之節、竈数式百三拾軒及焼失其節新助儀、御年貢皆済目録仕上ヶ候時分、受持格別繁勤之折柄<sup>ニ</sup>有之候得共、大麥<sup>ニ</sup>付、新助諸取計主<sup>ニ</sup>成り不申候<sup>而</sup>ハ、急<sup>ニ</sup>調



兼可申との見込<sup>ニ</sup>而、先御惣庄屋三隅丈八より新助を松合<sup>江</sup>呼寄、跡家造り渡、急飢取救等之儀、根<sup>ニ</sup>成り取しらへ候様申渡候間、焼失之家・人数千五百拾人余之者共、当前之取統キ、漁道具買継等、取計方根<sup>ニ</sup>成り、数十日心魂を碎キ心配仕候。

一右焼失之もの共、翌春如何躰<sup>ニ</sup>も取統之仕法無之候間、御村救浦入江新地築方<sup>ニ</sup>相成候節<sup>茂</sup>、新助主<sup>ニ</sup>成り、石垣築立、繰石杯寄土手之儀<sup>者</sup>、焼失之もの共召仕イ、賃錢<sup>者</sup>其日々々<sup>ニ</sup>相渡申候<sup>ニ</sup>付、自然と競立、存外果敢取・田作り<sup>ニ</sup>可相成、畝数拾壹町程出来、人別割渡等之儀も相濟、其間始末数十日御普請小屋<sup>江</sup>相詰、入目錢積前より減方仕候様、手を詰取計、大<sup>ニ</sup>心配仕候。

一文政十一年十二月、松合村二度之火災<sup>ニ</sup>而、竈数貳百六拾九軒焼失仕、其節<sup>茂</sup>新助早速駆付、急飢之もの取救、跡家造渡、万端根<sup>ニ</sup>成り取計、数十日松合村<sup>ニ</sup>相詰、心配仕候。

一松合村之儀、竈数余計<sup>ニ</sup>有之候間、救浦<sup>江</sup>家直り一件、文政十二年波戸築立一件入目錢拝借受払等も罷出、心配仕候。

一文政十三年四月猶又松合村再三火災竈数三百三拾五軒及焼失、其節<sup>ニ</sup>至り候<sup>而</sup>ハ、いか躰<sup>ニ</sup>茂手段届兼、いつれ<sup>茂</sup>途方を失イ候処、

新助儀、種々仕法組を以、飢<sup>ニ</sup>及不申様、根<sup>ニ</sup>成り取計、其上松合之者共、救浦<sup>江</sup>是非共数十軒引直シ、以往火災大變<sup>ニ</sup>至り不申様相諭、都合八拾軒程、救浦<sup>江</sup>引直り申候内、先五拾軒程引直、屋敷床・地上ヶ等取懸り、家居掘立<sup>ニ</sup>いたし候<sup>而</sup>ハ、後年保方懸敷有之候<sup>ニ</sup>付、賃屋<sup>ニ</sup>取建候一件、格別<sup>ニ</sup>心配仕候。

一天保二年九月、松合村四度之火災三拾八軒焼失仕、急飢取救、跡家築方<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も、新助始末相詰、厚心配仕候。

一文政十年九月、宇土町出火<sup>ニ</sup>而、竈数七拾貳軒程焼失仕候処、宿町<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、御本陣<sup>者</sup>勿論、跡家至急<sup>ニ</sup>取建不申候<sup>而</sup>ハ、通行之面々、止宿差支候間、早速跡家築方仕候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、富家之者<sup>江</sup>寸志相倡、急飢取救・取計方之儀、新助主<sup>ニ</sup>成り、厚心配仕候。

一同十一年杉嶋・廻江・松山・郡浦式十式ヶ村、水害除として、馬瀬村・樋発増・堀切・新石樋御普請<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、初発積方より立合、御普請所<sup>江</sup>罷出、入目錢受払<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>茂、厚心配仕、水害除キ、往々一稜之為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一縁川筋大曲以前と違、川幅纒四拾間以下之所も有之候<sup>ニ</sup>付、洪水之節、水滞り川上<sup>江</sup>水押上ヶ候害弊、又ハ南之塘手<sup>江</sup>洗付、破損之恐有之候<sup>ニ</sup>付、天保五年大小竈七ヶ所御普請之節、新助受込始末格別心配仕、一稜上下之為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一文政十三年高良村八百人之所柄、田畑作り足り不申、種々産業仕候得共、暮シ方極難涉仕、且立岡堤掘添一件<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、費地・米償等<sup>ニ</sup>付、下り松海辺新地築立候節、新助儀、初発積方より土手丁場割、其外主<sup>ニ</sup>成り取計、貳拾町程之開出来之上、地割一件<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も、数日罷出取計、其後塘手・笠上・服付<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、内井手掘方等<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も、追々出役仕、開明等厚心配仕候。

一新開御米山床取起一件<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、新助<sup>江</sup>受込申付、始より御蔵払<sup>ニ</sup>至り候迄、万端厚申繕仕、一稜上下相成申候。

一文政十一年非常之強風<sup>ニ</sup>付、田畑之病<sup>者</sup>、一統之事<sup>ニ</sup>而、海辺筋損所夥敷、所々新地・塘・井樋・船等之破損多御座候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、早速より跡修覆之積方立合、御普請・入目錢之受払、出夫之申談、又ハ村々御免之願、其外取統方<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も、穀類買備、富家之

者共江手当米申談、彼是心配仕候<sup>ニ</sup>付、いつれ無難取続申候。此儀も新助一稔之切勞<sup>ニ</sup>而、下方之為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一文政十二年閏東筋川々御普請御用 御手伝<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>者、反懸・軒懸上納<sup>并</sup>寸志信方等、新助<sup>江</sup>受込申付、惣高百貫目近キ上納取立相納、厚心配仕候。

一字土人馬所之儀、年増在割賦之人馬相増、間違延引等、頻々<sup>而</sup>御座候<sup>處</sup>、天保四年より新助<sup>江</sup>受込申付、嚴重<sup>ニ</sup>取計、一稔上下為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一天保二年窮民御取救寸志御免被仰付候<sup>處</sup>、松山手永之儀、別<sup>而</sup>近年災害打続、窮民多ク御座候<sup>而</sup>、兎哉角相暮候者共<sup>茂</sup>、追々出方多ク進<sup>ミ</sup>兼、断勝<sup>ニ</sup>而寸志決兼申候間、向々<sup>江</sup>新助儀、数度罷越、種々内談をも仕、都合百貫目余寸志高出来、当前之取救を初、後年迄丈夫之備も出来仕候儀、畢竟新助厚心配仕候故<sup>ニ</sup>奉存候事。

一文政十一年以来、凶作打続、年々糧物難渡仕候<sup>ニ</sup>付、糧物買備一件受込申付候<sup>處</sup>、富家之者共<sup>江</sup>救売申談仕、余計之儀<sup>者</sup>買備、格別之直断下候<sup>而</sup>、救売出来仕、於松山手永心遣無之儀、取計候次第、新助厚心配仕、一稔所柄之御為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一松山会所之儀、年久敷家居<sup>ニ</sup>而、近年解崩<sup>ニ</sup>相成、仮住居仕居申候<sup>處</sup>、何分右之通<sup>ニ</sup>而<sup>者</sup>、御用筋弁兼申候間、依願建直、入目錢之儀<sup>者</sup>、民力強寸志相倡、難渡之小百姓共より出錢少仕候様、取計及成就申候。右一件<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>茂、新助格別<sup>ニ</sup>心配仕候。

一文政十一年新助<sup>江</sup>手代役申付候以後、諸御用錢受払、根方受持、根帳出入之糺方、且近年格別御用錢<sup>茂</sup>相増、手数も多御座候<sup>處</sup>、

新助受込之手数夫々行届、其上手永見<sup>抄</sup>、勸農方兼勤いたし候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、村々小前々々精惰を糺、時候等怠り不申候様打廻り、頻々誘立申候間、根付・草浚いつれ<sup>茂</sup>出精相励之間、零落所往々吃<sup>ト</sup>相立可申、一稔取柄之為合<sup>ニ</sup>相成申候。

一立岡大堤掘添<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>、入目錢拝借、松合・宇土町数度之火<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>も拝借、其外所々新地築立等之入目錢、都合五百六拾貫目余御間より拝借奉願、返納之手筋付兼、年々延願迄<sup>ニ</sup>相成居候<sup>處</sup>、右新助<sup>江</sup>返納受込申付候以来、返納之仕法・組立、年々莫大之錢高返納仕、今分之見直<sup>ニ</sup>御座候得<sup>ハ</sup>、無相違返納皆済仕可申、右<sup>ニ</sup>付<sup>ハ</sup>、新助格別心配仕候。

一松合村之儀、一旦離散之躰<sup>ニ</sup>も、相見申候<sup>處</sup>、成立之儀、新助<sup>江</sup>申付候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>ハ、差寄救浦<sup>江</sup>家直シ等之取計いたし、野開・畝割受持<sup>者</sup>、唐芋苗買渡等之入目錢之手配仕、彼是心配厚仕候故、年増成立、最早聊<sup>茂</sup>心遣之儀無御座、式千五百人之者共、今分<sup>ニ</sup>而<sup>者</sup>、往々安居可仕、其上追々右村<sup>江</sup>罷越、産業等セリ立、驗約<sup>茂</sup>相守り候<sup>杯</sup>、専ラ教示仕候間、以前<sup>ニ</sup>見合候得<sup>者</sup>、格別<sup>ニ</sup>万端出精仕候様成行申候次第、全新助功勞<sup>ニ</sup>而御座候。

右之通新助功績之外、平常余時御用、其余会所向一切之御用筋、心懸厚手全<sup>ニ</sup>出精仕、被為賞候<sup>而</sup>、当年迄十一ヶ年<sup>ニ</sup>も相成り、其以来前条之功勞数々御座候間、右被為対年数功績、御郡代直触本席<sup>ニ</sup>被召直被下候様奉願候。此段御内意仕候条、可然様被成御參談可被下候。以上

天保八年六月

御郡方

齊藤三郎

御奉行衆中

新助儀、達之通御座候処、会所手代等ハ、三十年以上  
ニ而、無苗御惣庄屋直触、四十年以上ニ而、苗字御免  
五十年以上ニ而、御郡代直触被仰付候見合御座候。新  
助儀ハ、会所詰以來四十年ニ相成、無苗御惣庄屋直触  
ニ者、三十年目ニ而被仰付、引統立岡堤掘之節、功ニよ  
リ三十二年目ニ苗字御免・御惣庄屋直触被仰付、夫よ  
リ九年ニ相成、惣躰之年数ニ而ハ、此節苗字御免ニ相  
当申候処、右之通苗字御免ハ引上り居候事ニ而、かや  
う之類ハ、一階完被引上候見合有之、十年目々々位ニ  
而ハ、進席被仰付候間、来年ニ至り候へハ、前賞より  
十年ニ相成、惣年数も四十年を越し、松合村度々之火  
災、其外稜々勤勞も御座候付、来年達之通御郡代直触  
可被仰付哉。当年迄ハ見合可被置哉。

右付札之通、戌二月十日達

覚

松山手永見抄并勸農倡方受込兼帶、苗字御免

御惣庄屋直触ニ而、在勤中御郡代直触、松山

会所手代

野村新助

右者、別紙之趣ニ付、見聞仕候処、手全成生質ニ而、役前心掛  
厚、諸事吞込能、精勤仕、一体功熟いたし居候人物之田ニ而、別  
冊積書之通、松合村数度之火災後、跡家取建方を初メ、其所々  
太造之御普請向等、臨時之御用受込申付ニ相成候由ニ付而者、万

端無間抜格別出精仕候様子ニ而、稜々功驗ニ依而者、所柄一稜為合  
ニ相成候由。惣躰松山手永之儀、追々太造之御普請被仰付、殊ニ  
松合村・宇土町之大火且莫太之拝借錢返納、彼是ニ付而者、会所  
向繁雜ニ有之たる哉ニ候処、右新助儀、数年手代役ニ而、諸事主ニ  
成申談、昼夜詰切程ニ而、精勤いたし、別而骨折茂仕候趣ニ而、功  
績格別之人物と相唱申候。其外勤年数共、委細者別冊申立之通承  
り申候。以上

酉

九月

池松善助印

## 登録番号対照表

番号	人 名	永青文庫番号	県立 図書館 番号
文政4年(1821)			
88	坂田文助 他	9-20-11	1330
89	井上甚次 他	9-20-11	1334
90	次助 他	9-20-11	1334
文政5年(1822)			
91	井上甚平 他	9-20-12	1336
92	西村新作 他	9-20-12	1337
93	今村彦兵衛 他	9-20-12	1338
94	吉田卯太郎	9-20-13	1342
95	松本権平 他	9-20-13	1343
文政6年(1823)			
96	高濱孫助	9-20-14	1348
97	糸石寿軒	9-20-15	1354
文政7年(1824)			
98	松岡謙濟	9-20-16	1358
文政8年(1825)			
99	江口儀兵衛	9-21-1	1373
100	大田黒万七	9-21-2	1376
101	正垣熊次	9-21-2	1379
文政9年(1826)			
102	松本岩右衛門	9-21-3	1380
103	中園英之助 他	9-21-3	1381
104	田邊藤吉	9-21-3	1382
105	中熊勝平	9-21-4	1393
106	太七 他	9-21-4	1393
107	清八 他	9-21-4	1393
108	中熊勝平	9-21-4	1393
文政10年(1827)			
109	芥川源之助 他	9-21-5	1396
110	嶋田源之助	9-21-5	1400

番号	人 名	永青文庫番号	県立 図書館 番号
文政11年(1828)			
111	松岡謙濟 他	9-21-7	1405
文政12年(1829)			
112	庄兵衛	9-21-9	1420
113	小山丈平 他	9-21-9	1420
114	甚平	9-21-9	1420
115	近藤衛守	9-21-9	1421
116	孫七	9-21-9	1421
117	濱田三弥 他	9-21-10	1424
文政13年(1830)			
118	武平 他	9-21-10	1425
119	沢田忠右衛門	9-21-10	1427
120	鎌賀儀兵衛 他	9-21-12	1432
天保元年(1830)			
121	武七	9-21-12	1438
天保2年(1831)			
122	藤平	9-21-13	1443
123	彦太	9-21-13	1443
124	井上甚之助 他	9-21-13	1445
125	井上育太郎	9-21-13	1445
126	北野甚七	9-21-13	1445
127	大田黒圓右衛門他	9-21-14	1447
128	宇七	9-21-14	1448
129	伊左衛門	9-21-14	1449
130	井上藤次郎 他	9-21-14	1449
131	木村政吉	9-21-14	1451
天保3年(1832)			
132	澤田忠三郎 他	9-22-1	1460
133	右山貞助 他	9-22-1	1460
134	宇七 他	9-22-1	1461

番号	人 名	永青文庫 番 号	県立 図書館 番 号	備 考
135	松浦圓助 他	9-22-1	1462	
136	北野安右衛門 他	9-22-1	1462	
137	北野甚右衛門 他	9-22-1	1462	
138	安谷庄三郎 他	9-22-1	1465	
139	門田寿吉郎	9-22-2	1471	
140	林七	9-22-2	1471	
天保4年(1833)				
141	筑紫春吹	9-22-3	1473	本書未収録 第3集掲載
142	松山権兵衛	9-22-3	1473	
143	大田黒圓右衛門	9-22-3	1474	
144	野田林太郎	9-22-3	1474	
145	江口儀兵衛	9-22-3	1475	
天保5年(1834)				
146	清八	9-22-4	1483	本書未収録 第3集掲載
147	松田三成 他	9-22-4	1483	
148	嘉平太 他	9-22-4	1483	
149	西山新左衛門、 他村々庄屋	9-22-4	1483	
150	光暁寺	9-22-4	1483	
151	本田定次	9-22-4	1483	
152	中村小左衛門 他	9-22-4	1483	
153	弥十郎 他	9-22-4	1483	
154	勇七	9-22-4	1486	本書未収録 第3集掲載
155	本田栄	9-22-4	1486	
156	藤本茂郎太	9-22-4	1486	
157	忠兵衛	9-22-4	1486	
158	後藤五郎右衛門	9-22-5	1496	本書未収録 第3集掲載
159	郡浦新五左衛門 他	9-22-5	1496	
160	辛川良右衛門 他	9-22-5	1496	本書未収録 第3集掲載
天保6年(1835)				
161	木下喜兵衛	9-22-6	1497	

番号	人 名	永青文庫 番 号	県立 図書館 番 号	備 考
162	大田黒茂太郎	9-22-6	1498	
163	河瀬惣太郎	9-22-6	1498	
164	作兵衛	9-22-6	1498	本書未収録 第3集掲載
天保7年(1836)				
165	釜賀茂助	9-22-9	1520	
166	江上菊寿	9-22-9	1520	
天保8年(1837)				
167	中熊久米吉	9-22-10	1533	
天保9年(1838)				
168	沢田良平	9-22-11	1536	本書未収録 第3集掲載
169	野村新助	9-22-11	1536	

新宇土市史基礎資料 第二集

町在 (二) — 文政四〜天保十年 —

発行 宇土市教育委員会  
熊本県宇土市浦田町五一番地

発行日 平成八年三月二九日

印刷 中川デザイン企画  
熊本市八王寺九一二



